

特別史跡

# 一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告Ⅹ

第51・52次調査

2010

福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館

口絵1 第51・52次調査遺構(1)



第51・52次調査区全景(北から)



第51次調査 「医師の家」主要部(西から)

口絵2 第51・52次調査遺構(2)



第51次調査 小区画群(東から)

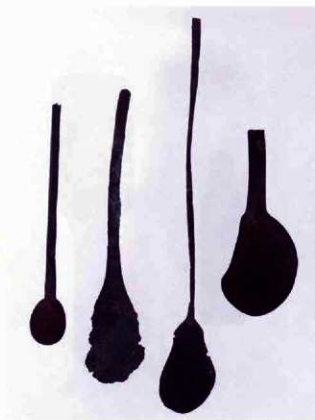


第52次調査 区画52-1(北から)

口絵3 第51次調査出土遺物



区画51-15出土の中国陶磁



第51次調査出土の匙



第51次調査出土の櫛

口絵4 第52次調査出土遺物



区画52-1 出土の柱

柱の墨書



区画52-2 出土の杓子と神像

## 序

特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡の調査は、昭和42年(1967)の諏訪館跡庭園の発掘整備以来、43年の長きにわたって実施されてきました。その概要については、各年度の「発掘調査整備事業概報」や「朝倉氏遺跡資料館紀要」で報告してきました。しかし、報告書の刊行については、2年に1冊刊行予定であることや膨大な出土遺物の整理、検出遺構の検討、それに調査担当者の交代等々もあって、誠に遺憾ながら遅れがちであることは否めません。この度【特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告X 第51・52次調査】を刊行いたします。

一乗谷川西岸の赤淵、奥間野、吉野本地籍の約2万㎡の発掘調査は、この昭和60年度に実施した第51・52次調査ではほぼ終了しました。高さ約1.5m(9面)に嵩上げされた道路遺構の検出をはじめ、東西道路が105m(約350尺)等間て縄張りされていること、寺院や武家屋敷、町屋などが計画的に配置、建設されていることなど戦国時代城下町の様相が明らかになりました。

さて、今回報告する第51・52次調査の最大の成果は、日本で初めて「医師の屋敷」を明らかにすることができたことです。上塁と溝で区画された中規模屋敷(面積約480㎡)の礎石建物(SB3060)南側に位置する越前焼の壺穴(SX3115)付近で、炭化した医学書(中国金・元代の『湯液本草』)の断簡が出土しました。青磁片口鉢や乳鉢、銅匙、竿秤に使用した銅製の鏡なども出土しました。さらに、この屋敷では土塁を背にして幅1.5mの枯山水の平庭が検出され、12~14世紀の口禿の白磁皿や腰折れタイプの皿、青白磁梅瓶、青磁刻花文盤、ひび割れを縫留めで修理した青磁壺などの優品が出土しました。この屋敷の医者は、威信財とも言える高価な骨董品を集め、庭を眺め、茶を嗜む風流人でもあったようです。文献等では、谷野一栢、三崎安指、半井明重、大月景秀、印牧庵、上池庵、融国正孝など医術で朝倉氏に仕えた人物の名前は分っていますが、その日常生活を復元することは難しいといえるでしょう。今後、一乗谷の城下町に暮らした人々の暮らしぶりが発掘調査によって徐々に明らかになることを期待したいものです。

なお、事業の実施にあたりましては、文化庁をはじめ県、市の関係各位、ならびに城戸ノ内をはじめとする地元の皆様のひたかたならぬご指導、ご協力をいただき、感謝にたえないところです。今後ともなお一層のご支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成22年3月

福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館  
館長 水野和雄

# 目 次

|             |    |
|-------------|----|
| II 総<br>序   |    |
| 目次          | 7  |
| 図版目次        | 8  |
| <br>        |    |
| I 事業概要      |    |
| 1. 調査の目的    | 1  |
| 2. 調査の経過    | 1  |
| 3. 調査の体制    | 5  |
| 4. 本報告書について | 7  |
| <br>        |    |
| II 第51次調査   |    |
| 1. 調査の経過と概要 | 9  |
| 2. 遺構       | 12 |
| 3. 遺物       | 20 |
| <br>        |    |
| III 第52次調査  |    |
| 1. 調査の経過と概要 | 33 |
| 2. 遺構       | 36 |
| 3. 遺物       | 43 |
| <br>        |    |
| IV 小 結      | 57 |

## 図 版 目 次

### 口 絵(カラー)

口絵 1 第51・52次調査遺構(1)  
口絵 2 第51・52次調査遺構(2)

口絵 3 第51次調査出土遺物  
口絵 4 第52次調査出土遺物

### 図 面

#### 第51次調査

第 1 図 第51次調査遺構詳細図(1)  
第 2 図 第51次調査遺構詳細図(2)  
第 3 図 第51次調査遺構詳細図(3)  
第 4 図 第51次調査遺構詳細図(4)  
第 5 図 第51次調査遺構詳細図(5)  
第 6 図 第51次調査遺構詳細図(6)  
第 7 図 第51次調査出土遺物(1)  
第 8 図 第51次調査出土遺物(2)  
第 9 図 第51次調査出土遺物(3)  
第10図 第51次調査出土遺物(4)  
第11図 第51次調査出土遺物(5)  
第12図 第51次調査出土遺物(6)  
第13図 第51次調査出土遺物(7)  
第14図 第51次調査出土遺物(8)  
第15図 第51次調査出土遺物(9)  
第16図 第51次調査出土遺物(10)

第17図 第51次調査出土遺物(11)  
第18図 第51次調査出土遺物(12)  
第19図 第51次調査出土遺物(13)  
第20図 第51次調査出土遺物(14)  
第21図 第51次調査出土遺物(15)  
第22図 第51次調査出土遺物(16)  
第23図 第51次調査出土遺物(17)  
第24図 第51次調査出土遺物(18)  
第25図 第51次調査出土遺物(19)  
第26図 第51次調査出土遺物(20)  
第27図 第51次調査出土遺物(21)  
第28図 第51次調査出土遺物(22)  
第29図 第51次調査出土遺物(23)  
第30図 第51次調査出土遺物(24)  
第31図 第51次調査出土遺物(25)  
第32図 第51次調査出土遺物(26)

#### 第52次調査

第33図 第52次調査遺構詳細図(1)  
第34図 第52次調査遺構詳細図(2)  
第35図 第52次調査遺構詳細図(3)  
第36図 第52次調査遺構詳細図(4)  
第37図 第52次調査遺構詳細図(5)  
第38図 第52次調査遺構詳細図(6)  
第39図 第52次調査出土遺物(1)  
第40図 第52次調査出土遺物(2)  
第41図 第52次調査出土遺物(3)  
第42図 第52次調査出土遺物(4)  
第43図 第52次調査出土遺物(5)  
第44図 第52次調査出土遺物(6)  
第45図 第52次調査出土遺物(7)

第46図 第52次調査出土遺物(8)  
第47図 第52次調査出土遺物(9)  
第48図 第52次調査出土遺物(10)  
第49図 第52次調査出土遺物(11)  
第50図 第52次調査出土遺物(12)  
第51図 第52次調査出土遺物(13)  
第52図 第52次調査出土遺物(14)  
第53図 第52次調査出土遺物(15)  
第54図 第52次調査出土遺物(16)  
第55図 第52次調査出土遺物(17)  
第56図 第52次調査出土遺物(18)  
第57図 第52次調査出土遺物(19)  
第58図 第52次調査出土遺物(20)



## 写真図版

### 第51次調査

- |       |                       |       |                |
|-------|-----------------------|-------|----------------|
| PI. 1 | 第51次調査区全景             | PI.21 | 第51次調査出土遺物(7)  |
| PL. 2 | 第51次調査 区画51-1         | PL.22 | 第51次調査出土遺物(8)  |
| PI. 3 | 第51次調査 区画51-4         | PI.23 | 第51次調査出土遺物(9)  |
| PL. 4 | 第51次調査 区画51-4         | PL.24 | 第51次調査出土遺物(10) |
| PL. 5 | 第51次調査 区画51-4         | PL.25 | 第51次調査出土遺物(11) |
| PL. 6 | 第51次調査 区画51-5~14      | PL.26 | 第51次調査出土遺物(12) |
| PL. 7 | 第51次調査 区画51-5、9、11、12 | PI.27 | 第51次調査出土遺物(13) |
| PI. 8 | 第51次調査 区画51-11、14     | PL.28 | 第51次調査出土遺物(14) |
| PL. 9 | 第51次調査 石敷遺構・石積遺構・井戸   | PL.29 | 第51次調査出土遺物(15) |
| PL.10 | 第51次調査 区画51-15        | PL.30 | 第51次調査出土遺物(16) |
| PL.11 | 第51次調査 区画51-15        | PI.31 | 第51次調査出土遺物(17) |
| PI.12 | 第51次調査 区画51-15        | PL.32 | 第51次調査出土遺物(18) |
| PL.13 | 第51次調査 区画51-15 各遺構    | PL.33 | 第51次調査出土遺物(19) |
| PL.14 | 第51次調査 溝              | PL.34 | 第51次調査出土遺物(20) |
| PL.15 | 第51次調査出土遺物(1)         | PI.35 | 第51次調査出土遺物(21) |
| PL.16 | 第51次調査出土遺物(2)         | PL.36 | 第51次調査出土遺物(22) |
| PI.17 | 第51次調査出土遺物(3)         | PL.37 | 第51次調査出土遺物(23) |
| PI.18 | 第51次調査出土遺物(4)         | PL.38 | 第51次調査出土遺物(24) |
| PL.19 | 第51次調査出土遺物(5)         | PL.39 | 第51次調査出土遺物(25) |
| PL.20 | 第51次調査出土遺物(6)         | PL.40 | 第51次調査出土遺物(26) |

### 第52次調査

- |       |                    |       |                |
|-------|--------------------|-------|----------------|
| PL.41 | 第52次調査区全景          | PI.56 | 第52次調査出土遺物(6)  |
| PL.42 | 第52次調査 区画52-1~3    | PI.57 | 第52次調査出土遺物(7)  |
| PI.43 | 第52次調査 区画52-3、4    | PL.58 | 第52次調査出土遺物(8)  |
| PL.44 | 第52次調査 区画52-5、6    | PL.59 | 第52次調査出土遺物(9)  |
| PL.45 | 第52次調査 区画52-6      | PL.60 | 第52次調査出土遺物(10) |
| PL.46 | 第52次調査 区画52-7      | PI.61 | 第52次調査出土遺物(11) |
| PL.47 | 第52次調査 区画52-7、8    | PL.62 | 第52次調査出土遺物(12) |
| PL.48 | 第52次調査 区画52-8      | PL.63 | 第52次調査出土遺物(13) |
| PL.49 | 第52次調査 区画52-8、道路・溝 | PL.64 | 第52次調査出土遺物(14) |
| PL.50 | 第52次調査 溝           | PL.65 | 第52次調査出土遺物(15) |
| PL.51 | 第52次調査出土遺物(1)      | PI.66 | 第52次調査出土遺物(16) |
| PL.52 | 第52次調査出土遺物(2)      | PL.67 | 第52次調査出土遺物(17) |
| PL.53 | 第52次調査出土遺物(3)      | PL.68 | 第52次調査出土遺物(18) |
| PL.54 | 第52次調査出土遺物(4)      | PL.69 | 第52次調査出土遺物(19) |
| PI.55 | 第52次調査出土遺物(5)      | PL.70 | 第52次調査出土遺物(20) |

## 挿 図

- |     |                   |      |                  |
|-----|-------------------|------|------------------|
| 挿図1 | 特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡調査地略図 | 挿図8  | 第52次調査区グリッド設定図   |
| 挿図2 | 第51次調査区周辺地形図      | 挿図9  | 第52次調査区略図        |
| 挿図3 | 第51次調査区グリッド設定図    | 挿図10 | 銅銭出土状況           |
| 挿図4 | 第51次調査区略図         | 挿図11 | 土堀基礎石垣SA3184     |
| 挿図5 | 第51次調査区略図         | 挿図12 | 土堀基礎石垣SA3184     |
| 挿図6 | 『湯渡本草』断簡          | 挿図13 | 52-1区置出土柱の拓影と実測図 |
| 挿図7 | 第52次調査区周辺地形図      | 挿図14 | 赤酒・奥間野・吉野本地区概念図  |

## 表

- |    |                    |    |                 |
|----|--------------------|----|-----------------|
| 表1 | 特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡調査回数一覧 | 表5 | SX3229出土銭貨構成    |
| 表2 | 第51次出土遺物一覧表        | 表6 | SX3229出土銭貨唐銭の構成 |
| 表3 | 第52次出土遺物一覧表        | 表7 | SX3229出土銭貨明銭の構成 |
| 表4 | SX3229出土銭貨一覧表      |    |                 |

## 附 図

- |     |                 |     |                |
|-----|-----------------|-----|----------------|
| 附図1 | 特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡地形図 | 附図2 | 第51・52次調査遺構全測図 |
|-----|-----------------|-----|----------------|

# I 事業概要

# I 事業概要

## 1. 調査の目的

特別史跡・一乗谷朝倉氏遺跡は戦国大名越前朝倉氏が領国支配の拠点とした所であり、当主の館を中心として山城、城戸、一族・家臣の屋敷、町屋、寺院等の遺構が一体となって残されている。こうした遺跡を国民の文化遺産として永久に保存するため特別史跡に指定し、公有化を進めている。遺跡保護の目的はたんに遺構を保存するだけにとどまらず、遺跡を調査してその成果を広く公表し、一般の歴史認識に役立てて活用することにある。その方策として遺跡の中に身を置いて「自ら歴史と生きた対話」のできる史跡公園の完成を目指している。こうした理念のもとに一乗谷朝倉氏遺跡の調査と整備が進められているが、発掘調査は当時の一乗谷の規模や構造、人々の暮らしぶりの実態等を直接的に明らかにする最も有力な方法と位置付けられる。計画的にかつ連続的になされた発掘調査の成果に基づいて着実な環境整備が施され、かつ適切な維持管理のもと遺跡を公開する、その前提条件のひとつとしてこれまで調査が続けられてきた。

本報告書は、一乗谷朝倉氏遺跡に対する計画的な発掘調査の結果を報告したものであり、その第10冊に当たる。その他、道路・河川の整備事業や中山間事業などの現状変更に伴う発掘調査の報告は別途なされている。また各年次の発掘調査・整備事業の概要はすべて当該年次の概報として公開されているが、本書で正式に調査所見を報告し、内容については本報告書が優先する。

## 2. 調査の経過

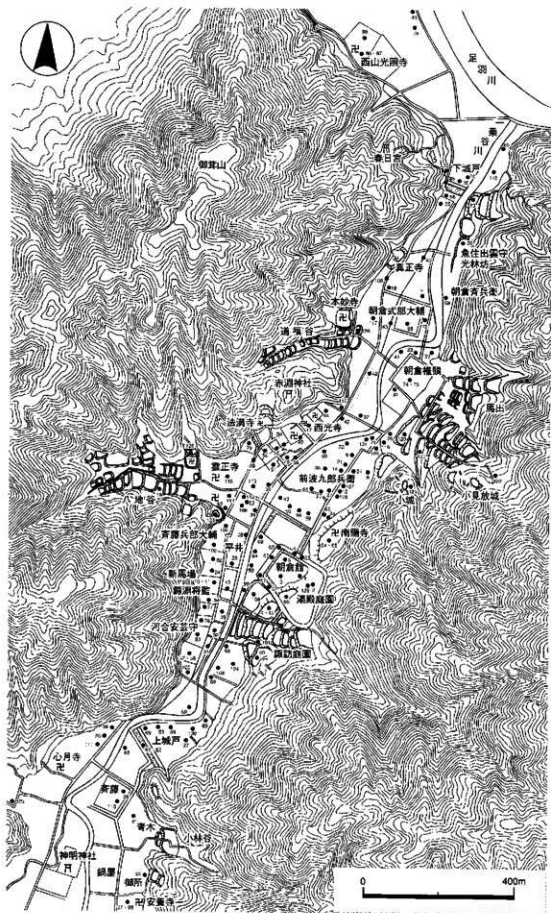
一乗谷朝倉氏遺跡に対する計画的な調査は昭和42年度から足羽町教育委員会を事業主体として始められた。昭和46年度から福井県教育委員会がそれを引き継いで、発掘調査と環境整備事業を実施し、福井市が用地取得と遺跡の管理を担当するという機能分担で事業を進めている。同年7月278haという広大な地域が国の特別史跡に格上げ指定され、福井県は昭和47年3月に策定された「朝倉氏史跡公園基本構想」のもと、同年4月に福井県教育庁朝倉氏遺跡調査研究所を設置し、以後5ヵ年計画により継続して発掘調査と環境整備を実施した。これ以前の足羽町と福井県教育委員会による調査を第1次5ヵ年計画とし、以後昭和61年度まで4次にわたって5ヵ年計画が進められた。第1次5ヵ年計画では、朝倉氏の最後の当主である朝倉義景の館跡を中心として調査を行い、第2次5ヵ年計画ではそれに引き続き平井地係の武家屋敷や朝倉義景館跡に隣接する中の御飯跡、赤瀨地係に所在するサイゴ寺跡、指定地の北部に位置する瓢箪地係や出雲谷地係など、武家屋敷、寺院、町屋などとみられるいくつかの地点を選択して一乗谷の概況を把握する試みがなされた。第3次5ヵ年計画では、一乗谷川の西側に敷設されることになった県道鯖江・美山線の改良工事に関連して、その両側の平地部分を計画的に調査した。引き続き第4次5ヵ年計画ではその最初の4年で指定地の中央に位置する一乗谷川より西側の赤瀨・奥間野・吉野本地係を集中的に発掘調査し、この地区の道路、武家屋敷、寺院、町屋等の極めて良好な遺構を検出し、大量の遺物が出土して大きな成果をあげた。本報告書は、この第4次5ヵ年計画の4年目に

| 年度    | 期別   | 期名(計画) | 主要調査結果   | 調査校数               | 調査項目・内容                | 種類                 | 報告書      | 調査(冊) |       |
|-------|------|--------|--|--------------------|------------------------|--------------------|----------|-------|-------|
| 昭和42年 | 1967 | 第1次5ヶ年 | ・教育の役割と教育の発展の<br>準備に付する調査、調査から形<br>する。調査結果に基づいて調査<br>は、日本中を占めるの成立に<br>児童を調査した。 | 定例                 | 加通路、品川、志保、志保           | I                  | I        | 1,800 |       |
| 昭和43年 | 1968 | 昭和44年  |  | 1969               | 調査校                    | 城戸ノ内町字新橋(徳島県徳島市西条) | I        | I     | 2,065 |
| 昭和45年 | 1970 | 調査校    |  | 城戸ノ内町字新橋(徳島県徳島市北条) | I                      | I                  | 1,653    |       |       |
| 昭和46年 | 1971 | 調査校    |  | 徳川、安楽寺             | 徳川ノ内町字新橋               | II                 |          | 676   |       |
|       |      |        |  | 第1次                | 城戸ノ内町字新橋               | III                | I        | 676   |       |
|       |      |        |  | 第2次                | 城戸ノ内町字新橋               | III                | I        | 34    |       |
|       |      |        |  | 第3次                | 城戸ノ内町字新橋               | III                | I        | 1,062 |       |
|       |      |        |  | 第4次                | 城戸ノ内町字新橋(中ノ内町字新橋)      | IV                 | I        | 1,393 |       |
|       |      |        |  | 第5次                | 城戸ノ内町字新橋(徳島県徳島市西条)     | V                  | I        | 1,305 |       |
|       |      |        |  | 第6次                | 城戸ノ内町字新橋14 7-1         | V                  | I        | 172   |       |
| 昭和48年 | 1973 | 第2次5ヶ年 | 県教育委員会の調査が終了<br>し、調査報告書を作成し、児童<br>の調査を依頼する。<br>児童や職人の二種調査が実施<br>される。           | 第7次                | 城戸ノ内町5 32-1, 33, 36-1  | V                  |          | 246   |       |
|       |      |        |  | 第8次                | 城戸ノ内町字新橋13-25-26       | V                  |          | 50    |       |
|       |      |        |  | 第9次                | 城戸ノ内町字新橋(徳島県徳島市西条)     | V                  | I        | 178   |       |
|       |      |        |  | 第10次               | 城戸ノ内町字新橋               | V                  | II       | 2,425 |       |
|       |      |        |  | 第11次               | 城戸ノ内町字新橋               | V                  | II       | 1,240 |       |
|       |      |        |  | 第12次               | 徳島県徳島ノ内町字新橋            | V                  | II       | 108   |       |
|       |      |        |  | 第13次               | 城戸ノ内町字新橋(中ノ内町字新橋)      | V                  | II       | 2,230 |       |
|       |      |        |  | 第14次               | 城戸ノ内町字新橋23-1 新橋字       | V                  |          | 42    |       |
|       |      |        |  | 第15次               | 城戸ノ内町字新橋、川合、平井、高橋      | V                  | IV       | 2,400 |       |
|       |      |        |  | 第16次               | 西条町1 4(中ノ内町字新橋)        | V                  | IV       | 350   |       |
| 昭和49年 | 1974 | 第3次5ヶ年 | 調査報告書を作成し、児童<br>の調査を依頼する。<br>児童や職人の二種調査が実施<br>される。                             | 第17次               | 城戸ノ内町字新橋               | V                  | V        | 2,050 |       |
|       |      |        |  | 第18次               | 城戸ノ内町字新橋               | V                  |          | 2,500 |       |
|       |      |        |  | 第19次               | 城戸ノ内町字新橋143 1          | V                  |          | 396   |       |
|       |      |        |  | 第20次               | 城戸ノ内町字新橋2-4            | V                  | II       | 2,200 |       |
|       |      |        |  | 第21次               | 城戸ノ内町字新橋               | V                  |          | 100   |       |
|       |      |        |  | 第22次               | 城戸ノ内町字新橋14 6           | V                  |          | 100   |       |
|       |      |        |  | 第23次               | 城戸ノ内町字新橋8-8-1          | V                  |          | 30    |       |
|       |      |        |  | 第24次               | 城戸ノ内町字新橋               | V                  | IV       | 2,200 |       |
|       |      |        |  | 第25次               | 城戸ノ内町字新橋、川合            | V                  | IV       | 2,400 |       |
|       |      |        |  | 第26次               | 城戸ノ内町字新橋9 11 1         | V                  |          | 36    |       |
| 昭和50年 | 1975 | 第3次5ヶ年 | 調査報告書を作成し、児童<br>の調査を依頼する。<br>児童や職人の二種調査が実施<br>される。                             | 第27次               | 城戸ノ内町字新橋14-56, 59      | V                  |          | 33    |       |
|       |      |        |  | 第28次               | 徳島県徳島市西条 小学校3-3        | V                  |          | 600   |       |
|       |      |        |  | 第29次               | 城戸ノ内町字新橋、平井            | V                  | V、VI     | 3,200 |       |
|       |      |        |  | 第30次               | 城戸ノ内町字新橋               | V                  | VI       | 1,220 |       |
|       |      |        |  | 第31次               | 城戸ノ内町字新橋、川合、高橋         | V                  | VII、VIII | 1,700 |       |
|       |      |        |  | 第32次               | 城戸ノ内町字新橋 徳島県徳島市西条      | V                  |          | 114   |       |
|       |      |        |  | 第33次               | 安楽寺町15字新橋9 42たんの児童調査   | X I                |          | 20    |       |
|       |      |        |  | 第34次               | 城戸ノ内町8-39              | X I                |          | 120   |       |
|       |      |        |  | 第35次               | 城戸ノ内町字新橋               | X I                | IX       | 1,620 |       |
|       |      |        |  | 第36次               | 城戸ノ内町字新橋 徳島県徳島市西条      | X II               |          | 2,600 |       |
| 昭和51年 | 1976 | 第4次5ヶ年 | 調査報告書を作成し、児童<br>の調査を依頼する。<br>児童や職人の二種調査が実施<br>される。                             | 第37次               | 城戸ノ内町字新橋14-57, 59      | X II               |          | 100   |       |
|       |      |        |  | 第38次               | 城戸ノ内町字新橋14-26, 1       | X II               |          | 100   |       |
|       |      |        |  | 第39次               | 城戸ノ内町字新橋、木高            |                    |          | 800   |       |
|       |      |        |  | 第40次               | 城戸ノ内町字新橋 徳島県徳島市西条      |                    |          | 3,000 |       |
|       |      |        |  | 第41次               | 城戸ノ内町字新橋 徳島県徳島市西条      | X III              |          | 18    |       |
|       |      |        |  | 第42次               | 城戸ノ内町字新橋、川合、高橋         | X III              |          | 4,800 |       |
|       |      |        |  | 第43次               | 城戸ノ内町字新橋、徳島県徳島市西条      | X III              |          | 4,750 |       |
|       |      |        |  | 第44次               | 城戸ノ内町字新橋               | X IV               |          | 2,600 |       |
|       |      |        |  | 第45次               | 城戸ノ内町字新橋13-46 徳島県徳島市西条 | X V                |          | 63    |       |
|       |      |        |  | 第46次               | 城戸ノ内町字新橋               | X V                |          | 3,000 |       |
| 昭和52年 | 1977 | 第4次5ヶ年 | 調査報告書を作成し、児童<br>の調査を依頼する。<br>児童や職人の二種調査が実施<br>される。                             | 第47次               | 安楽寺町15字新橋              | X VI               |          | 100   |       |
|       |      |        |  | 第48次               | 安楽寺町15字新橋              | X VI               |          | 270   |       |
|       |      |        |  | 第49次               | 城戸ノ内町字新橋               | X VII              | IX       | 1,300 |       |
|       |      |        |  | 第50次               | 城戸ノ内町字新橋               | X VII              | IX       | 1,300 |       |
|       |      |        |  | 第51次               | 城戸ノ内町字新橋               | X VIII             | X(徳島)    | 1,720 |       |
|       |      |        |  | 第52次               | 城戸ノ内町字新橋               | X VIII             | X(徳島)    | 1,930 |       |
|       |      |        |  | 第53次               | 安楽寺町15字新橋              | X VIII             |          | 200   |       |
|       |      |        |  | 第54次               | 城戸ノ内町字新橋               | X VIII             | II       | 1,820 |       |
|       |      |        |  | 第55次               | 徳島県徳島市西条               | X IX               | 一徳島小学校   | 580   |       |
|       |      |        |  | 第56次               | 城戸ノ内町字新橋               | X IX               | II       | 1,200 |       |
| 昭和53年 | 1978 | 第5次5ヶ年 | 調査報告書を作成し、児童<br>の調査を依頼する。<br>児童や職人の二種調査が実施<br>される。                             | 第57次               | 城戸ノ内町字新橋               | X IX               | VI       | 2,560 |       |
|       |      |        |  | 第58次               | 城戸ノ内町字新橋               | X IX               | VI       | 1,300 |       |
|       |      |        |  | 第59次               | 城戸ノ内町字新橋               | X IX               |          | 1,200 |       |
|       |      |        |  | 第60次               | 徳島県徳島市西条 徳島県徳島市西条      | X IX               |          | 70    |       |
|       |      |        |  | 第61次               | 安楽寺町15字新橋、城戸ノ内町字新橋     | X IX               |          | 4,200 |       |
|       |      |        |  | 第62次               | 安楽寺町15字新橋、城戸ノ内町字新橋     | X IX               |          |       |       |
|       |      |        |  | 第63次               | 城戸ノ内町字新橋               | X IX               |          | 200   |       |
|       |      |        |  | 第64次               | 城戸ノ内町字新橋               | 1989               |          | 1,520 |       |
|       |      |        |  | 第65次               | 城戸ノ内町字新橋               | 1989               |          | 1,600 |       |
|       |      |        |  | 第66次               | 城戸ノ内町字新橋               | 1989               |          | 180   |       |
|       |      |        | 第67次   | 城戸ノ内町字新橋           | 1989                   |                    | 330      |       |       |

| 年代    | 西暦   | 調査時期                | 主要調査対象  | 調査年度  | 調査場所・住所             | 数量   | 区分書   | 面積 (㎡) |
|-------|------|---------------------|---|-------|---------------------|------|-------|--------|
| 平成2年  | 1990 |                     | 本町立四丁目で一帯谷川の河原移動や北庭電線を確認した。                                       | 第68次  | 城戸ノ内町6年中庭           | 1990 | 本町立西  | 3,800  |
|       |      |                     |   | 第69次  | 城戸ノ内町・安達寺町・西新町(旧町界) |      |       | 775    |
|       |      |                     |   | 第70次  | 安達寺町14丁時ノ木1         | 1990 |       | 100    |
|       |      |                     |   | 第71次  | 城戸ノ内町14丁時ノ木2-1、2    | 1990 |       | 300    |
| 平成3年  | 1991 |                     |   | 第72次  | 城戸ノ内町6年中庭           | 1991 |       | 210    |
|       |      |                     |   | 第73次  | 城戸ノ内町3丁兵庫           | 1991 |       | 70     |
|       |      |                     |   | 第74次  | 城戸ノ内町8丁兵庫           | 1991 |       |        |
|       |      |                     |   | 第75次  | 城戸ノ内町8丁兵庫           | 1991 |       | 2,600  |
| 平成4年  | 1992 | 小高<br>第1次10ヵ年<br>後半 | 齊藤、田合段地元の調査では、西新町集や野原集を調査。また、上町丁・下町丁の外にある字区を中心に見学。                | 第76次  | 安達寺町兵庫              |      |       | 500    |
|       |      |                     |   | 第77次  | 城戸ノ内町字河合流           | 1992 | V     | 2,600  |
|       |      |                     |   | 第78次  | 城戸ノ内町字野木            | 1992 |       | 120    |
|       |      |                     |   | 第79次  | 城戸ノ内町字野木            | 1992 |       | 120    |
| 平成5年  | 1993 |                     | 緑地整備事業では町立主体実施。   | 第80次  | 安達寺町兵庫              | 1992 | 稲尾・朝山 | 495    |
|       |      |                     |   | 第81次  | 安達寺町小野行             | 1992 |       | 330    |
|       |      |                     |   | 第82次  | 城戸ノ内町字野原            | 1993 |       | 1,920  |
|       |      |                     |   | 第83次  | 城戸ノ内町字河合流           | 1993 | VI    | 1,300  |
| 平成6年  | 1994 |                     |   | 第84次  | 安達寺町兵庫・朝山安達寺        |      |       | 500    |
|       |      |                     |   | 第85次  | 城戸ノ内町字下流            | 1994 | Ⅶ     | 400    |
|       |      |                     |   | 第86次  | 安達寺町中町字西山北照寺        | 1994 |       | 2,400  |
|       |      |                     |   | 第87次  | 東新町                 | 1994 |       | 500    |
| 平成7年  | 1995 |                     |   | 第88次  | 城戸ノ内町字上流            | 1994 |       | 100    |
|       |      |                     |   | 第89次  | 安達寺町北町字西川光野寺        | 1995 |       | 800    |
|       |      |                     |   | 第90次  | 城戸ノ内町字兵庫            | 1995 |       | 100    |
|       |      |                     |   | 第91次  | 安達寺町兵庫(朝山・安達寺集落)    | 1995 |       | 3,600  |
| 平成8年  | 1996 |                     |   | 第92次  | 城戸ノ内町字上流            | 1995 |       | 200    |
|       |      |                     |   | 第93次  | 城戸ノ内町字新橋            | 1995 |       | 1,400  |
|       |      |                     |   | 第94次  | 城戸ノ内町字北照寺           | 1996 |       | 400    |
|       |      |                     |   | 第95次  | 城戸ノ内町字上流            | 1996 |       | 630    |
| 平成9年  | 1996 |                     |   | 第96次  | 東新町字安達寺             | 1996 |       | 2,400  |
|       |      |                     |   | 第97次  | 城戸ノ内町字新橋            |      |       | 2,000  |
|       |      |                     |   | 第98次  | 城戸ノ内町字河合流           | 1997 |       | 2,600  |
|       |      |                     |   | 第99次  | 城戸ノ内町字河合流           | 1997 |       | 400    |
| 平成10年 | 1998 | 第2次10ヵ年<br>前半       | 調査、町合流地帯を中心に調査を実施。上流武蔵屋敷を重点調査。<br>中山町集落では城戸ノ内川域で遺跡調査を実施。          | 第100次 | 城戸ノ内町字河合流           | 1998 |       | 2,300  |
|       |      |                     |   | 第101次 | 城戸ノ内町字河合流           | 1999 |       | 100    |
|       |      |                     |   | 第102次 | 城戸ノ内町字河合流           | 1999 |       | 2,000  |
|       |      |                     |   | 第103次 | 城戸ノ内町字河合流           | 1999 |       | 120    |
| 平成11年 | 1999 |                     |   | 第104次 | 城戸ノ内町字河合流           | 1999 |       | 225    |
|       |      |                     |   | 第105次 | 城戸ノ内町字河合流           | 1999 |       | 98     |
|       |      |                     |   | 第106次 | 城戸ノ内町字河合流           | 32   | 中山北   | 1,400  |
|       |      |                     |   | 第107次 | 城戸ノ内町字河合流           | 32   |       | 2,000  |
| 平成12年 | 2000 |                     |   | 第108次 | 城戸ノ内町字河合流           | 32   | 中山南   | 1,500  |
|       |      |                     |   | 第109次 | 城戸ノ内町字河合流           | 32   | 中山南   | 150    |
|       |      |                     |   | 第110次 | 城戸ノ内町字河合流           | 33   |       | 2,000  |
|       |      |                     |   | 第111次 | 城戸ノ内町字河合流           | 34   |       | 1,700  |
| 平成13年 | 2001 |                     |   | 第112次 | 城戸ノ内町字河合流           | 35   |       | 540    |
|       |      |                     |   | 第113次 | 城戸ノ内町字河合流           | 35   | 中山南   | 318    |
|       |      |                     |   | 第114次 | 城戸ノ内町字河合流           | 35   |       | 26     |
|       |      |                     |   | 第115次 | 城戸ノ内町字河合流           | 35   |       | 114    |
| 平成14年 | 2002 | 第2次10ヵ年<br>後半       | 遺跡調査等の調査を実施。中山町集落に大規模の調査を実施。<br>中山町集落では河原調査を実施。                   | 第116次 | 城戸ノ内町字河合流           | 36   |       | 3,000  |
|       |      |                     |   | 第117次 | 城戸ノ内町字河合流           | 37   |       | 500    |
|       |      |                     |   | 第118次 | 城戸ノ内町字河合流           | 36   |       | 100    |
|       |      |                     |   | 第119次 | 城戸ノ内町字河合流           | 37   |       | 850    |
| 平成15年 | 2003 |                     |   | 第120次 | 城戸ノ内町字河合流           | 37   |       | 250    |
|       |      |                     |   | 第121次 | 城戸ノ内町字河合流           | 38   |       | 2,500  |
|       |      |                     |   | 第122次 | 城戸ノ内町字河合流           | 38   |       | 137    |
|       |      |                     |   | 第123次 | 城戸ノ内町字河合流           | 39   |       | 44     |
| 平成16年 | 2004 |                     |   | 第124次 | 城戸ノ内町字河合流           | 39   |       | 2,000  |
|       |      |                     |   | 第125次 | 城戸ノ内町字河合流           | 39   |       | 120    |
|       |      |                     |   | 第126次 | 城戸ノ内町字河合流           | 39   |       | 250    |
|       |      |                     |   | 第127次 | 城戸ノ内町字河合流           | 39   |       | 120    |
| 平成17年 | 2005 | 第3次10ヵ年<br>前半       | 遺跡調査等の調査を実施。特に、東山町石段の上流(からま流)にかけての遺跡不同の本調査を実施。および西山北照寺の北庭集落を調査する。 | 第128次 | 城戸ノ内町字河合流           | 39   |       | 39     |
|       |      |                     |   | 第129次 | 城戸ノ内町字河合流           | 39   |       | 2,500  |
|       |      |                     |   | 第130次 | 城戸ノ内町字河合流           | 39   |       | 44     |
|       |      |                     |   | 第131次 | 城戸ノ内町字河合流           | 39   |       | 2,500  |
| 平成18年 | 2006 |                     |   | 第132次 | 城戸ノ内町字河合流           | 39   |       | 44     |
|       |      |                     |   | 第133次 | 城戸ノ内町字河合流           | 39   |       | 2,000  |
|       |      |                     |   | 第134次 | 城戸ノ内町字河合流           | 39   |       | 120    |
|       |      |                     |   | 第135次 | 城戸ノ内町字河合流           | 39   |       | 39     |
| 平成19年 | 2007 |                     |   | 第136次 | 城戸ノ内町字河合流           | 39   |       | 2,500  |
|       |      |                     |   | 第137次 | 城戸ノ内町字河合流           | 39   |       | 44     |
|       |      |                     |   | 第138次 | 城戸ノ内町字河合流           | 39   |       | 2,000  |
|       |      |                     |   | 第139次 | 城戸ノ内町字河合流           | 39   |       | 120    |
| 平成20年 | 2008 |                     |   | 第140次 | 城戸ノ内町字河合流           | 39   |       | 39     |
|       |      |                     |   | 第141次 | 城戸ノ内町字河合流           | 39   |       | 2,500  |
|       |      |                     |   | 第142次 | 城戸ノ内町字河合流           | 39   |       | 44     |
|       |      |                     |   | 第143次 | 城戸ノ内町字河合流           | 39   |       | 2,500  |
| 平成21年 | 2009 |                     |   | 第144次 | 城戸ノ内町字河合流           | 39   |       | 44     |
|       |      |                     |   | 第145次 | 城戸ノ内町字河合流           | 39   |       | 2,500  |
|       |      |                     |   | 第146次 | 城戸ノ内町字河合流           | 39   |       | 44     |
|       |      |                     |   | 第147次 | 城戸ノ内町字河合流           | 39   |       | 2,500  |

註 調査実施地 一 兼小学校一(一兼谷朝倉氏遺跡) 一 兼小学校北庭改築跡(一兼谷朝倉氏遺跡) 一 兼中山町集落 一 兼中山町集落  
 改良工事に伴う発掘調査報告書1983.31、調査対象地一(一兼谷朝倉氏遺跡) 一 兼中山町集落 一 兼中山町集落 一 兼中山町集落  
 調査報告書1987.31、調査対象地一(一兼谷朝倉氏遺跡) 一 兼中山町集落 一 兼中山町集落 一 兼中山町集落 一 兼中山町集落  
 調査報告書1992.31、調査対象地一(一兼谷朝倉氏遺跡) 一 兼中山町集落 一 兼中山町集落 一 兼中山町集落 一 兼中山町集落  
 調査報告書2005.31、調査対象地一(一兼谷朝倉氏遺跡) 一 兼中山町集落 一 兼中山町集落 一 兼中山町集落 一 兼中山町集落

表1 特別史跡一兼谷朝倉氏遺跡発掘調査次数一覧



挿図1 特別史跡—兼谷朝倉氏遺跡調査地略図

なされた古野本地系の調査区の発掘結果を報告したものである。最後の5年目は再び平井池築の武家屋敷を調査し、さらに一乗谷の内外を区切る下城が本体の調査に入った。

昭和62年度から中期第1次10ヵ年計画として巨大な土塁を持つ上城戸や南陽寺・西山光照寺・御所安養寺などの大規模な寺院、そして中惣・権殿・河合殿などの武家屋敷・町屋跡を計画的に調査し、遺跡内の各地に所在する大規模で特徴的な遺構を究明した。

平成9年度から中期第2次10ヵ年計画に入り、町並立体復原地区に隣接する一乗谷川より西側部分の八池谷川兩岸の地が連続的に発掘調査され、この地区の街路や武家屋敷の構造を明らかにした。ところが平成16年7月18日三雲正寺地係の発掘中に福井豪雨によって一乗谷川・八池谷川・足羽川が氾濫し、遺跡の各地と資料館も被災した。この年度の発掘調査は中断し、災害復旧に全力を注いだ。翌17年度から改めて中期第3次10ヵ年計画を施行し、中断した調査を再開し、平成19年度から遺跡の南北を縦走する遊歩道跡の調査地を連続的に発掘して現在に至っている。

### 3. 調査の体制

一乗谷朝倉氏遺跡の発掘調査と環境整備は国の補助金を受けて福井県が実施している。昭和47年度から福井県教育庁朝倉氏遺跡調査研究所があたり、同56年8月福井県立朝倉氏遺跡資料館が開館して、組織的にもこれに引き継がれた。また当初から「朝倉氏史跡公園基本構想」に基づき朝倉氏遺跡調査研究協議会が設置され、その指導と助言を受けている。本報告書で扱う第51次調査、第52次調査は、ともに昭和60年度に福井県立朝倉氏遺跡資料館によって実施され、朝倉氏遺跡調査研究協議会の指導・助言を得た。また本報告書の作成・刊行は平成21年度に福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館が行った。なお発掘調査の予算は25,000(単位千円)である。

以下に本報告書に関する組織体制ならびに従事した職員を記す。

#### 昭和60年度

##### 福井県朝倉氏遺跡調査研究協議会

- 会長 青園謙二郎(福井テレビ社長・郷土史)  
委員 石井進(東京大学教授・歴史学)  
委員 岸谷孝一(東京大学教授・建築学)  
委員 木原啓吉(千葉大学教授・都市環境学)  
委員 近藤公夫(奈良女子大学教授・造列学)  
委員 重松明久(福山女子短期大学学長・歴史学)  
委員 出畑貞寿(千葉大学教授・造園学)  
委員 坪井清足(奈良国立文化財研究所所長・考古学)  
委員 戸塚文子(評論家)  
委員 水上勉(作家)  
委員 木村竹次郎(保存協会長)  
委員 細田堅(城戸ノ内区長)



#### 福井県立朝倉氏遺跡資料館

|        |            |
|--------|------------|
| 館長     | 藤原武二(造園学)  |
| 次長     | 西嶋泰隆       |
| 文化財調査員 | 水野和雄(考古学)  |
| 文化財調査員 | 小野王敏*(考古学) |
| 文化財調査員 | 清田善樹(歴史学)  |
| 文化財調査員 | 岩田隆(考古学)   |
| 文化財調査員 | 吉岡泰英(建築学)  |
| 文化財調査員 | 南洋一郎(考古学)  |
| 文化財調査員 | 月輪泰*(考古学)  |

(\*小野・月輪調査員はそれぞれ昭和61年2月に転出、採用)

|       |      |
|-------|------|
| 非常勤嘱託 | 山田武男 |
| 非常勤嘱託 | 久保昭三 |

(調査補助員 川村俊彦 発掘調査作業員 小林秀男、田中文右衛門、堀田深、吉川京一、吉村正雄、石田はまを、上坂和子、奥田末子、奥田美恵子、岸田あや子、小林ヒサヲ、三崎チエ子、山下喜美子  
遺物修理員 朝倉八重子、石田隆代、辻岡幸子、長谷川和子)

#### 平成21年度

##### 福井県朝倉氏遺跡研究協議会

|     |                              |
|-----|------------------------------|
| 会長  | 河原純之(元川村学園女子大学教授・考古学)        |
| 副会長 | 池上裕子(成蹊大学教授・歴史学)             |
| 委員  | 高橋康夫(京都大学大学院教授・建築学)          |
| 委員  | 高瀬要一(和歌山県立紀伊風上記の丘館長・造園学)     |
| 委員  | 本田光子(九州国立博物館学芸部博物館科学課長・保存科学) |
| 委員  | 神吉紀世子(京都大学大学院助教授・建築学)        |
| 委員  | 岸出清(保存協会会長)                  |
| 委員  | 青山幹男*(公募)                    |
| 委員  | 松山直子*(公募)                    |
| 委員  | 石川太*(公募)                     |
| 委員  | 川口義雄*(公募)                    |

(\*青山・松山委員の任期は平成22年1月24日まで、石川・川口委員の任期は同1月25日から)

##### 福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館

|          |           |
|----------|-----------|
| 館長(嘱託)   | 水野和雄(考古学) |
| 副館長      | 岩田隆(考古学)  |
| 次長       | 山崎俊枝      |
| 総括文化財調査員 | 佐藤圭(歴史学)  |

|          |                |
|----------|----------------|
| 主任       | 橋部正典(考古学)      |
| 主査       | 川越光洋(考古学・保存科学) |
| 文化財調査員   | 千木良礼子(建築学)     |
| 文化財調査員   | 藤田若菜(造園学)      |
| 特別顧問(嘱託) | 青木豊昭(考古学)      |
| 非常勤嘱託    | 奈良一信           |
| 非常勤嘱託    | 池田千鳥           |
| 非常勤嘱託    | 眞保弘恵           |

(遺物整理員 朝倉久美子、海道登美江、川野貴子、川畑美佐紀、川村亜悠美、清光昭代、齋藤貞裕美、齊藤美保、酒井智恵、辻岡幸子、松村貴子、山岡靖代)

## 4. 本報告書について

### 内 容

本報告書は、国庫補助事業として福井県立朝倉氏遺跡資料館が昭和60年度に実施した第51次調査、第52次調査の発掘調査報告書である。

### 執 筆

本報告書は、昭和60年度の調査記録をもとに、以下の分担により執筆し、全体の編集は佐藤圭が担当した。I 佐藤圭 II-1・2 岩田隆 II-3 橋部正典・佐藤圭 III-1・2 岩田隆 III-3 川越光洋・千木良礼子 IV 岩田隆

### 図 面

遺構平面図はアジア航測(株)に委託し、空中写真測量により作成したものをを用いた。実測図・遺構図等については当時の職員と各担当者で作成し、遺物整理員がこれを助けた。附図や挿図として使用した地形図は、昭和44年に足羽町がバシフィック航業(株)に委託して作成した基本図(1/1,000)及びこの集成図による。

### その他

本報告書の遺構図に用いた座標は、国土座標系「第Ⅵ系」である。また、遺構番号の頭に付した記号は以下の分類による。

SA:土塁・堀・溝、SB:建物、SD:溝・濠、SE:井戸、SF:石積施設、SG:池、SI:門、SK:土塹、SS:道路、SV:石垣、SZ:暗渠、SX:その他の遺構

出土遺物、ならびに図面、写真等は福井県立・乗谷朝倉氏遺跡資料館で保管している。

## Ⅱ 第 51 次 調 査

## Ⅱ 第51次調査

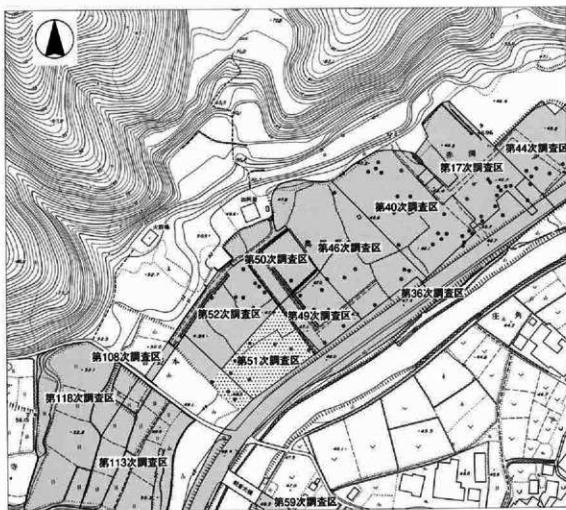
### 1. 調査の経過と概要

今回報告する第51次調査区は、福井市城戸ノ内町吉野本地係に所在する。城戸ノ内のほぼ中央、一乗谷川の西岸に位置し、この地区の南を流れる八地谷川が形成する小扇状地の北裾にあたる。朝倉館からは一乗谷川を挟んで北へ約500mの位置にある。

第51次調査区のある吉野本地係から奥間野地係・赤湊地係にかけては、第17次調査(サイゴ寺跡)を皮切りに、県道鯖江・美山線改良工事に伴う第36次調査、第40次調査、第42次調査、第44次調査、第46次調査、第49・50次調査と合わせて約6,000㎡発掘され、幅8mの南北道路に面した町屋が軒を連ね、山裾には寺院が並び、中間には中級の武家屋敷が存在していたことが判明している。

今回の第51次・52次調査は、この地区の発掘調査面積を面的に拡大することによって、戦国城下町一乗谷の全体像をより明らかにする目的を持って実施した。

第51次調査は、昭和61年4月1日から8月3日まで行い、ひきつづき第52次調査を実施した。11月7

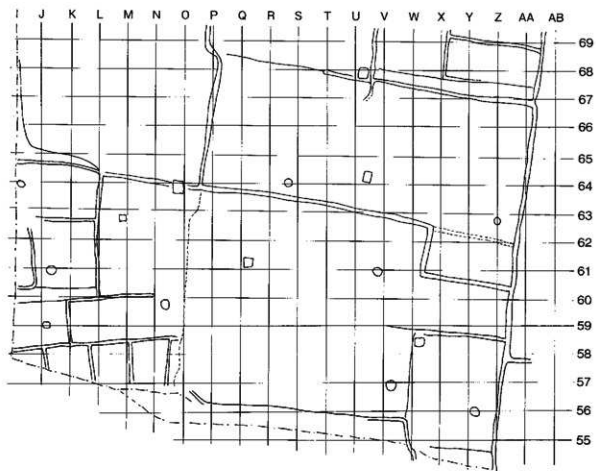


挿図2 第51次調査区周辺地形図 (1/2,000)

日には第51次調査区、第52次調査区合わせてヘリコプターによる写真測量を行い、12月6日まで補足調査を実施して終了した。

今回報告する第51次調査区は、実際には、昭和60年度の第49次調査区の一部、昭和61年度の52次調査区の一部を含むが、屋敷割りの関係から挿図4のように医者の家と推定された区画51-15以東の屋敷群について報告する。第51次発掘調査時の面積は、約1,720m<sup>2</sup>であるが、今回報告する面積は約1,820m<sup>2</sup>である。

遺物取上げのためのグリッド設定は、第49次・50次調査地区のグリッドをそのまま延長した。そのため、この地区の町割り基準となる東西道路SS2001から10度北に振れている。



挿図3 第51次調査区グリッド設定図

## 第51次調査日誌抄

昭和60年4月1日～8月1日

4. 1～28 耕土取り
4. 30 地区枕打ち
5. 9 発掘開始。調査地区の北東部から掘り始める。
5. 10 溝SD3041、井戸SE3082、SE3085、溜槽3092などを検出。これらは床土の直下から出土した。
5. 13 調査地区北東部で溝SD3031を検出。床土下の焼土下から礎石がのぞく。
5. 16 調査地区南半分の遺構検出に移る。
5. 22 Nライン以南で東西南北に走る溝を検出。  
この地区は溝で区画された小区面の原敷地区であることを確認。
5. 23 小区間で路地や井戸、建物跡を検出。
5. 27 調査地区北西部の遺構検出にもどる。焼土の下から礎石建物SB3059を検出。この建物は礎石が良く残っており、礎石は整地された青灰色の粘土層に据えられていた。
5. 28 調査地区中央部の遺構検出。SB3065を検出。この建物の西半分は焼土や炭で蓋われ板材も多く出土した。
5. 29 南西隅の可居で、礎石建物と井戸、洗い場を検出。
5. 30 これらの板材等の出土状況を実測。SE3083付近を調査。溝と兼ねていることを確認。
5. 31 区画51-1でトレンチを入れて下層を調査。砂利敷や石列を検出。
6. 4 36次調査地区との境界付近の遺構検出を行う。ガラ石の下から溝を検出。
6. 5 畦畔の段となるOラインを調査。この付近が原敷境界と考えられるが、畔の石と遺構の石との見分けが困難。
6. 7 調査地区南部の遺構検出をする。区画51-9町屋で、礎石建物、井戸を検出。  
その西にある溝SD3036は新旧2時期あることを確認。
6. 10 62ライン以東でも小区画内で井戸や路地などを検出。下層から越前焼甕の破片を敷きつめた遺構を3ヶ所発見。
6. 13 北東部の下層の調査に入る。東西方向の石列や砂利敷を検出したが、遺構にまとまりがない。
6. 14 南西部の遺構を調査。東西方向の溝SD3035を確認。この溝石は畦畔にも使われていた。
6. 21 後に医師の家とされた南半分で甕ピットと礎石建物を検出。
7. 15 梅雨のためしばらく、発掘調査を中断していたが再開。排水の後、表面を清掃して下層の溝を調査する。
7. 16 医師の家の溜槽SF3093を調査。2段に石が積まれ、いわゆる便所ではなく貯蔵施設的なものと思われる。
7. 22 写真撮影のため遺構清掃
7. 24 遺構の写真撮影
7. 29 補足調査
8. 3 調査終了。

## 2. 遺構(第1図～6図、PL1～PL14)

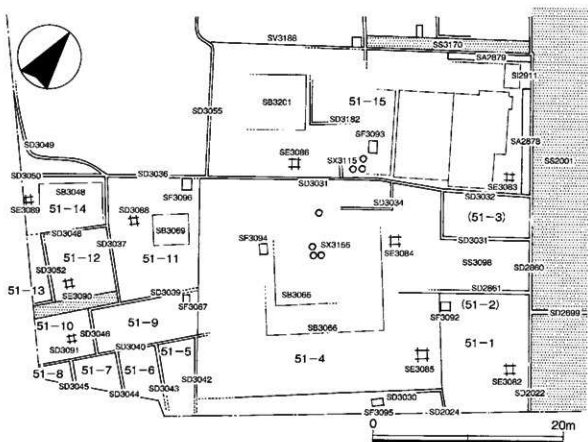
第51次調査区は、屋敷群の性格によって挿図4のように大きく2区画群に分けられる。第1区画群はSS2001に面した区画群で、小区画51-1と武家屋敷51-4、医師の家と想定した区画51-15からなり、第2区画群は51-5～51-14で、約410m<sup>2</sup>の中に10区画が存在する。こうした区画は溝や段差で区画されているが、時差によって区画が変わっているところがある。たとえば「医師の家」と推定している区画51-15は最終時期に東に5mほど拡張している。また、第2区画群はもともと一つの屋敷だったが、最終時期に分割されて10軒の小区画群になったと推定している。

区画番号については、『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡XVII』を踏襲した。しかし、後に述べるように区画51-1と51-2は同じ区画と考えられる。また51-3は下層の段階では区画51-4に含まれ、最終段階では区画51-15に含まれるので欠番とし、挿図4では(51-2)、(51-3)と表示した。

まず区画を分ける溝や道路について述べて、その後区画ごとに主要な遺構を述べていくことにする。なお方位については、磁石の方位とは45度近くずれているが、東西道路SS2001側を北として記述する。

### 町割りに関する遺構

SS2001 この東西道路は第49・50次調査の際に見つかっており、すでに報告済みである。幅は、51-15付近で8mあり、道路の南に側溝SD2860が、北側に側溝SD2800がつく。道路は叩き締めた小砂利で



挿図4 第51次調査区略図

舗装されており、舗装面は何度も補修され、西寄りのSS2952との交差点近くでは10面近く確認された。SS3097 この道筋は51・9・10と51・13・12の間を通る幅約1.3mの路地、袋小路となっている。道路面は小砂利で舗装され、道筋の南2m分はこぼし大の石が敷かれていた。小区画51・9、51・11、51・12へはこの袋小路がなければ入ることができない。この道筋の藪溝にあたるSD3046は側石を2石程積み、深さも0.2mと浅い。

SD2860 東西道路SS2001の南側石組溝で、第52次調査地区の南北道路SS2952との交差点から東へ流れる。幅は場所によって異なるが51・15付近では約0.4m、SD2861との交点近くでは約0.5mと広くなる。深さについては、東に流れているため52次調査地区のSS2952付近では深さ0.3m、51・1付近では深さは0.6mとだんだん深くなっている。このSD2860は大きく上層と下層に分かれ、下層では51・2付近で屈折して北に流れ、道路SS2001を横切っていた。したがって下層の時期には、これより東はこの側溝がなかったと推定される。このSD2860にたいして、南からSD2862とSD3031、SD2861が流れ込んでいる。

SD2862 区画51・15の西を限る南北溝で、SD2860に流れ込む。幅は約0.4mで、SD2860から南へ21m続く。その先は溝がなくなり区画51・15と52次調査の区画52・7とは石垣SV3188によって区画されている。この溝と西からの溝SD3176との合流点近くにある石積み遺構SF3196はこのSD2862を壊して作られている。したがって、SF3196が作られた以降はそれより南の溝は埋められていたと考えられる。またこのSD2862は何度か作り変えられており、流路が少しずれてSD2860との交点付近では、下層の溝が区画51・15の上層基礎SA2879の下にもぐり込んでいる。

SD3031 この溝は区画51・4と51・15を区画する石組溝で、幅は約0.5mある。深さはSD2860との合流点近くで約0.5m、SD3035との合流点付近で0.4mある。52次調査区の溝SD3035やSD3036を合流しているためやや広く、石組はしっかりしている。本家は北にまっすぐ流れてSD2860と繋がっていたが、最終段階で区画51・15が東に拡張されたとき東に大きく屈折させて、さらに北に屈折させてSD2860に合流している。まっすぐ流れていた下層溝はSD3032とした。この屈折させた部分の溝には、古い時期の石より大きい人頭大の石が使われている。この溝はSD3035との合流点から南に1.5mの所で、石積遺構SF3096によって壊されている。このためこれより南側をSD3036としたが、本来この2本の溝は続いていた。

SD3032 この溝はSD3031がまっすぐ北に流れていた時期の古い溝である。しかし、西側の側石が上層まで延びていること、SD2860との合流点でSD3032の出口を石で塞いでいることから、SD3031を東に屈折させたのは、一乗谷が滅んだ時期に近い頃であろう。

SD2861 区画51・1と区画51・4の入口を区画する溝である。幅は0.2前後と狭く、長さは12mで、これより南は石列となる。東側の溝石はよく残っているが、西側の溝石はやや小振りで失われている石が多い。

SD3030 区画51・4の東を区画する溝である。深さは0.3m、幅については、SD2024との接合付近では0.3mを測るが、東側の側石がほとんど壊れているので不明である。この溝はSD2024、SD3041と一連の溝であるがSD2024は東に折れ曲がっているために遺構番号を変えた。同じくSD3041も西に振れるため遺構番号を変えた。石列SX3129はこの溝の西側の溝石であろう。

SD3035 この溝は、52次調査区から東に流れて区画51・15の南を限り、SD3031に繋がる。区画51・15付近は後世の水田の用水路と重複しており、現在見える北側の溝石は水田の用水路の石で、SD3035



の溝石を転用したものであろう。溝幅は0.5m、深さは0.7mほどである。この溝は52調査地区のSS2952の御溝から土層SA3185を暗渠S73264をくぐり東に流れる。SV3188に接する所で北に1mほど屈曲する。SD3036 この溝は区画51-11、51-14と52次調査の区画52-8とを区画する石組溝である。この溝は本来SD3031に繋がっていたが、SD3035と合流地点の西側は最終時期には埋められていた可能性がある。というのは、溝の上に石組施設SF3096が存在し、これによって溝が壊されていることによる。

以下区画ごとに記述する。

#### 区画51-1・(51-2)

道路SS2001に面し、南は石列SX3105、西は溝SD2861によって区画され、東は隣り屋敷の建物と考えられるSB3053までの東西12m、南北9mの小区画である。なお、石列SX3105は下層の遺構であるが、溝SD2024と石積遺構SF3092と同じ直線状にあることから、南の境界を石列SX3105とした。「特別史跡 乗谷朝倉氏遺跡XVII」ではこの区画をSX3054で東西に分けて2区画と報告しているが、ここで2区画に分割するには根拠が弱く、少なくとも最上層の段階では、SB3057の礎石列が下層のSX3054の石列より東に延びていることから、ひとつの区画と判断した。

この区画は大きく3時期からなる。上層の遺構は礎石建物SB3057、石積施設SF3092、井戸SE3082などで遺構面Ⅰとする。これは一乗谷が滅んだ時期の遺構群と考える。

SB3057 屋敷地西よりの位置する礎石建物で、東西方向に礎石が一行4石4.5m並ぶだけで規模等は不明である。

SE3082 区画中央よりやや北東に位置する石組井戸である。直径は0.8m程で、深さは底まで調査していないので不明。やや残存状況が悪く天端石などが壊されていた。

SF3092 屋敷地の南西隅に位置する石積施設で、東西0.7m、南北0.7m、深さ、0.6mである。小児頭大の石を5石～6石積み上げ、屋敷の隅にあることから便所と考えられる。

I 遺構面から約0.2m下層から検出したのが、石列SX3054、埋立柱建物SB3056、石列SX3101、SX3103、SX3105を中心とするII遺構面である。西側に面をそらえた南北方向の石列SX3054と東西方向の石列SX3103、東隣の屋敷の建物と考えられるSB3053の間に建物があったと想定できるが、礎石が欠われているため規模等詳しいことは不明である。また溝SD2861に沿って柱穴と思われる穴が2ヵ所、SB3053の西にも柱穴らしき穴が2ヵ所見つけたが、遺物としてはまとまらなかった。

さらに下層から石列SX3106や石敷状の遺構SX3104が見つけた。

#### 区画51-4・(51-3)

最終時期には東西遺SS2001とは直接面せず通路SS3098を介して繋がる武家屋敷で、西は溝SD3031、東は溝SD3041・SX3129・SD3030、南はSX3135付近で区画される。規模は、通路部分を除いて、北辺の東西方向が21.5m、南辺の東西方向が22m、南北方向は西辺で25m、東辺はやや不明であるが、約25mと見てよいだろう。したがって面積は約550㎡と推定される。武家屋敷と推定したが土層基礎などは存在しなかったところから、武家屋敷ではない可能性も捨てきれない。

この屋敷の上層は礎石建物SB3065を中心に、礎石建物SB3066、礎石建物SB3064があり、井戸SE3085、井戸SE3084、埋立遺構SX3154、SX3155、石積遺構SF3094などがある。

SB3065 屋敷地のほぼ中央に位置する礎石建物で、規模は東西9.86m(5.25間)、北側の礎石列が不

明確であるが、南北7.51m(4間)と推定される。柱間は6尺2寸(1.8786m)となる。建物内部は石列SX3186で東西に2分でき、東半分は床面が固く締まっていたのに対して、西半分は薄い焼け土の下は黒く炭混じりの土の中に板材が多数埋まっていた。また建物の西側中央部付近に大甕設置遺構SX3155がある。3個体の越前焼大甕を肩近くまで埋設した遺構である。3個体のうち2個体が抜き取られ1個体は底部から腰部が原位置に残っていた。この建物の北西隅付近にも大甕設置遺構SX3154がある。この甕は底部が原位置に残っていた。

SB3066 SB3065の南東に位置する礎石建物で、東西方向に2.3m、南北方向に3.7m分礎石列が残存する。礎石と礎石の間にはやや小振りの石が並び、布基礎のようにになっている。SB3655とは南へ1.3m、東へ3.15mずれるが、建物方向が一致するところから、SB3066の部分を増築したと推定される。ただ礎石のレベルはSB3066の方が10cmほど高く、ずれる寸法も尺貫法で割り切れる数値とならない。

SB3064 SB3065の北側に位置する礎石建物で、北辺礎石列が東西方向に9.6m、東辺の礎石列とその並びに石列が5.5m分並ぶが、礎石がとんでいるなど規模は不明であり、はたして1軒の建物かどうかははっきりしない。

これらの建物群は、方向はそろっているが、礎石列が必ずしも通るわけではない。したがって、増築など建てられた時期が異なっているとも考えられる。建物の向きは道路SS2001とは一致せず、屋敷の東側の石列SX3129と一致する。

SF3094 礎石建物SB3065の南に位置し、東西0.7m×南北1.0m×深さ0.6mを測る。内部は焼土混じりの土で埋められていた。便所と推定される。

SX3154 越前焼大甕埋設遺構でSX3155から5m西に単独で埋設されていたが、調査時には甕は抜き取られていた。

SX3155 礎石建物SB3065内に設置された越前焼大甕埋設遺構で、3個体甕の肩近くまで埋設されていた。周辺は焼け残った板が多数ある炭混じり土が広がっていた。

SE3084 東西道路SD2001からの通路SD3098の西に位置する石組井戸で、天端石までよく残っていた。直径は約1.0mである。

SE3085 屋敷地の北東隅に位置する石組井戸で、天端石までよく残っていた。直径は約1.0mである。なお両井戸とも安全を考慮して底まで調査しなかったため深さは不明である。

SD3034 屋敷地の北西に位置する石組溝である。越前焼埋設遺構SX3154付近から北流し、井戸SE3084付近から西に折れて、この屋敷51-2西側を区画する溝SD3031に注ぐ。幅は0.4m、全長は8.5mある。溝の東に笏谷石製の四角い鉢SX3118と石敷SX3118がある。

#### 下層

下層の時期には、区画51-4の西を限る溝SD3031がまっすぐに流れていた(SD3032)。その時のこの原敷の地口はSS2001に面して約10mあった。全体に下層遺構の残存状況はあまりよくない。礎石らしき石や砂利敷状の遺構が存在し、下層面の存在は確実であるが、まとまった遺構としては北西隅付近の礎石建物SB3058だけである。

SB3058 区画51-4北西隅近くに位置し、上層遺構から0.3m下に存在する。規模については、現在残っている礎石からは東西2.7m(2間)×南北4.8m(2.5間)である。この礎石建物は東に延びていると考えられたが、溝SD3031を越えて東側では礎石等は確認できなかった。西側の礎石の間にはやや乱れた石列がある。

SX3110 SE3084の北側に位置する石列で、東西方向に5mのびる。南向きの面がそろっている。

SX3122 通路SS3098の南に位置する石列で、3.2m確認できた。西に面をそろえている。

調査地区の南東部に位置する51-5~14までの区画群は、それぞれを区画する溝が浅く、これらの区画全体が一つの屋敷だったが、後に路地=通路SS3097を入れるとともに、溝によって小区画に分割したと推定される。その時期は定かではないが、それぞれの区画に2時期遺構面が認められること、下層遺構面に敷き詰めてあった越前焼窯の口縁が16世紀前半と推定されるⅢ群bと一乗谷最終時期にあたるⅢ群Cの中間的な形をしていることから、ほぼ16世紀中葉の時期ではないかと推定される。これらの小区画群は、SD3040以東の51-5~8までと、SD3040を挟んで背中合わせになる51-9・51-10の2区画、通路SS3097の奥にある51-11、通路SS3097より西にある51-11・12・13・14に分けられる。

SS3097 南北方向の砂利敷の袋小路で、区画51-11に突当る。幅は1.3m、現存する長さは8.5mである。南よりの2m分は拳大の石を敷き詰め、その北は小砂利敷となっている。

SD3037 溝SD3036から東に流れて区画51-12・51-14と51-11を分ける溝である。東に流れてSD3039、SD3046とつながる。幅は0.3m内外で深さは約0.3mある。溝石は2~3石積んでいる。

SD3040 区画51-5から51-8までの小区画群の背後を南北に流れる石組溝で、調査した長さは約16m、幅は0.25m前後である。深さは0.3m程である。このSD3040に石組溝SD3043、SD3044、SD3045が直角につながり、51-5から51-8までを区画している。

#### 区画51-5~8

これらの小区画群は敷地の幅が5m前後で、奥行きは一乗谷川に挟まれて不明であるが、現存する最も深い奥行きを有するのは51-5で、4.8mを測る。51-7には上層に1.2m×1.0mの平らな河原石を敷き詰め、周囲を石で囲った石敷遺構SX3153があり、51-3には縁を石で囲った0.5m×1.1mの炉SX3152がある。51-6の下層には2~3石の礎石が認められるが、建物規模は不明である。これらの4軒の小区画群は東側に入口があったと推定される。

なお、区画の番号は付さなかったが、51-5の北側にもう1区画あった可能性がある。

#### 区画51-9

51-5・6の西に位置する小区画屋敷で、敷地幅は5.0m、奥行きははっきりしないが、12m前後と推定される。上層では礎石など建物跡は失われていたが、石敷SX3075と石積遺構SF3087がある。

石敷SX3156は51-6の石敷3148と同じく平らな河原石を敷いてまわりを厚みのある河原石で囲んである。形は長径1.1m、短径0.9mの楕円形である。石積施設SF3087も長径1.1m、短径0.8mの楕円形で、石を3石ないし4石積み、深さは0.4mを測る。

入口ははっきりしないが路地SS3097から入るとすると石敷遺構SX3156の北側付近と推定される。

上層遺構面から0.15m下に下層の遺構面があり、石列SX3149、SX3150の他、不整形ながら径0.8mほどに越前焼窯の破片と平らな石を敷き詰めた遺構SX3076が3ヵ所ある。何らかの作業用の遺構と考えられるが、具体的な用途は不明。土壌SX3151は長径2m、短径1mあり、内部は焼土で埋まっていた。

明確であるが、南北7.51m(4間)と推定される。柱間は6尺2寸(1.8786m)となる。建物内部は石列SX3186で東西に2分でき、東半分は床面が固く締まっていたのに対して、西半分は薄い焼け土のトは黒く炭混じりの土の中に板材が多数埋まっていた。また建物の西側中央部付近に大甕設置遺構SX3155がある。3個体の越前焼大甕を肩近くまで埋設した遺構である。3個体のうち2個体が抜き取られ1個体は底部から甕部が原位置に残っていた。この建物の北西隅付近にも大甕設置遺構SX3154がある。この甕は底部が原位置に残っていた。

SB3066 SB3065の南東に位置する礎石建物で、東西方向に2.3m、南北方向に3.7m分礎石列が残存する。礎石と礎石の間にはやや小振りの石が並び、布基礎のようになっている。SB3655とは南へ1.3m、東へ3.15mずれるが、建物方向が一致するところから、SB3066の部分を増築したと推定される。ただ礎石のレベルはSB3066の方が10cmほど高く、ずれる寸法も尺貫法で割り切れる数値とならない。

SB3064 SB3065の北側に位置する礎石建物で、北辺礎石列が東西方向に9.6m、東辺の礎石列とその並びに石列が5.5m分並ぶが、礎石がとんでいるなど規模は不明であり、はたして1軒の建物かどうかははっきりしない。

これらの建物群は、方向はそろっているが、礎石列が必ずしも通るわけではない。したがって、増築など建てられた時期が異なっているとも考えられる。建物の向きは道路SS2001とは一致せず、屋敷の東側の石列SX3129と一致する。

SF3094 礎石建物SB3065の南に位置し、東西0.7m×南北1.0m×深さ0.6mを掘る。内部は焼土混じりの土で埋められていた。便所と推定される。

SX3154 越前焼大甕設置遺構でSX3155から5m西に単独で埋設されていたが、調査時には甕は抜き取られていた。

SX3155 礎石建物SB3065内に設置された越前焼大甕埋設遺構で、3個体甕の肩近くまで埋設されていた。周辺は焼け残った板が多数ある炭混じり土が広がっていた。

SE3084 東西道路SD2001からの通路SD3098の西に位置する石組井戸で、天端石までよく残っていた。直径は約1.0mである。

SE3085 屋敷地の北東隅に位置する石組井戸で、天端石までよく残っていた。直径は約1.0mである。なお両井戸とも安全を考慮して底まで調査しなかったので深さは不明である。

SD3034 屋敷地の北西に位置する石組溝である。越前焼埋設遺構SX3154付近から北流し、井戸SE3084付近から西に折れて、この屋敷51-2西側を区画する溝SD3031に注ぐ。幅は0.4m、全長は8.5mある。溝の東に筈谷石製の四角い鉢SX3118と石敷SX3118がある。

#### 下層

下層の時期には、区画51-4の西を限る溝SD3031がまっすぐに流れていた(SD3032)。その時のこの屋敷の地口はSS2001に面して約10mあった。全体に下層遺構の残存状況はあまりよくない。礎石らしき石や砂利敷状の遺構が存在し、下層面の存在は確実であるが、まとまった遺構としては北西隅付近の礎石建物SB3058だけである。

SB3058 区画51-4北西隅近くに位置し、上層遺構から0.3m下に存在する。規模については、現在残っている礎石からは東西2.7m(2間)×南北4.8m(2.5間)である。この礎石建物は東に延びていると考えられたが、溝SD3031を越えて東側では礎石等は確認できなかった。西側の礎石の間にはやや乱れた石列がある。

SX3110 SE3084の北側に位置する石列で、東西方向に5mのびる。南向きの面がそろっている。

SX3122 通路SS3098の南に位置する石列で、3.2m確認できた。西に面をそろえている。

調査地区の南東部に位置する51-5~14までの区画群は、それぞれを区画する溝が浅く、これらの区画全体が一つの屋敷だったが、後に路地=通路SS3097を入れるとともに、溝によって小区画に分割したと推定される。その時期は定かではないが、それぞれの区画に2時期遺構面が認められること、下層遺構面に敷き詰めてあった越前焼瓦の口縁が16世紀前葉と推定されるⅢ群bと・乗谷最終時期にあたるⅢ群Cの中間的な形をしていることから、ほぼ16世紀中葉の時期ではないかと推定される。これらの小区画群は、SD3040以东の51-5~8までと、SD3040を挟んで背中合わせになる51-9・51-10の2区画、通路SS3097の奥にある51-11、通路SS3097より西にある51-11・12・13・14に分けられる。

SS3097 南北方向の砂利敷の袋小路で、区画51-11に突当る。幅は1.3m、現存する長さは8.5mである。南よりの2m分は準大の石を敷き詰め、その北は小砂利敷となっている。

SD3037 溝SD3036から東に流れて区画51-12・51-14と51-11を分ける溝である。東に流れてSD3039、SD3046とつながる。幅は0.3m内外で深さは約0.3mある。溝石は2~3石積んでいる。

SD3040 区画51-5から51-8までの小区画群の背後を南北に流れる石組溝で、調査した長さは約16m、幅は0.25m前後である。深さは0.3m程である。このSD3040に石組溝SD3043、SD3044、SD3045が直角につながり、51-5から51-8までを区画している。

#### 区画51-5~8

これらの小区画群は敷地の幅が5m前後で、奥行きは一乗谷川に挟まれて不明であるが、現存する最も深い奥行きを有するのは51-5で、4.8mを測る。51-7には上層に1.2m×1.0mの平らな河原石を敷き詰め、周囲を石で囲った石敷遺構SX3153があり、51-3には縁を石で囲った0.5m×1.1mの炉SX3152がある。51-6の下層には2~3石の礎石が認められるが、建物規模は不明である。これらの4軒の小区画群は東側に入りがあったと推定される。

なお、区画の番号は付さなかったが、51-5の北側にもう1区画あった可能性がある。

#### 区画51-9

51-5・6の西に位置する小区画屋敷で、敷地幅は5.0m、奥行きははっきりしないが、12m前後と推定される。上層では礎石など建物跡は失われていたが、石敷SX3075と石積遺構SF3087がある。

石敷SX3156は51-6の石敷3148と同じく平らな河原石を敷いてまわりを厚みのある河原石で囲んである。形は長径1.1m、短径0.9mの楕円形である。石積施設SF3087も長径1.1m、短径0.8mの楕円形で、石を3石ないし4石積み、深さは0.4mを測る。

入口ははっきりしないが路地SS3097から入るとすると石敷遺構SX3156の北側付近と推定される。

上層遺構面から0.15m下に下層の遺構面があり、石列SX3149、SX3150の他、不整形ながら径0.8mほどに越前焼瓦の破片と平らな石を敷き詰めた遺構SX3076が3ヵ所ある。何らかの作業用の遺構と考えられるが、具体的な用途は不明。土溝SX3151は長径2m、短径1mあり、内部は焼土で埋まっていた。

#### 区画51-10

東は石組溝SD3040、西は路地SS3097、北はSD3046で区画される。敷地幅は5m、奥行きは6m分測全したがまだ南に延びる。上層には直径0.7mの井戸SE3091と石敷遺構SX3148がある。敷地を区画する溝(SX3040、SD3046)のすぐ内側に礎石が3石残っているが、建物の規模は不明である。

石組井戸SE3091は直径0.7m程で天端石が残っていた。石敷敷SX3148は0.3mから0.2m程の石を不整形に敷いてある。

上層の0.15m下に下層の遺構面があり、南北方向の石列SX3147が見つかった。この石列は西に面を持ちその西側は砂利敷となっていた。

#### 区画51-11

51-9の西にある区画で、東はSD3039、西はSD3036、南はSD3037で区画される。なお北側は水田の段となつてため区画は明瞭ではないが、石列SX3160やSX3137が境界と推定される。規模は東西10m、南北12.5mとこの小区画群の中では最も広い。

南側の区画溝SD3037は、溝SD3039と接合し、南に流れ、東に折れ曲がって溝SD3046となり、SD3040につながる。

区画の北西寄りに礎石建物SB3068がある。規模は東西3.2m×南北3.8m(2間)である。建物の規模の割に礎石が大きいことから西に広がっていた可能性がある。西から半間の所の礎石列は2間の間に7石ある。この建物の東には溝SD3038があり、この溝で区画51-11は東西に2分される。南に石組井戸SE3088があり、直径は約1mである。

敷地の北西隅に石積遺構SF3096がある。東西1.4m、南北1.6m、深さ0.8mである。このSF3096は明らかに溝SD3036を壊している。このときSD3036はSD3037との合流点まで埋められていて、南から流れてきた水はSD3037の方へながれていったと推定される。

下層は、0.15m下に遺構面が認められたが、はっきりした遺構はあまり多くない。南東隅付近から東西方向の石列SX3158が見つかったほかには、北東隅付近の石敷き遺構SX3159が見られるだけである。

#### 区画51-12・13

区画51-12は通路SS3097の西に位置する区画で、規模は東西7m、南北7mのほぼ正方形をしている。南、西、北はそれぞれ溝SD3052、SD3048、SD3037で区画される。

建物については、路地SS3097との境界石列と井戸SE3090の北と西の石列に礎石らしき石が並ぶところがあり、これをこの屋敷の礎石建物BS3074とした。規模は3.8m四方である。区画の中央付近に東西方向に石組溝SD3047がある。残存していた長さは2mで、溝SD3048には繋がらない。

51-12の南側にもSD3052を挟んで小区画屋敷があり、これを51-13とする。調査範囲が狭く遺構はない。

#### 区画51-14

51-10の西側の区画で、東西は約5m、南北は調査地区外に広がっているので8m以上ある。礎石建物SB3072が確認でき、南北方向に棟通りの礎石列が7石6.2m並ぶ。建物の幅は、礎石がうまく拾えないが4m前後と推定される。この礎石建物の南側に接して井戸SE3089がある。この井戸の周辺は石敷

SX3050となっていて洗い場と推定される。この洗い場の北側に溝SD3051があって、井戸周りの排水溝となっている。

#### 区画51-15

51次調査地区の北西に位置する医師の家である。医師の家と推定したのは「湯波本草」という医学書や匙、乳鉢等がこの区画から出土したことによる。

北はSD2860、西はSD2862、SV3188、南はSD3035、東はSD3031によって区画され、規模は東西14.5m×南北33.5mを測る。なお地1は後に4m分東に広がっている。面積は後に広がった分も含めて約522㎡である。大通SS2001に面した北側は土塀があり、北西隅に門SI2911が開く。西側は門のところから9m分だけに幅0.7mの土塀基礎がある。

この屋敷地は、石列SX3232と溝SD3182によって3つに分けられる。石列SX3233の北側は礎石建物SB3059を中心とした空間で、この建物と土塀SA2878の間に庭園SG2914がある。このことから表向きの空間であろう。SX3233とSD3182に挟まれた空間は溜井や井戸、越前焼入寛設置遺構があるところから、日常の生活を支える機能を持った空間であろう。SD3182より南は、礎石建物SB3201を中心とした日常生活を中心とした空間であろう。

**SA2878** この屋敷の北を区画する土塀基礎で、西端には門SI2991が建つ。土塀基礎の幅は0.8m、長さは13mを測る。基礎の両側に大きさ40cm×50cmほどの石を外に面を揃えて並べ、内側に小石や砂利を詰めている。残存している土塀基礎の高さは0.5m内外である。土塀基礎の西端には門の石と庭園の石を兼ねた高さ0.7m石が立っている。なお、屋敷の地口は東へ4m拡幅されているが、この拡幅された部分には土塀基礎がない。

**SA2879** この屋敷の西側を画する土塀の基礎で、幅0.7m、長さは6.5mである。これより南はもともと土塀が築かれなかったようである。残存している高さは敷地内から測って0.5mほどである。土塀の外側には人頭大の石を用いているが、内側はそれよりやや小さい石を用いている、この土塀の東側には溝SD3183がある。幅0.3m、長さ3.5mある。北端は門SA2878の所まで延びてきていて、ここから暗渠SZ2915をとって溝SD2862に排水される。

**SI2911** 門は屋敷地の北西隅に位置し、北辺の土塀基礎と西辺の土塀基礎の間にある。両土塀基礎の端には高さ0.7m程の大きさの石が立っている。門の建物は溝SD2860から1.1m入った位置にある。前後2列に並ぶ石列があり、その両端の石が礎石となっている。このことから薬師門と想定される。門柱の間隔は心々で2.27m(7尺5寸)あり、石列の間隔は1.45mある。

**SB3059** 門SI2911を入れてすぐ左手に位置する礎石建物である。建物の北半分の東西方向が縁も含めて東西9.3m、南半分が東西8.8mを測り、南北方向は10.3mである。縁は北と西に幅4尺の縁が付く、東側にも北半分に3尺の縁が付く。さらに北西隅の西側に幅3尺×1間半の落縁が付く。この縁の先には直径0.8m程の沓脱石据えられている。また北西隅の北側にも半間×1間規模の庭に降りるための縁が付く。この縁の東にも沓脱石が据えられている。南北方向には東西の両側の礎石列だけが直線に並ぶが、内部の礎石列は、北から2間半のところを半間ずれるところから建物の内部空間は南北に大きくわかれ、柱の方向も微妙にずれることから、南北のいずれかを改築したのではないと推定される。

**SG2914** 礎石建物SB3059と土塀SA2878の間にある枯れ泉水の平庭である。規模は幅11m×奥行1.7mで、高さ0.7m程の立石の両脇に平らな石と高さ40cm程の石を据えた三尊石風の石組と、自然石で築の

ように組まれた内径0.5m×0.9mの井戸がある。井戸の脇にも長さ1.3mの沓脱石が据えられている。庭には白い小砂利が化粧敷され、井戸の西側には拳大の石が庭を2分するように一列に並ぶ。ここに簡易な塀があった可能性がある。

**SX3230** 土塀基礎SA3183の南端から東方向に延びる石列で、この石列より南が0.1mほど高くなっている。この石列の南に石列SX3231があり、この間には拳2個ほどの石が多く見られた。石列SX3231と直角に、拳大の石を一直線に並べた石列SX3232がある。両端は礎石のような石があり、その間隔は1.8mである。

**SX3233** この石列は屋敷地の西を限るSD2682から南を限るSD3031まで屋敷を横切って、長さ12mある。この石列を境にSB3059のある北側の空間が0.2m程低くなっている。石列SX3233から南へ溝SD3182までが、越前焼大甕設置遺構や溜槽、井戸などがある日常雑倉群となっている。

**SB3062** 敷地の中央に位置し、北側の礎石建物SB3059と接するように建つ礎石建物である。規模は南北方向4.2m、東西方向は5mまで礎石が残っているが、さらに西側の伸びていたと推定される。建物の中には越前焼大甕3個体を設置した土塀SX3115や石積遺構SF3093などがあり、この原敷の日常雑倉的な建物と考えられる。

**SX3115** 礎石建物SB3062の南東隅に位置する越前焼大甕設置遺構である。長さ2m、幅1.2mの土塀を掘り、この土構内2個体、土塀の北西隅にはみ出すように1個体、計3個体の越前焼大甕が厩近くまで埋まるように設置されていた跡があった。越前焼大甕は掘り出されていて、底部も残っていないかった。土塀内は他の越前焼大甕設置遺構同様焼け土で埋まっていた。

**SF3093** 同じく礎石建物SB3062内部にあった石積施設である。内部は3段の階段状に石が積まれ、それぞれの石段の下には直径10cm程の木材が敷かれていた。SF3093の外側の大きさは1.5m×1.0mあり、深さは0.6mある。底には越前焼播鉢が設置されていた。これまで便所としてきた石積施設とは形状や内部の構造が異なっている。

**SX3112** SF3093の北西に接して1.5m×2.5mの範囲にレンズ状に窪んだ炭混じりの層があり、この層を0.1mほど掘り下げると厚さ3cm、幅30cm、長さ1.2m程の板が数枚重なって出土した。

**SX3113** SX3112の南に位置する石敷遺構で、1.2m×0.8mの方形に拳大よりやや大きい河原石が敷き詰められている。

**SD3178** 礎石建物SB3062の西側にある石組溝である。西側はSD2862に繋がるが、東は溝石が欠われていて、残存長は1.8mである。東側に溝に半分石が失われているが石囲いの遺構SX3225が付属する。

**SB3201** 医師の家の屋敷地の南端近くに位置する礎石建物である。南半分は削半されて礎石が失われていて2.8m(1間半)分しか礎石が残っていない。東西方向は6.4m(3間半)である。北側に1.8m(1間)長さ4.4mの庇が付く。

**SE3086** 直径約1mの石組井戸である。深さは底まで掘っていないので不明。天端石と西側の上から2～3段石が欠われていた。この井戸に接するように石敷SX3116がある。なおこの屋敷の井戸は庭園SGにある露風の井戸SE3083とこのSE3086の2本のみである。

## 下層

この医師の屋敷は上層の遺構の残存状況が良かったので、下層はあまり調査していない。SB3201の南側で下層まで掘り下げたが、まとまった遺構はなかった。



### 3. 遺物(第7~32図、PL15~40、表2、挿図5・6、口絵3)

本報告書で取り扱う遺物は第51次調査出土遺物である。出土遺物の総点数は44,450点を数える。その内容は中国産陶磁器や金属製品、木製品を中心に多彩であるが、なかでも区画51-15の屋敷より出土した焼紙断片は特筆される。その内容から医学書『湯液本草』の写本断簡であると判明し、この屋敷の主が区画で屋敷は「医者の家」が有力になったことである。この資料については本節末尾にて詳述する。

その他遺物の掲載は、各屋敷の区画と区画溝ごとに行うこととする。

遺物の分類については既刊報告書を踏襲した。越前焼塗・播鉢の分類は『景道結江・美山線改良工事に伴う発掘調査報告書』1983年、土師質土器Ⅱの分類は『朝倉氏遺跡発掘調査報告Ⅰ』1979年による。

| 器種  | 点数     | %     | 器種     | 点数    | %     | 器種   | 点数    | %    | 器種    | 点数     | %      |
|-----|--------|-------|--------|-------|-------|------|-------|------|-------|--------|--------|
| 罎   | 6,356  |       | 罎      | 377   |       | 網致   | 386   |      | パンドコ  | 18     |        |
| 壺   | 2,739  |       | 皿      | 732   |       | 釘    | 505   |      | 風釘    | 1      |        |
| 鉢   | 659    |       | 鉢      | 50    |       | 陶止   | 8     |      | 白     | 4      |        |
| 播鉢  | 1,996  |       | 甕      | 124   |       | 埴    | 1     |      | 甕     | 45     |        |
| 火桶  | 2      |       | 灰・糠    | 52    |       | 火箸   | 13    |      | 甕     | 148    |        |
| 角杯  | 1      |       | 香炉     | 24    |       | 鍋    | 8     |      | 瓦石    | 46     |        |
| 河原  | 10     |       | その他    | 3     |       | 釜    | 2     |      | 火打石   | 2      |        |
| 皿   | 3      |       | 計      | 1,362 | 3.96  | 毛抜き  | 7     |      | 鉢     | 8      |        |
| その他 | 5      |       | 陶      | 31    |       | 匙    | 4     |      | 瓦     | 93     |        |
| 計   | 11,771 | 26.48 | 皿      | 2,381 |       | 箸    | 2     |      | 火打    | 221    |        |
| 罎   | 22,986 |       | 杯      | 146   |       | 銚    | 1     |      | その他   | 85     |        |
| 土瓶  | 4      |       | 壺      | 3     |       | 金網   | 2     |      | 計     | 671    | 1.51   |
| 土蓋  | 104    |       | その他    | 10    |       | 火打金  | 2     |      | 漆碗    | 3      |        |
| 土鈴  | 24     |       | 甕      | 2,571 | 5.78  | 包丁   | 1     |      | 漆皿    | 10     |        |
| その他 | 20     |       | 甕      | 492   |       | 引手   | 4     |      | 漆器    | 11     |        |
| 計   | 23,138 | 52.05 | 甕      | 890   |       | 餅    | 3     |      | 漆壺    | 1      |        |
| 罎   | 381    |       | 杯      | 55    |       | 鈴    | 1     |      | 漆物    | 44     |        |
| 皿   | 23     |       | その他    | 6     |       | 水筒   | 1     |      | 新敷    | 42     |        |
| 茶入  | 21     |       | 計      | 1,443 | 3.25  | 漆金具  | 16    |      | 桶     | 45     |        |
| 壺   | 129    |       | 青白磁    | 183   |       | 金具   | 36    |      | ト取    | 10     |        |
| 鉢   | 40     |       | 黒陶磁器   | 15    |       | 小柄   | 12    |      | 駒     | 1      |        |
| 水筒  | 6      |       | 茶碗彩釉   | 3     |       | 刀子   | 18    |      | 鴉     | 2      |        |
| 香炉  | 7      |       | その他    | 26    |       | 切刃   | 1     |      | 箕     | 25     |        |
| 壺   | 2      |       | 計      | 198   | 0.45  | 拵    | 1     |      | 柱     | 7      |        |
| 花生  | 2      |       | 朝鮮製陶磁器 | 272   | 0.61  | 觥    | 1     |      | 角材    | 13     |        |
| 計   | 611    | 1.37  | 小計     | 5,846 | 13.15 | 小札   | 28    |      | 丸太材   | 10     |        |
| 罎   | 95     |       |        |       |       | 壳彫形台 | 1     |      | 漆塗材   | 1      |        |
| 皿   | 348    |       |        |       |       | 建付金具 | 1     |      | 加工木   | 15     |        |
| 壺   | 19     |       |        |       |       | 真金具  | 4     |      | 瓦     | 2      |        |
| 鉢   | 8      |       |        |       |       | 点粉   | 2     |      | 漆     | 6      |        |
| 灰缸  | 6      |       |        |       |       | 瓶    | 4     |      | 糸色伸   | 3      |        |
| 水筒  | 3      |       |        |       |       | 瓶    | 7     |      | 約子    | 2      |        |
| 杯   | 5      |       |        |       |       | 金七ル  | 9     |      | 漆器    | 1      |        |
| 蓋   | 1      |       |        |       |       | その他  | 59    |      | その他   | 249    |        |
| 計   | 485    | 1.09  |        |       |       | 計    | 1,151 | 2.59 | 計     | 519    | 1.17   |
| 火鉢  | 11     |       |        |       |       |      |       |      | 新石    | 2      |        |
| 磁か  | 7      |       |        |       |       |      |       |      | 泥角製品  | 7      |        |
| 香炉  | 21     |       |        |       |       |      |       |      | ガラス玉  | 2      |        |
| 不甕  | 11     |       |        |       |       |      |       |      | 罎上    | 15     |        |
| 計   | 50     | 0.11  |        |       |       |      |       |      | 鎌子    | 26     |        |
| その他 | 46     |       |        |       |       |      |       |      | 骨     | 29     |        |
| 近世  | 92     |       |        |       |       |      |       |      | 礫石    | 2      |        |
| 計   | 138    | 0.31  |        |       |       |      |       |      | 紙     | 1      |        |
| 小計  | 36,193 | 81.42 |        |       |       |      |       |      | 計     | 70     | 0.16   |
|     |        |       |        |       |       |      |       |      | 製器供小計 | 2,411  | 5.42   |
|     |        |       |        |       |       |      |       |      | 合計    | 44,450 | 100.00 |

表2 第51次調査出土遺物一覧表

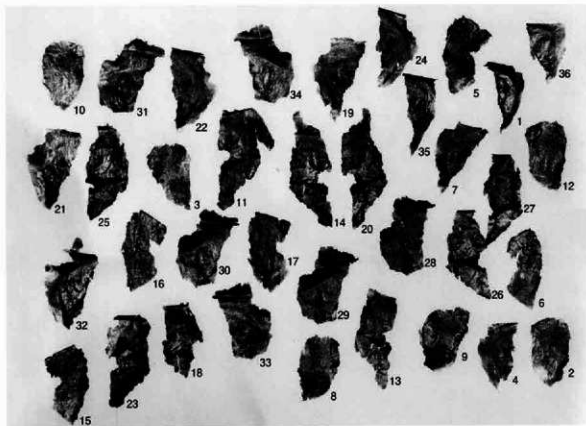
ま報告する。墨書の漢字は次のとおりである(漢字の字体は現代通用のものに統一した。字画が部分的で全体が読めない字は□で示した。一行の頭の部分にあったとみられる漢字には(行頭)と注記し、行が変わる部分は「」で示した。番号は概ねXⅧに載せられているものはそれに従った)。

1(行頭)神□ 2□□不。止有 3陽々明□□ 4(行頭)共□ 5散□ 胸中鬱 6□也於 7(行頭)液□ 8問□□実熱 9□心□□突而□ 10足「□□」□□ 11(行頭)傷食□(行頭)売□別有 12大陽経「陽明□ 13本草」微寒 14(行頭)鼓□胸脇(行頭)血脈□ 15□□□□益。気療 16□□陰太□ 17眠□□為。君王。 18(行頭)吐血□(行頭)□□□ 19(行頭)余 20(行頭)補。不□(行頭)珍□補胃 21(行頭)泄辟 22(行頭)黄□ 23(行頭)□□□(行頭)不用酒 24(行頭)象 25(行頭)病下。之(行頭)□□□胎 26(行頭)液□入手(行頭)馮心□ 27(行頭)本草(行頭)腹痛下痢 28□□(行頭)本草 29(行頭)□□東垣 30(行頭)□□(行頭)狂惑 31(行頭)湯「 32(行頭)効者因 33(行頭)療傷 34(行頭)汗骨 35(行頭)腸益 36(行頭)□□ 37□血□ 38気 39(行頭)□□ 40□足□ 41(行頭)掲酒

これらの断簡の内容は、中国元代の王好古が著した医薬書『湯液本草』の一部であることが知られており、また文字配列の比較から明の正徳戊辰年(1508)に刊行された熊氏梅隠堂本『湯液本草』巻下第36丁裏から第53丁表の部分から写されたものである可能性が高いことが指摘されている<sup>(1)</sup>。

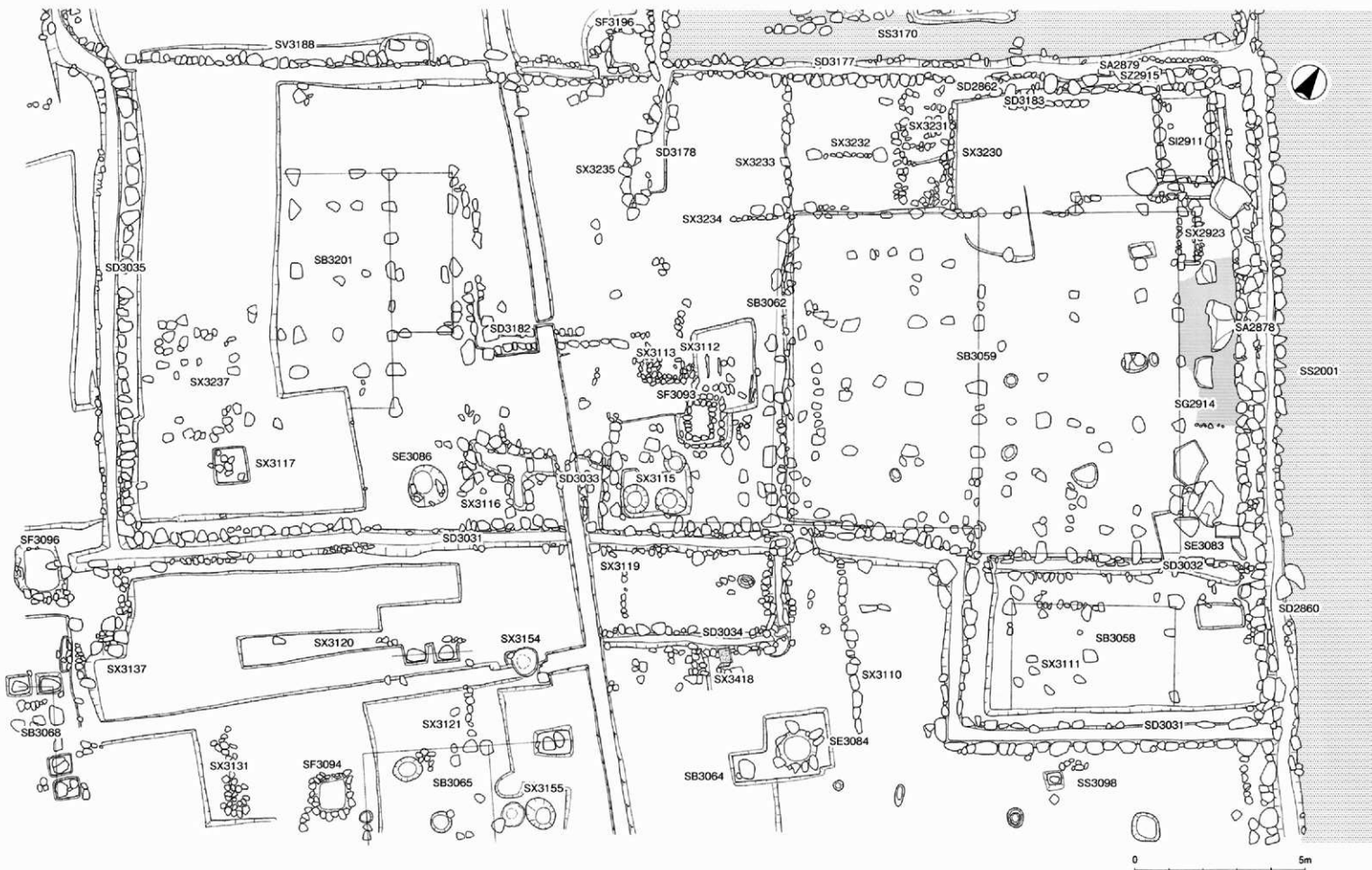
註

- (1) 清田善朝「朝倉氏遺跡出土の『湯液本草』断簡」『朝倉氏遺跡資料館紀要1987』1988年3月発行  
真柳誠「朝倉氏遺跡出土の『湯液本草』」『日本医史学雑誌』第39巻第4号1993年12月発行

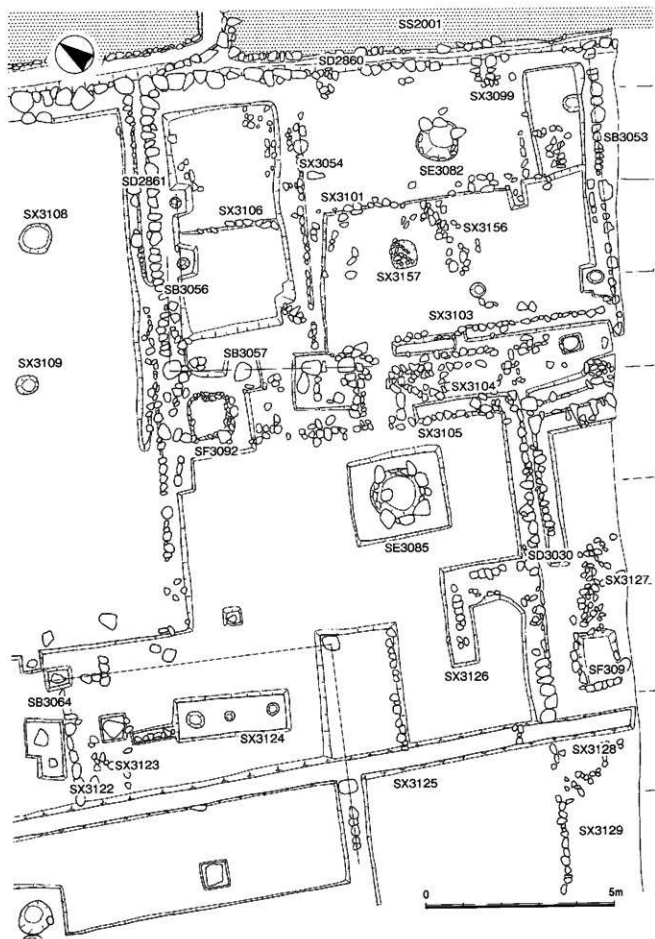


挿図6 『湯液本草』断簡

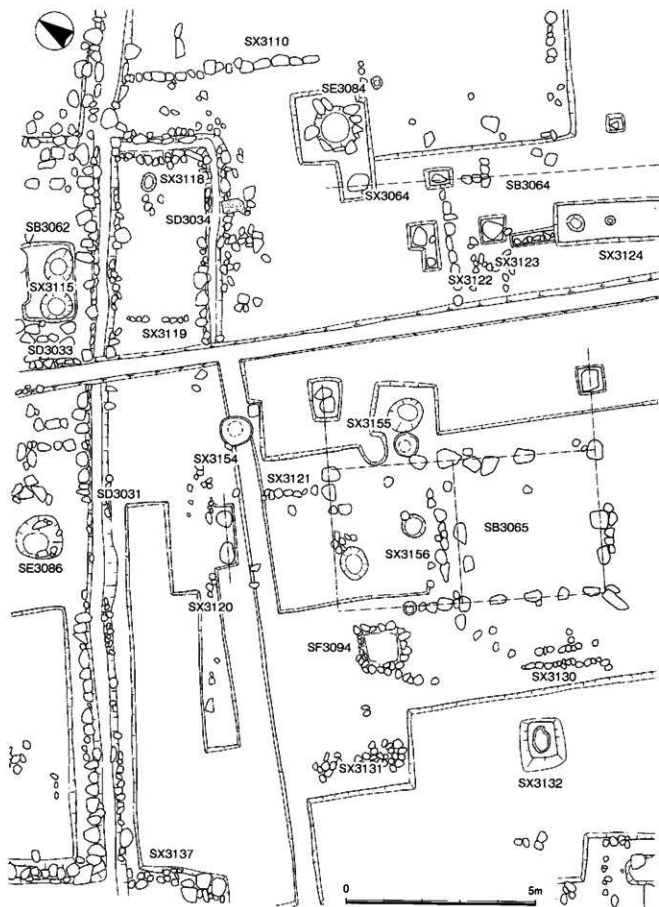
第1図 第51次調査遺構詳細図(1)



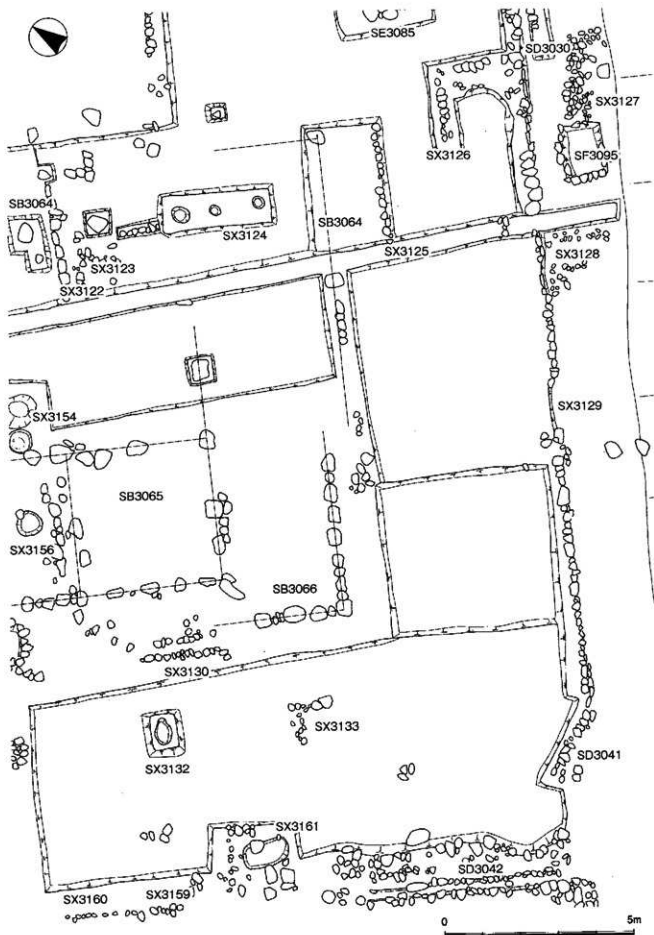
第2図 第51次調査遺構詳細図(2)



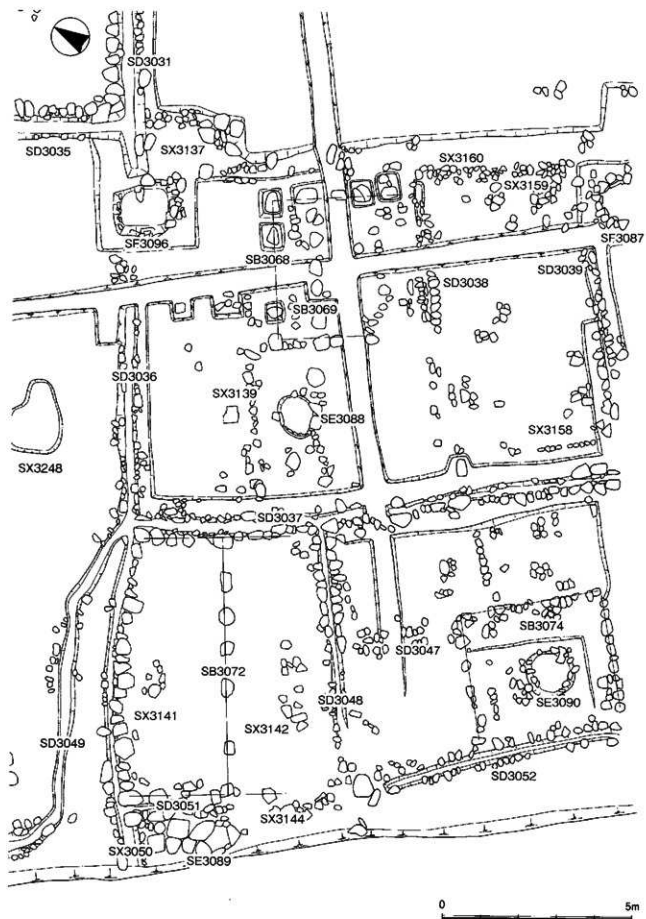
第3図 第51次調査遺構詳細図(3)



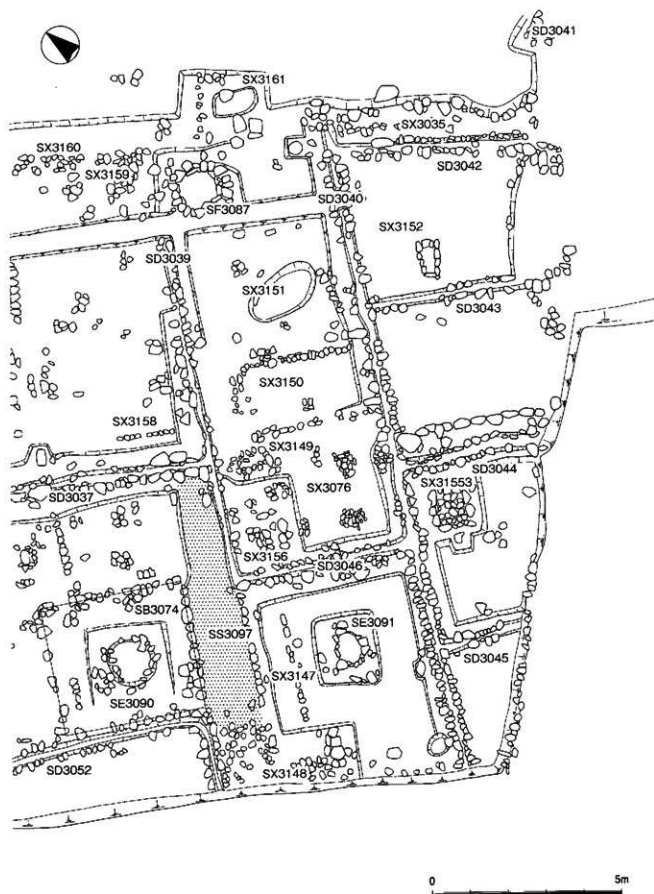
第4図 第51次調査遺構詳細図(4)



第5図 第51次調査遺構詳細図(5)



第6図 第51次調査遺構詳細図(6)







全景  
(北東から)



全景  
(南から)



全景  
(北から)

## 第51次調査

区画51-1  
(北から)区画51-1  
(東から)区画51-1  
石積施設SF3092  
井戸SE3082



区画51-4  
主要部(東から)



区画51-4  
礎石建物SB3065  
SB3066  
(東から)



区画51-4  
礎石建物SB3065  
SB3066  
(西から)



第51次調査

区画51-4  
通路SS3098  
〔北から〕区画51-4  
礎石建物SB3065  
板材出土状況  
〔東から〕区画51-4  
越前焼大甕設置遺構  
SX3155  
越前焼大甕設置遺構  
SX3154

## 第51次調査



区画51-4  
SX3142  
板材出土状況  
(東から)



区画51-4  
溝SX3034  
(東から)



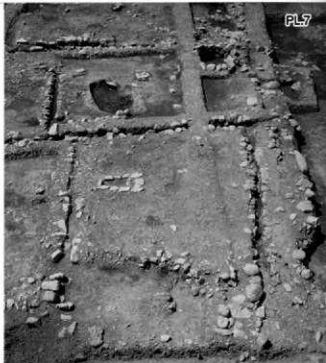
区画51-4 井戸SE3084・井戸SE3085

石積施設SF3094



区画51-5~14  
(南東から)区画51-5~14  
(東から)区画51-5・6・9・11  
(東から)

区画51-5  
(東から)



区画51-9  
(南から)



区画51-11・12  
(南から)





第51次調査

区画51-14  
(西から)区画51-11  
(西から)通路SS3097  
(南から)



## 第51次調査

区画51-9  
石敷道構SX3156-SX3076  
(北から)



区画51-7  
石敷道構SX3153  
区画51-5  
炉SX3152



区画51-9  
石積道構SF3087  
区画51-11  
石積道構SF3096



区画51-10  
井戸SE3091  
区画51-12  
井戸SE3090



区画51-14  
井戸SE3089  
区画51-11  
井戸SE3088

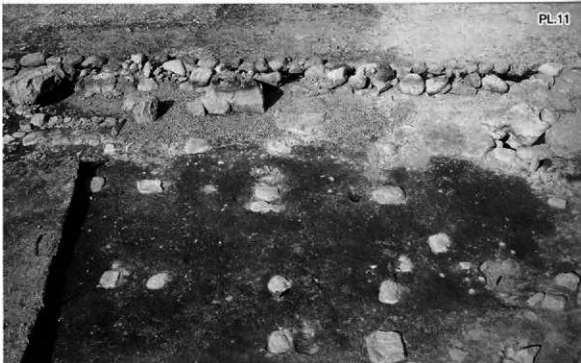




第51次調査

区画51-15  
(北から)区画51-15北半  
(西から)区画51-15  
門S12911  
(東から)

区画51-15  
庭園SG2914  
(南から)



区画51-15北西部  
SX3232  
SX3233  
(東から)



区画51-15北西部  
SX3231  
SX3232  
(南から)





区画51-15  
中央部(西から)



区画51-15  
中央部東半分(北から)



区画51-15  
SX3112・SF3093  
(西から)

区画51-15  
越前焼大甕設置遺構  
SX3115  
(東から)



区画51-15  
井戸SE3083  
井戸SE3086



区画51-15  
礎石建物SB3201  
(東から)





溝SD2861(北から)



溝SD3031(北から)



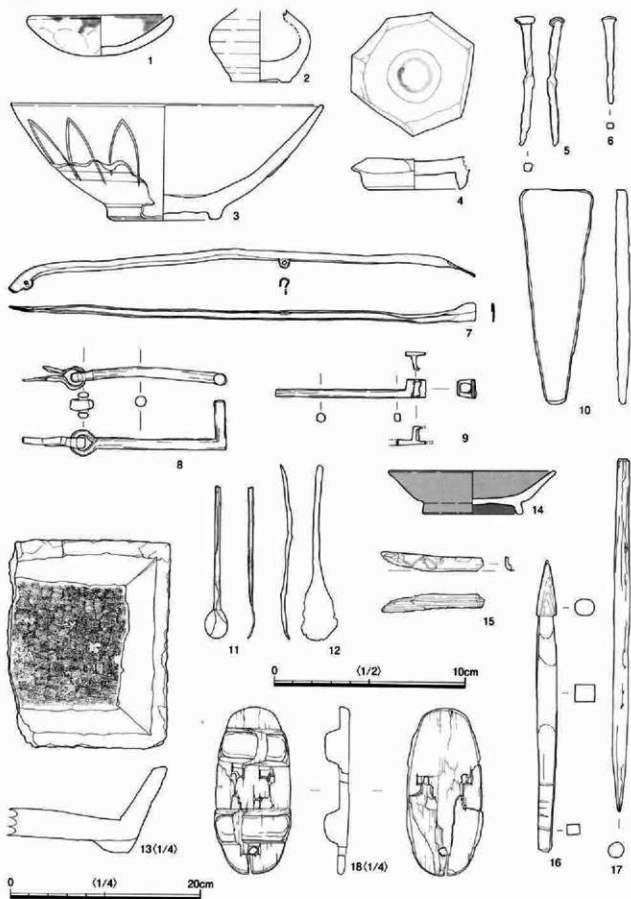
溝SD3037(西から)



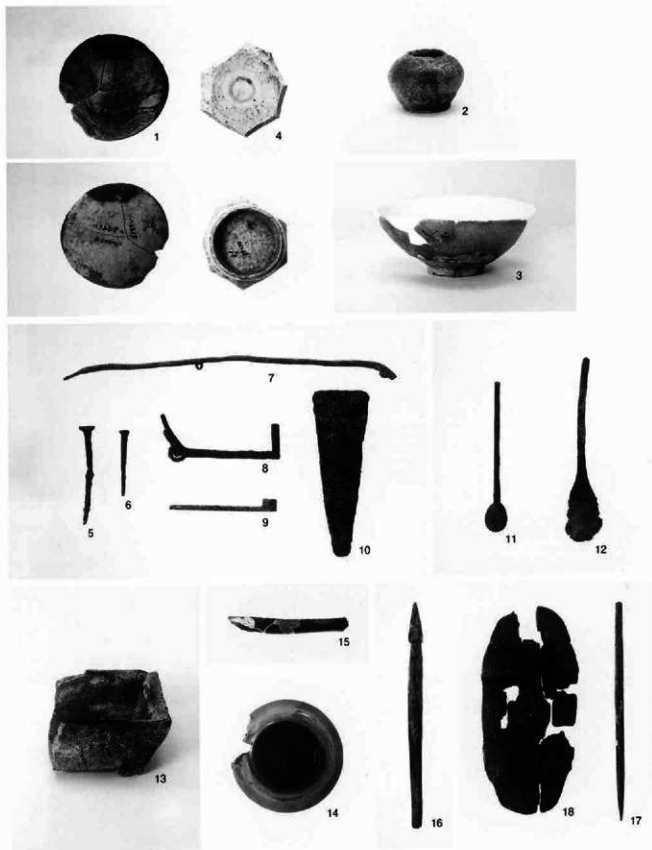
溝SD3032(西から)

第7図 第51次調査出土遺物(1)

区画1



土師質皿1 灰胎壺2 碗3 染付碗4 金屬製品釘5・6 飾金具7 銅止8 不明9・10 匙11・12  
石製品盤13 木製品漆皿14 漆製品15 棒状製品16 箸17 下駄18

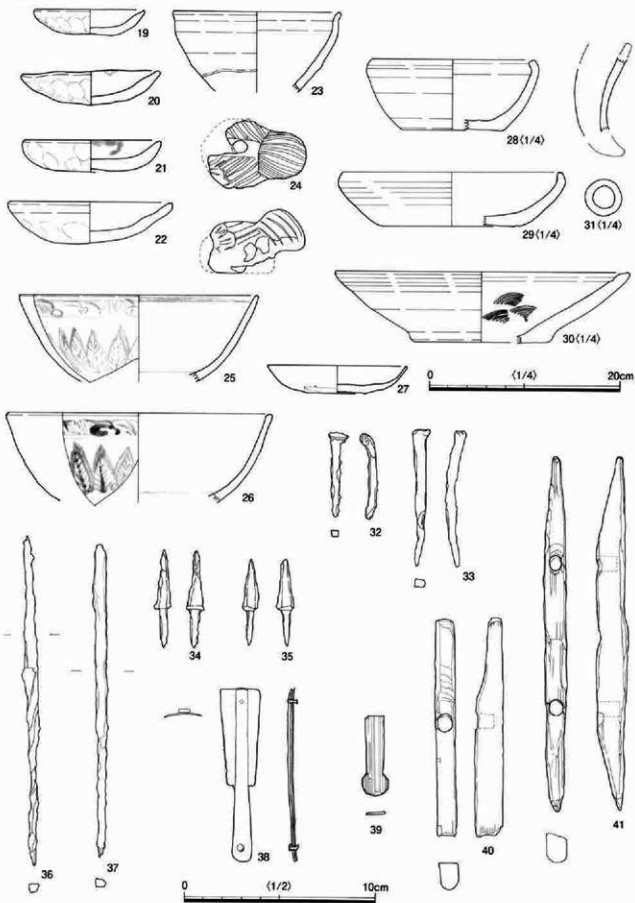


区画51-1 土師質皿1 灰釉壺2 碗3 染付碗4 金属製品釘5・6 飾金具7 鋸止8 不明9・10 匙11・12  
 石製品壺13 木製品漆皿14 漆製品15 棒状製品16 箸17 下駄18

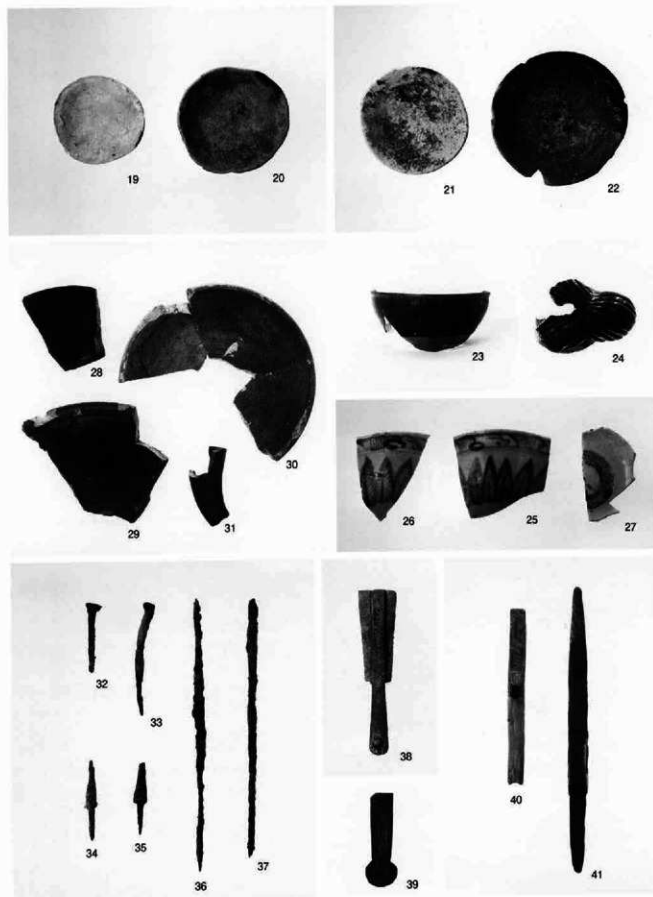


第8図 第51次調査出土遺物(2)

区画2



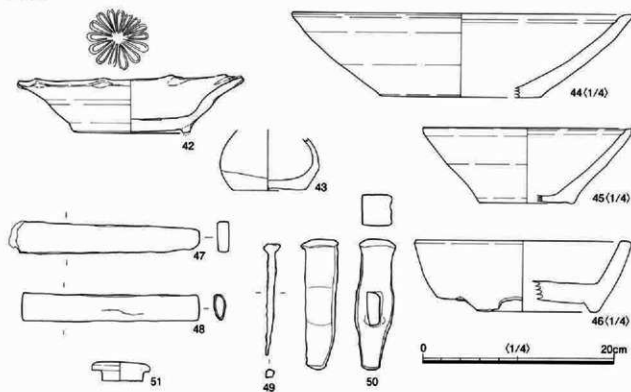
土師質皿19~22 鉄輪陶23 水漬24 染付碗25・26 白磁皿27 越前焼鉢28・29 浅鉢30 角環31  
 金属製品針32・33 鋸34・35 火箸36・37 鋤金具38 木製品人形状板39 糸巻き木杵40・41



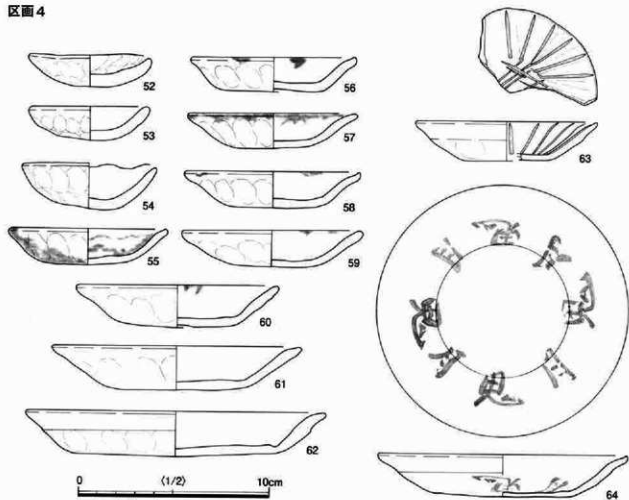
区画51-2 土師質皿19-22 鉄軸腕23 水満24 染付碗25・26 白磁皿27 越前焼鉢28・29 浅鉢30 角环31  
 金属製品釘32・33 鐵34・35 火箸36・37 鉾金具38 木製品人形状板39 糸巻き木杵40・41

第9図 第51次調査出土遺物(3)

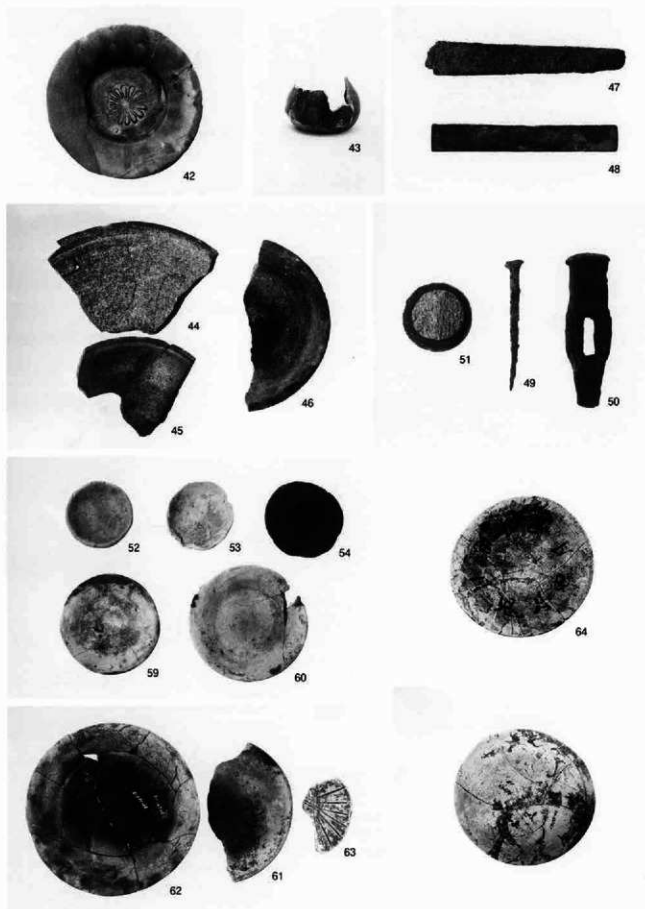
区画3



区画4



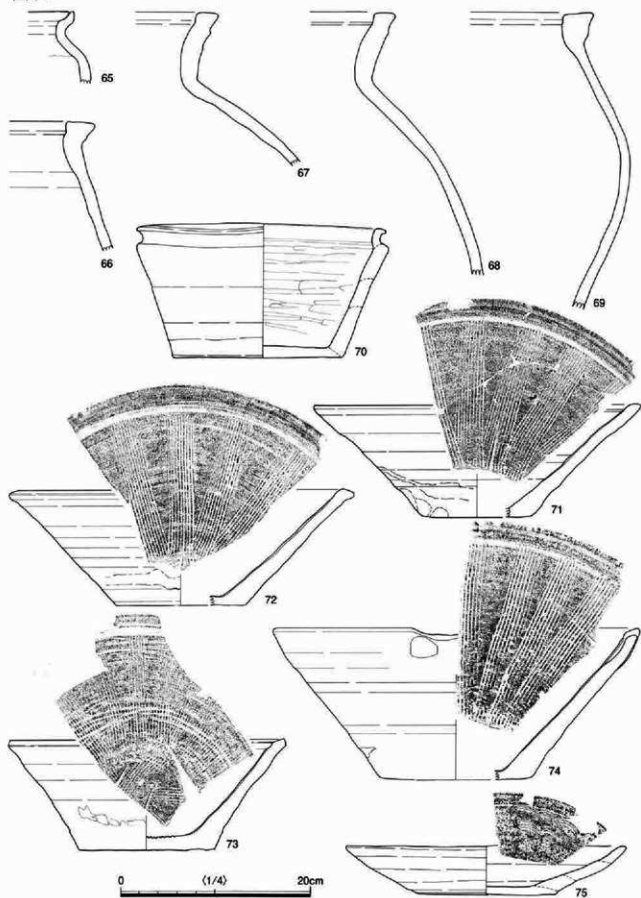
灰輪皿42 鉄輪茶入43 越前焼鉢44・45 石製品盤46 金属製品刀子47 小柄48 釘49 金輪50  
鹿角製品蓋51 土師質皿52～64



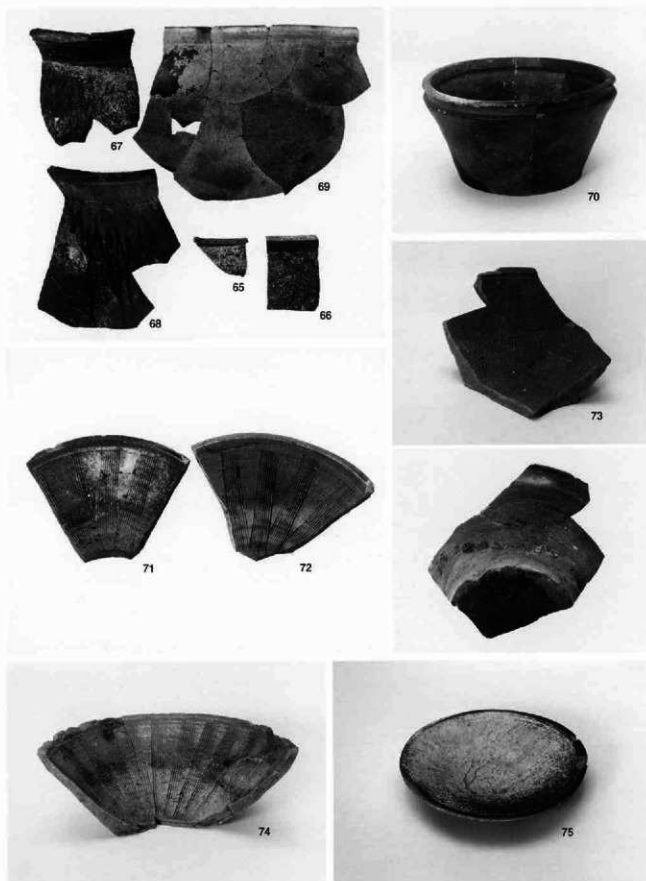
区画51-3 灰釉皿42 鉄釉茶入43 越前焼鉢44・45 石製品盤46 金属製品刀子47 小柄48 釘49 金桶50  
 鹿角製品蓋51 区画51-4 土師質皿52-54・59-64

第10図 第51次調査出土遺物 (4)

区画4



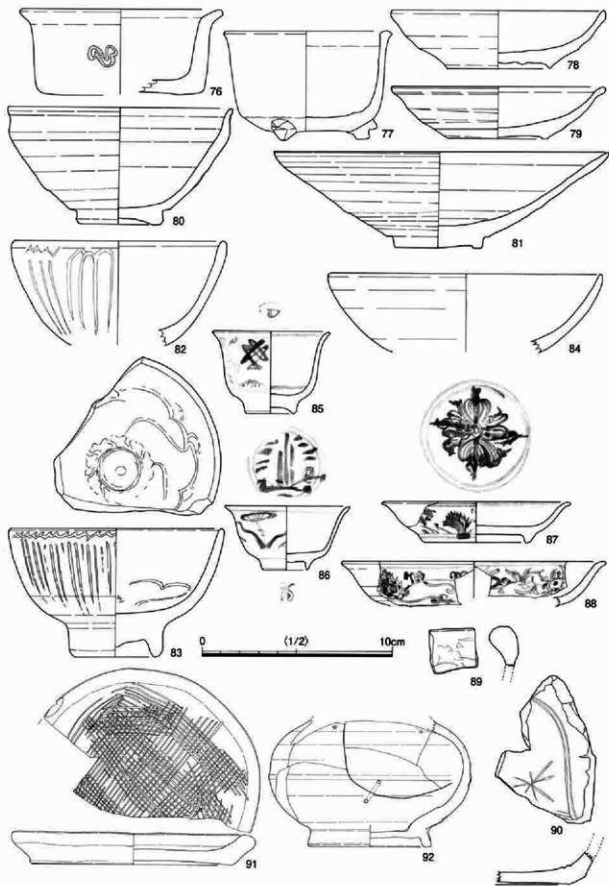
越前焼夷65～69 鉢70 搦鉢71～74 浅鉢75



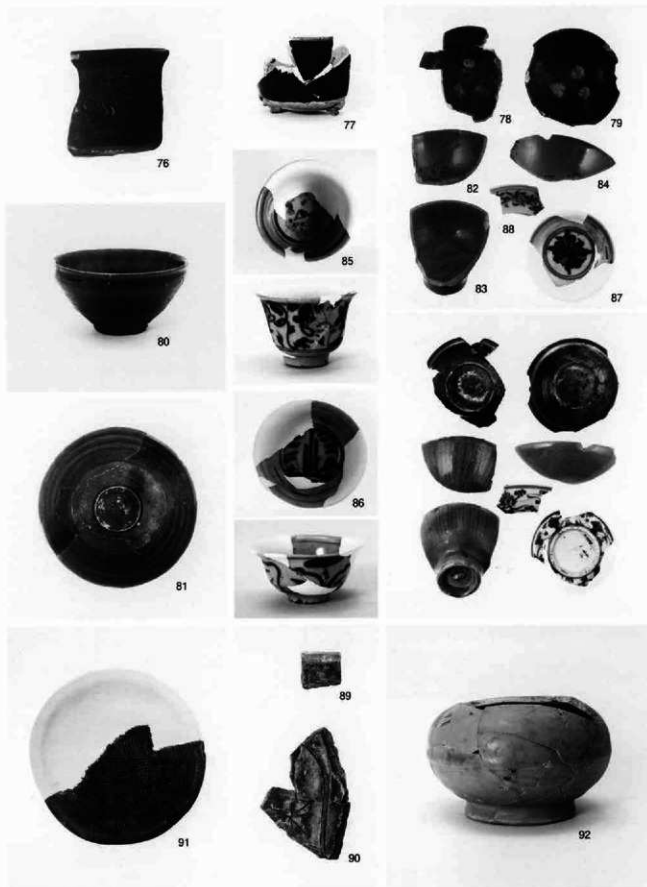
区画51-4 越前焼光65-69 鉢70 搦鉢71-74 浅鉢75

第11图 第51次調査出土遺物 (5)

区画4



瓦質土器香炉76 鉄軸香炉77 皿78-79 碗80 平碗81 青磁碗82~84 下燕花煎92  
 染付坏85-86 皿87-88 華南彩釉陶器89-90 越前焼印皿91

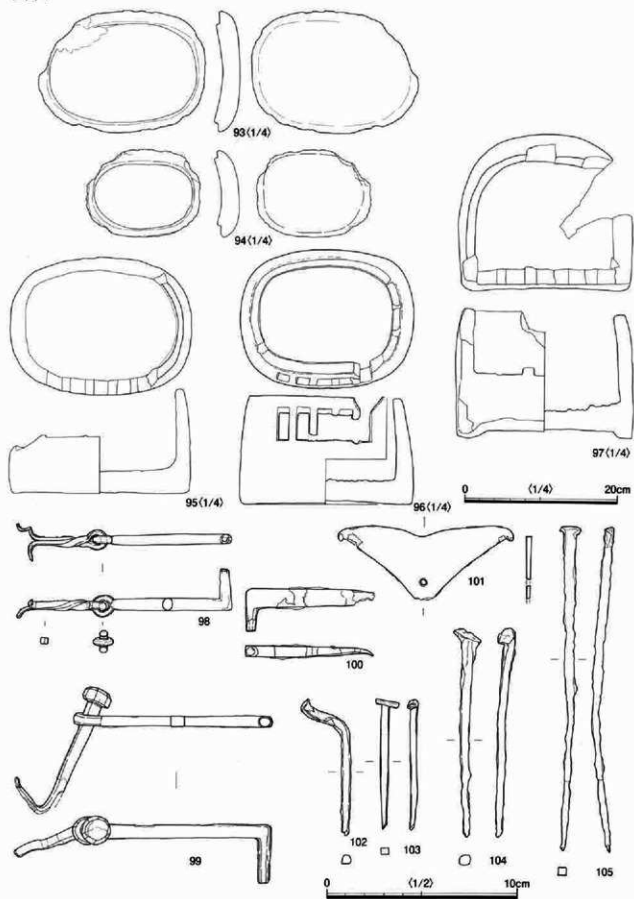


区画51-4 瓦質土器香炉76 鉄軸香炉77 皿78-79 碗80 平碗81 青磁碗82-84 下燕花紋92  
 染付坏85-86 皿87-88 華南彩釉陶器89-90 越前焼河皿91

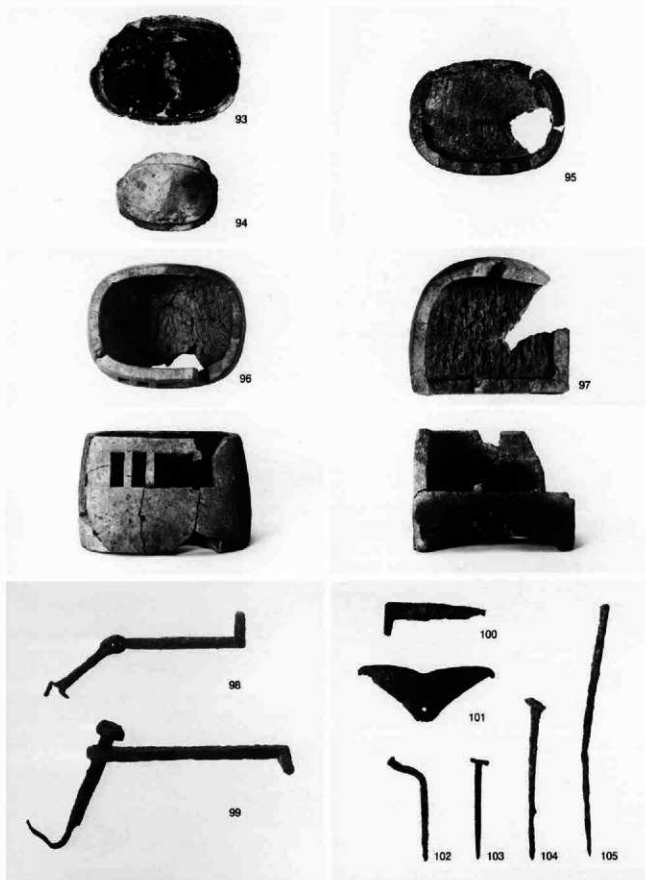


第12図 第51次調査出土遺物 (6)

区画4



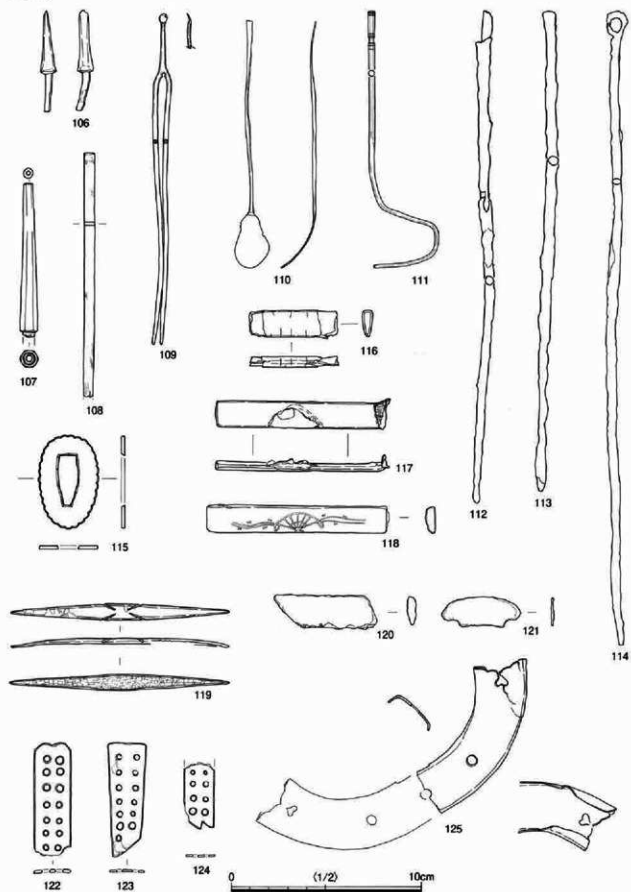
石製品バンドコ93-97 金属製品制止98-99 針金100 火打金101 針102-105



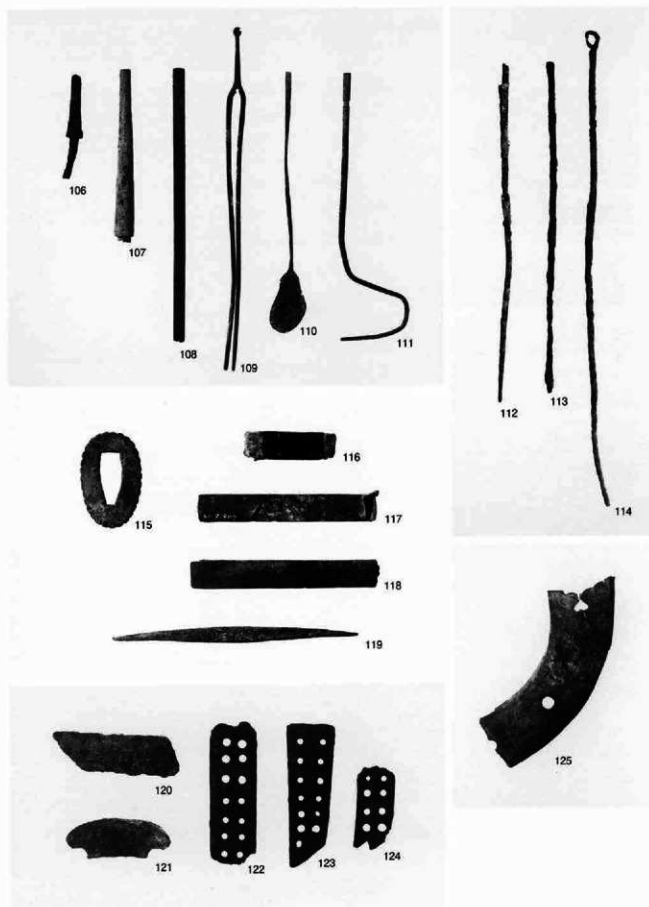
区画51-4 石製品バンドコ93-97 金属製品短止98-99 肘金100 火打金101 釘102-105

第13図 第51次調査出土遺物 (7)

区画4



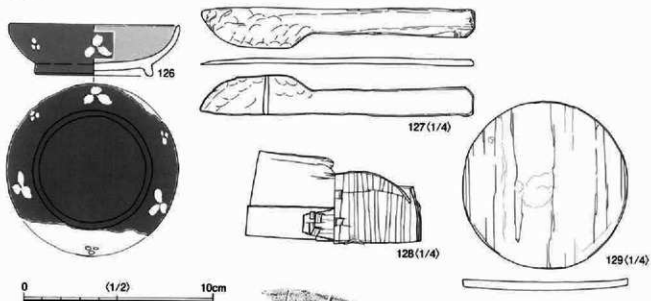
金屬製品106 不明107・108 簪109 匙110 火箸111~114 切羽115 刀子柄116 小柄117・118  
 飾金具119 小刀120 金具121 小札122~124 兜形台125



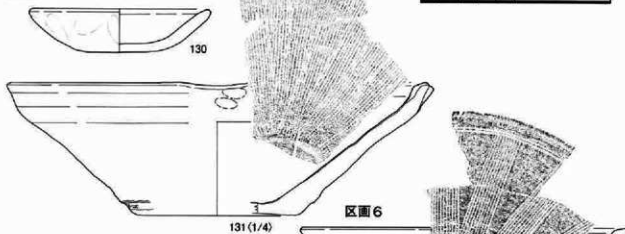
区画51-4 金属製品 鐵106 不明107-108 簪109 匙110 火箸111~114 切羽115 刀子鞘116 小柄117-118  
 鎌金具119 小刀120 金具121 小札122~124 兜鞞形台125

第14図 第51次調査出土遺物 (8)

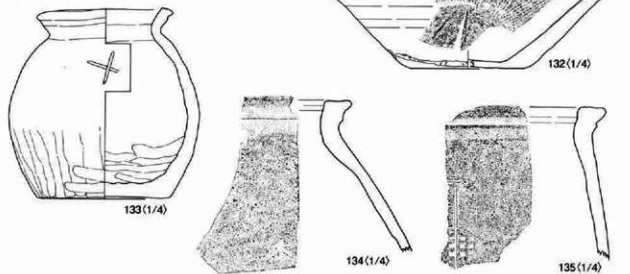
区画4



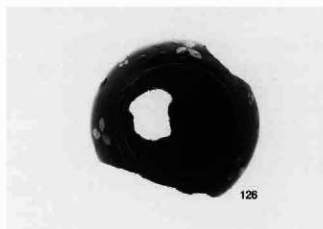
区画5



区画9



木製品漆皿126 籠127 曲物128 曲物底板129 土師質皿130 越前焼楯鉢131・132 ※133 甕134・135



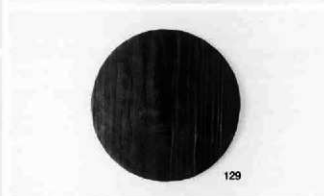
126



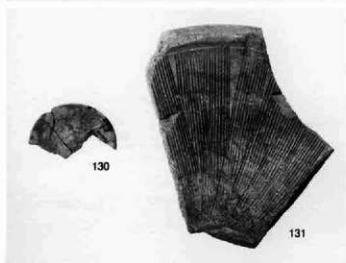
128



127

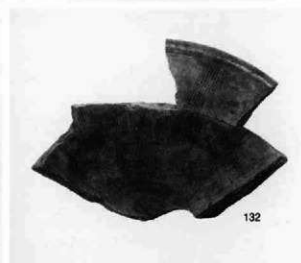


129



130

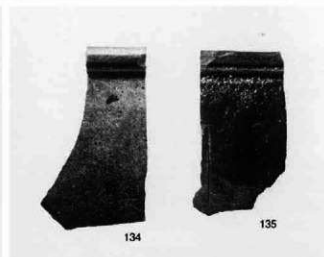
131



132



133



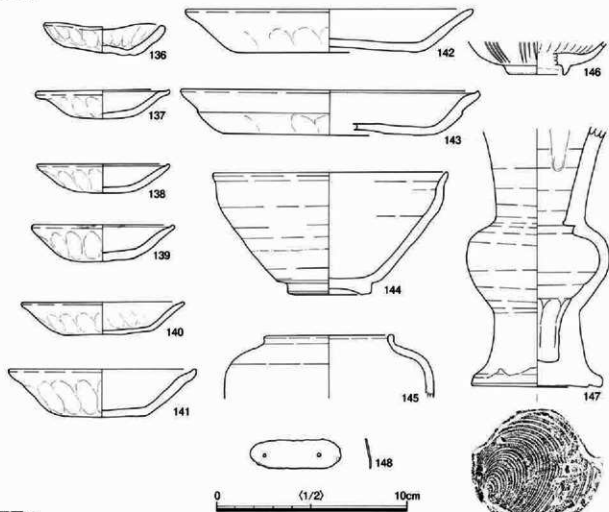
134

135

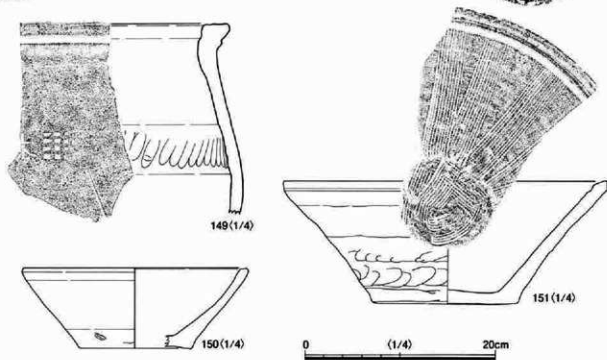
区画51-4 木製品漆皿126 甕127 曲物128 曲物底板129 区画51-5 土師質皿130 越前焼漆鉢131  
区画51-6 越前焼漆鉢132 区画51-9 越前焼壺133 甕134-135

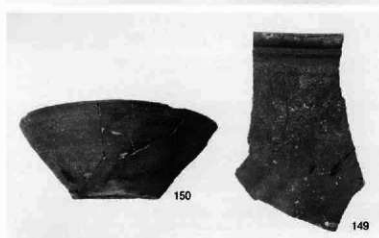
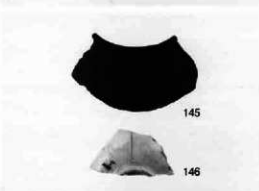
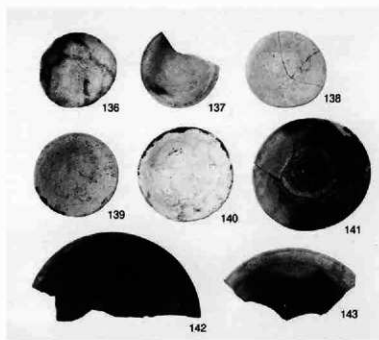
第15図 第51次調査出土遺物 (9)

区画9



区画11





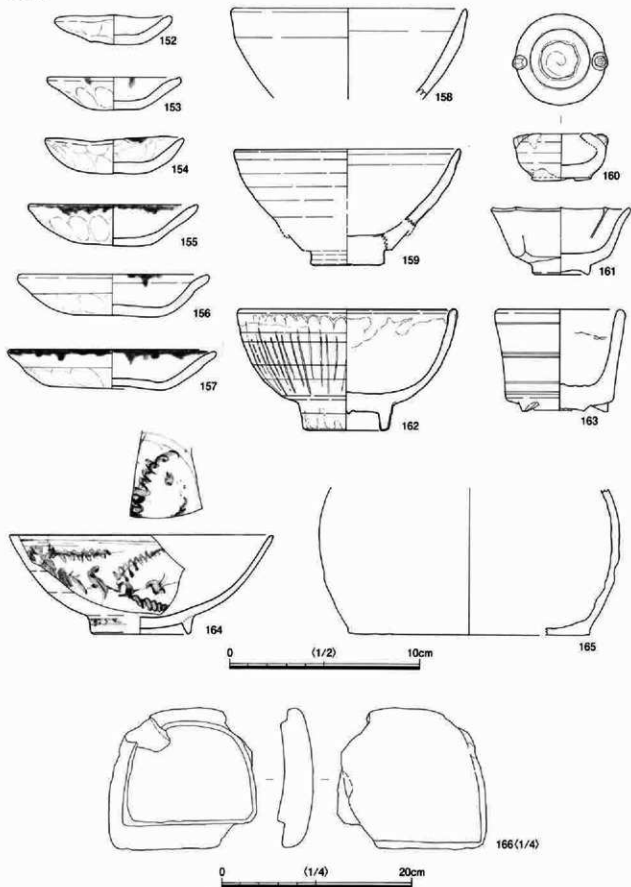
区画51-9 土師質皿136~143 鉄軸碗144 茶入145 白磁皿146 灰釉花散147 金属製品飾金具148

区画51-11 越前焼堿149 鉢150 摺鉢151

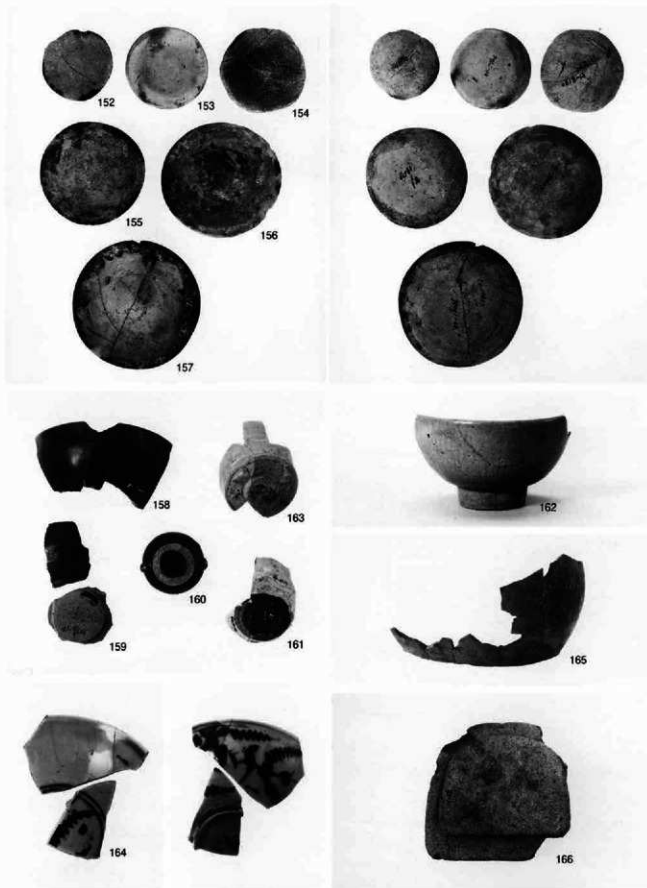


第16図 第51次調査出土遺物 (10)

区画11



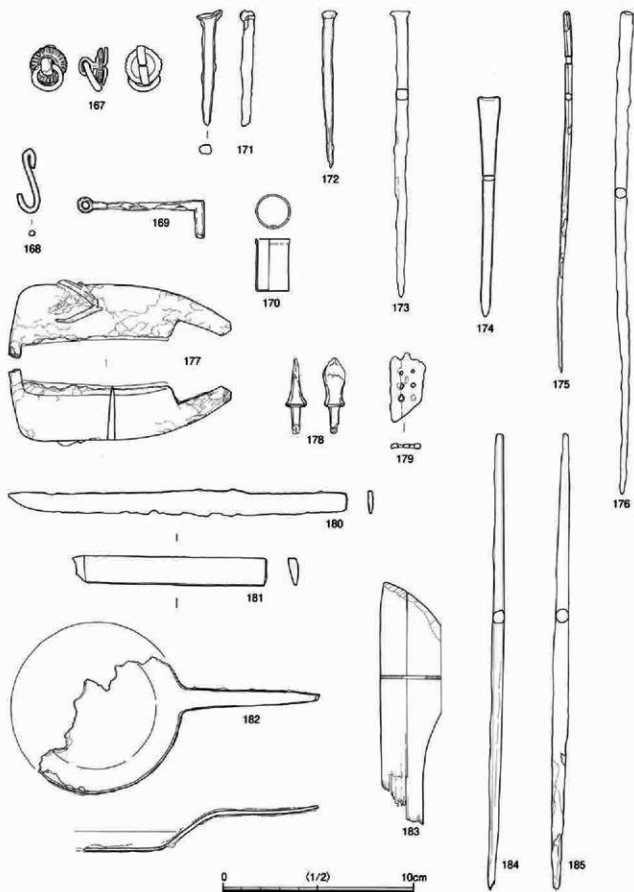
土師質皿152~157 鉄輪碗158 水滴160 中国製黒輪碗159 白磁坏161 青磁碗162 香炉163  
 染付碗164 朝鮮製密165 石製品バンドコ壺166



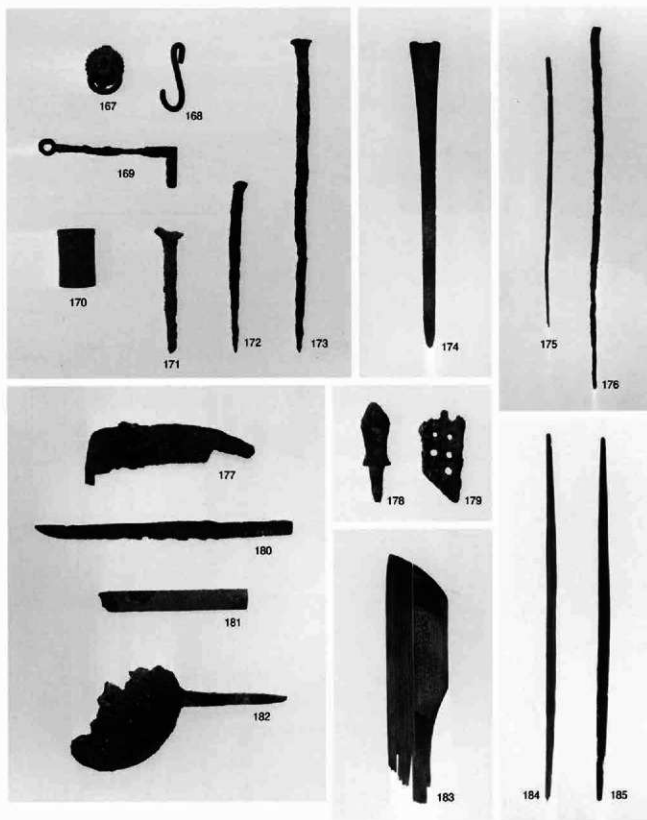
区画51-11 土師質皿152~157 鉄軸碗158 水滸160 中国製黒軸碗159 白磁坏161 青磁碗162 香炉163  
 染付碗164 朝鮮製磁器165 石製品バンドコ蓋166

第17図 第51次調査出土遺物 (11)

区画11



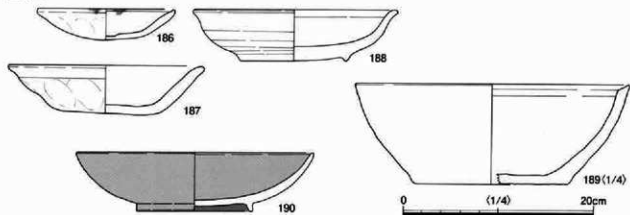
金屬製品環付金具167 金具168 繩止169 不明筒状製品170 釘171~173 針174 火箸175-176  
 鉈177 鏃178 小札179 刀子180 小柄181 火皿182 木製品鉈183 箸184-185



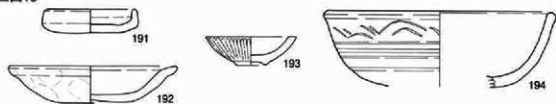
区画51-11 金属製品環付金具167 金具168 縮止169 不明筒状製品170 釘171~173 筭174 火箸175-176  
 鉈177 錐178 小札179 刀子180 小柄181 火皿182 木製品筥183 箸184-185

第18図 第51次調査出土遺物 (12)

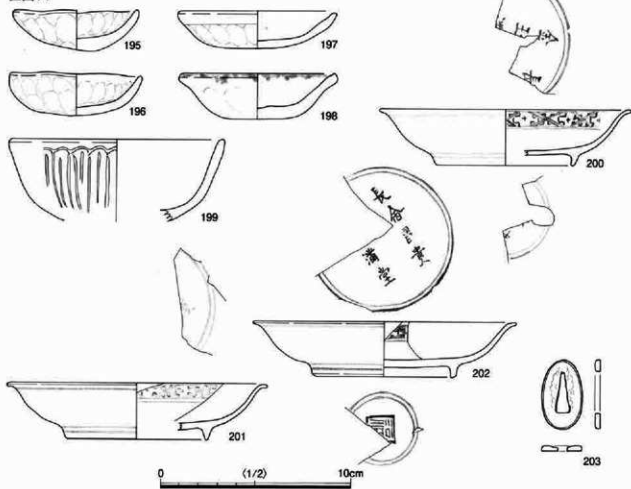
区画12



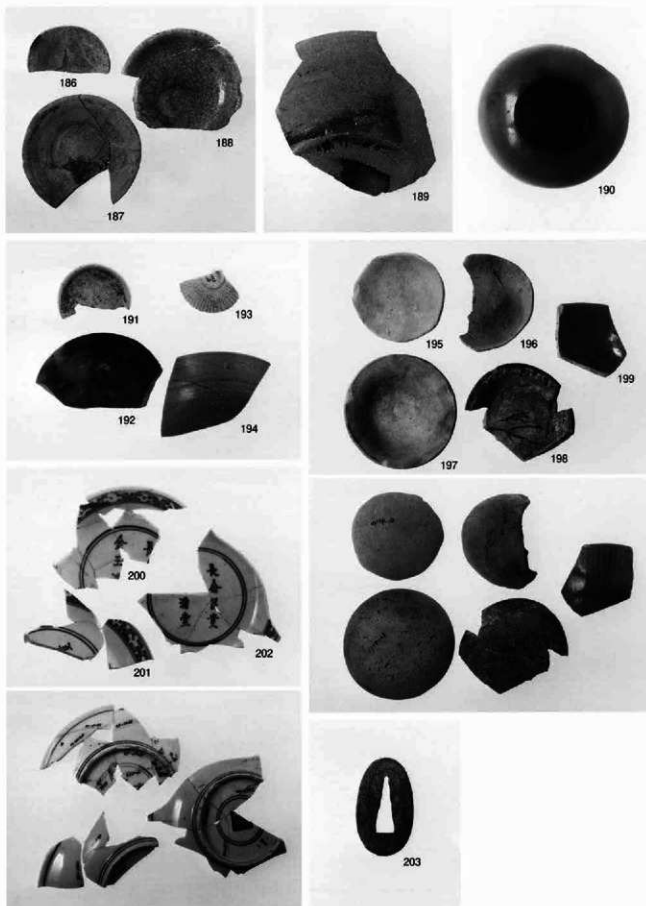
区画13



区画14



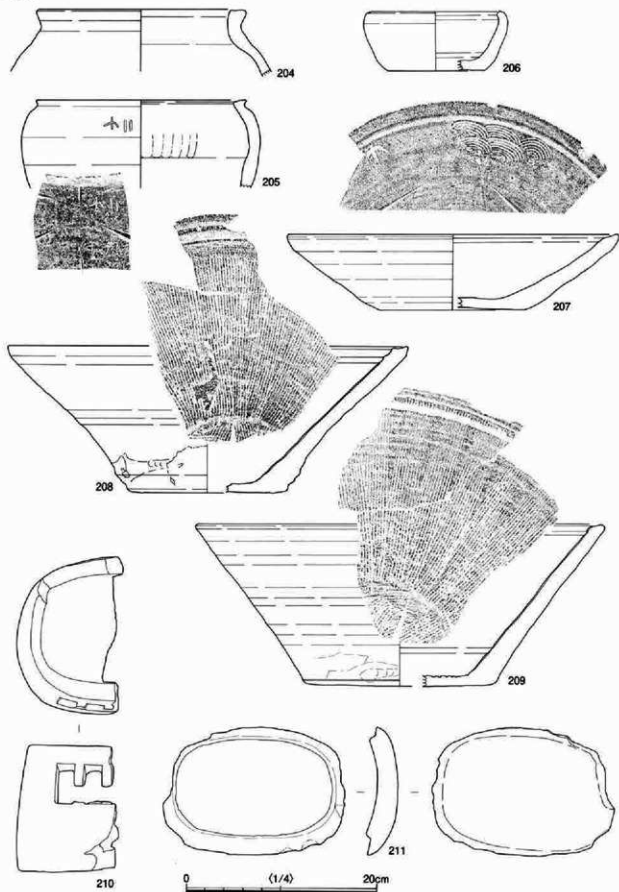
土師質皿186・187・191・192・195～198 灰釉皿188 越前焼鉢189 木製品漆皿190 白磁菊皿193  
青磁碗194・199 茶付皿200～202 金属製品切羽203



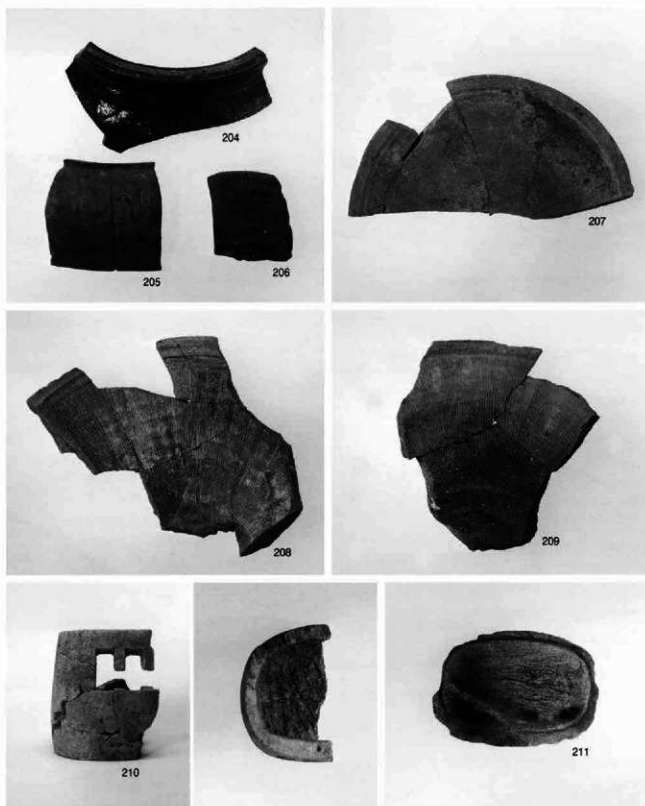
区画51-12 土師質皿186・187 灰釉皿188 越前焼鉢189 木製品漆皿190 区画51-13 土師質皿191・192  
白磁碗皿193 青磁碗194・199 区画51-14 土師質皿195～198 染付皿200～202 金属製品切羽203

第19図 第51次調査出土遺物 (13)

区画14



越前焼204 壺205 鉢206 浅鉢207 楕鉢208・209 石製品バンドコ210・211

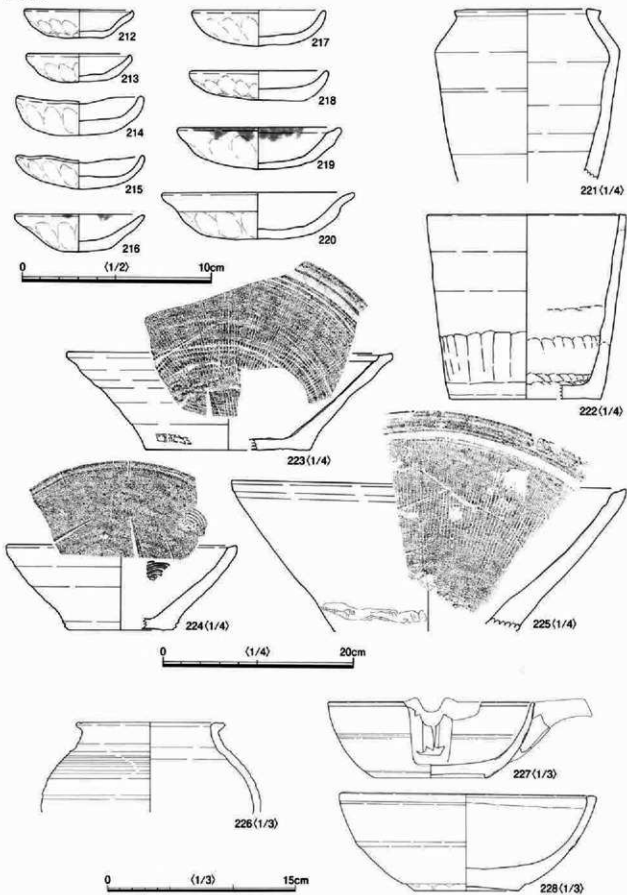


区画51-14 越前焼光204 壺205 鉢206 浅鉢207 楕鉢208・209 石製品バンドロ210・211

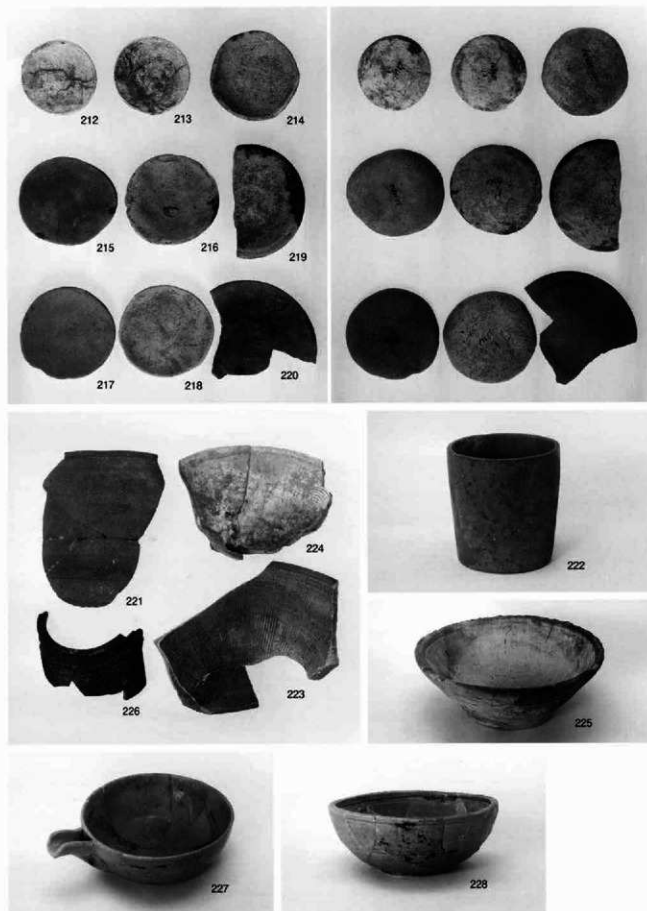


第20図 第51次調査出土遺物 (14)

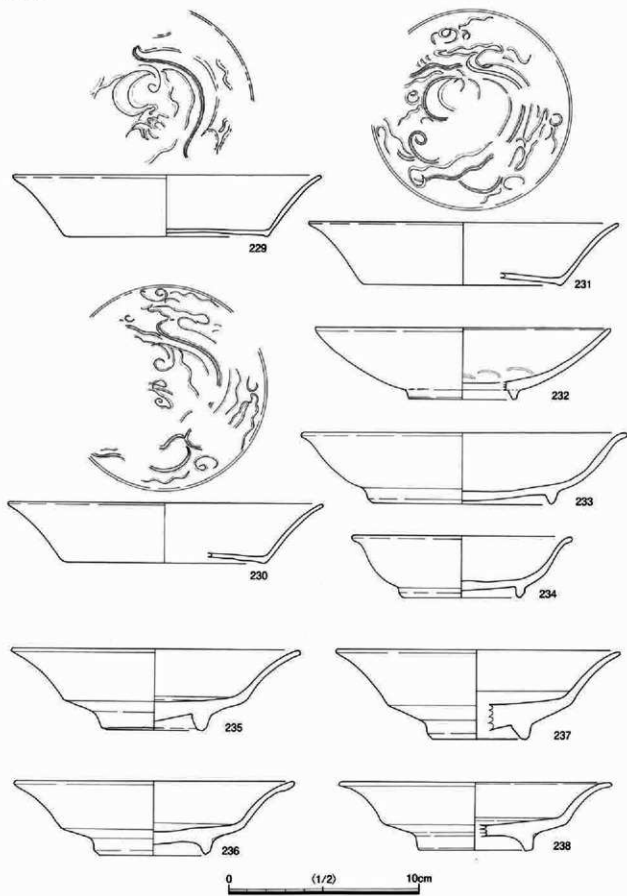
区画15

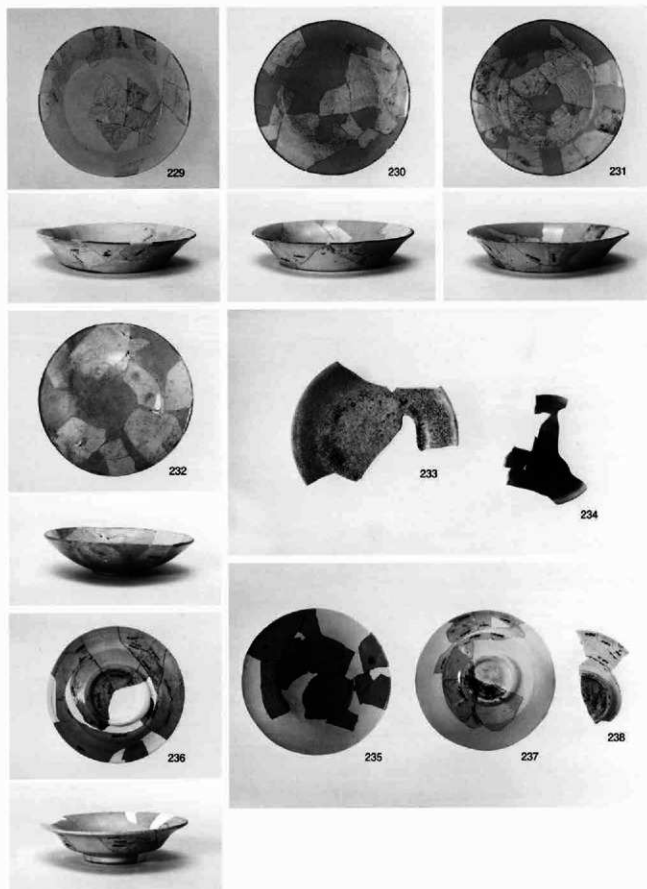


土師質皿212~220 越前焼壺221 火桶222 摺鉢223~225 中国製黒輪壺226 青磁片口鉢227 乳鉢228



区画51-15 土師質皿212~220 越前焼壺221 火桶222 摺鉢223~225 中国製黒輪壺226 青磁片口鉢227 乳鉢228

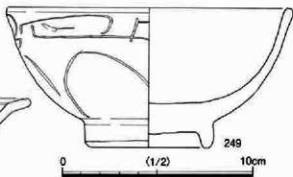
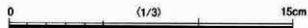
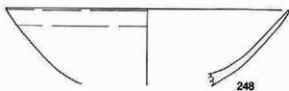
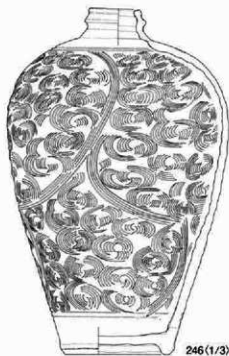
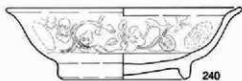




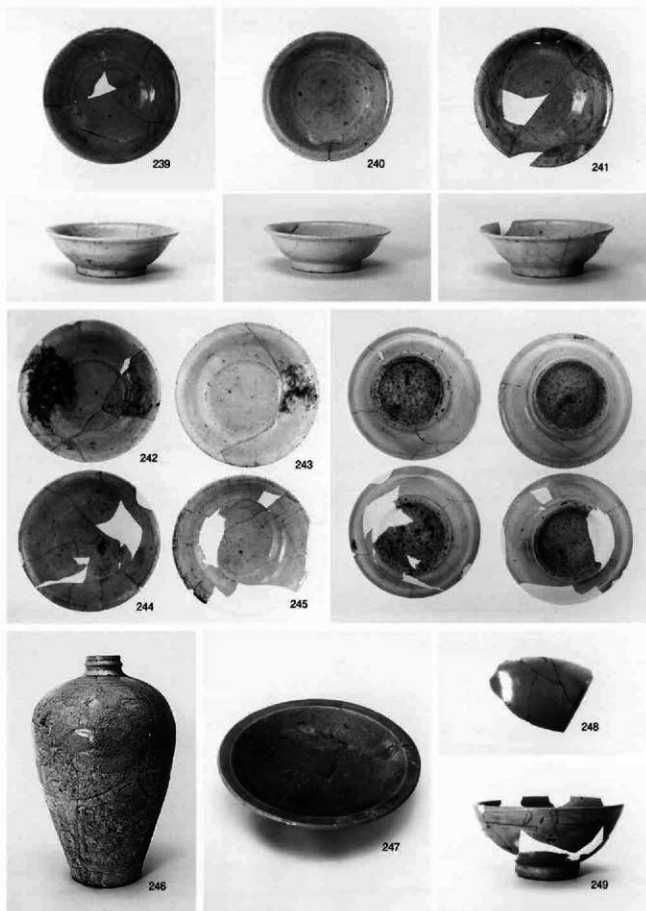
区画51-15 白磁Ⅲ229~238

第22図 第51次調査出土遺物 (16)

区画15

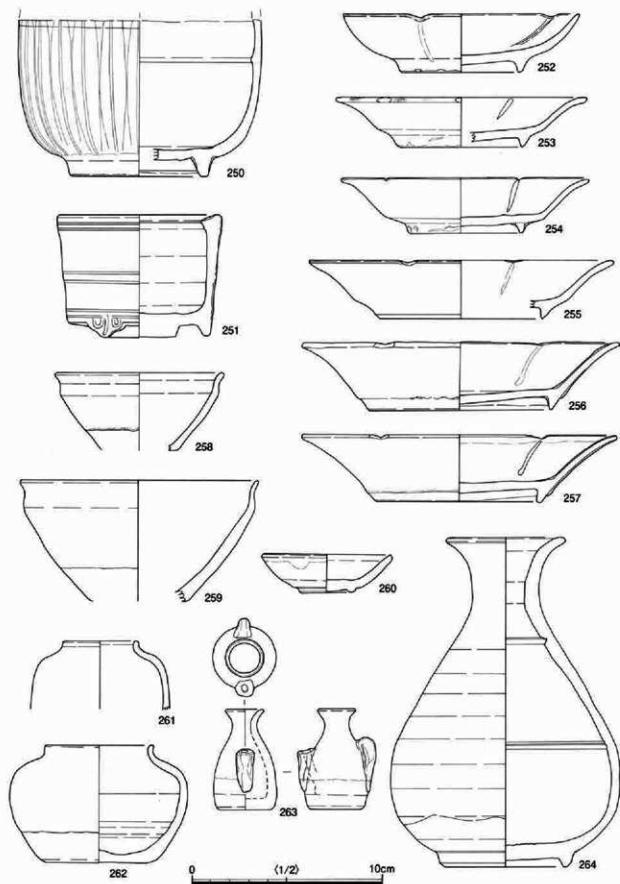


白磁皿239～245 青白磁梅瓶246 青磁盤247 碗248・249

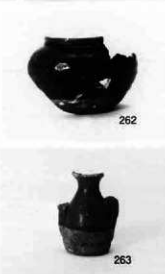
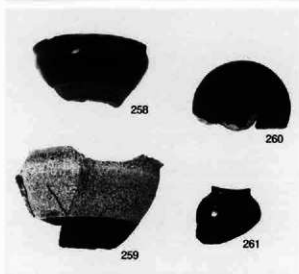
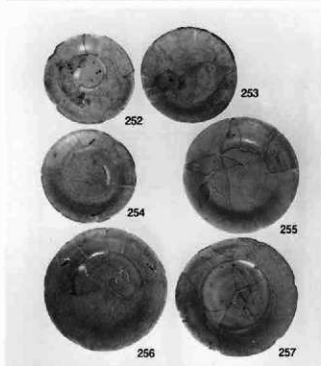
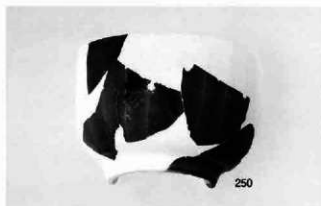


区画51-15 白磁皿239-245 青白磁梅瓶246 青磁盤247 碗248・249

区画15

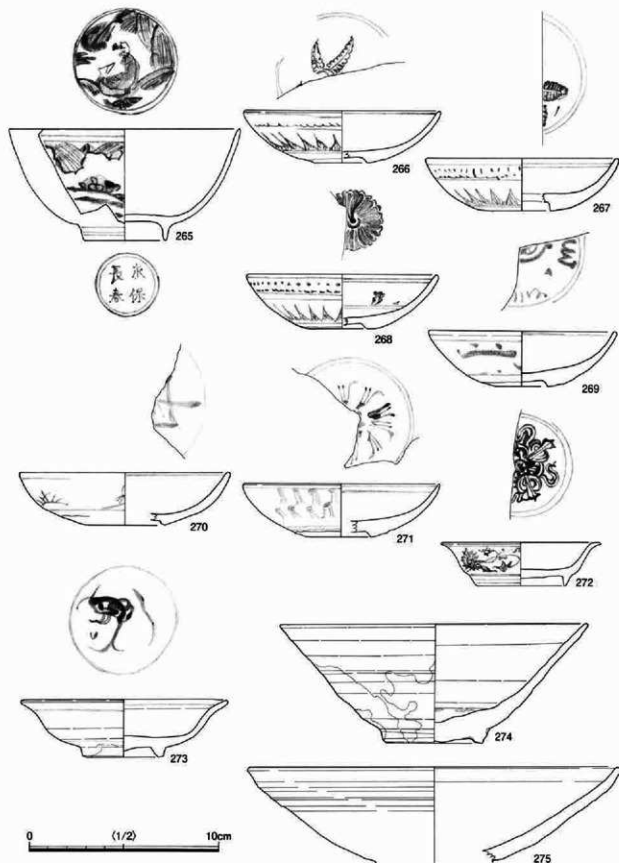


青磁壺250 香炉251 皿252-257 鉄輪陶258 皿260 茶入261-262 水滴263 黄輪陶259  
中国製黒輪壺264



区画51-15 青磁壺250 香炉251 皿252~257 鉄軸碗258 皿260 茶人261-262 水漬263 黄釉碗259  
中国製黒釉壺264



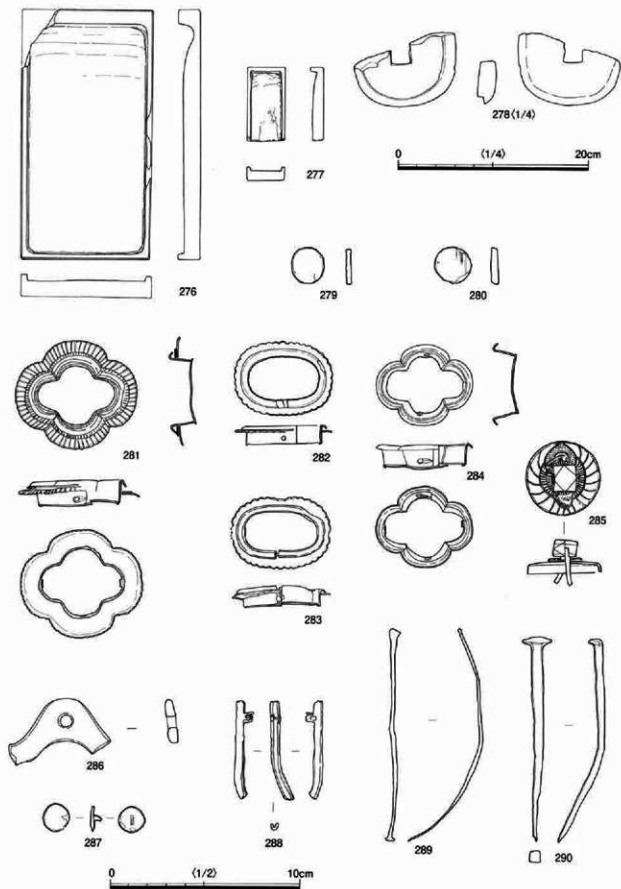




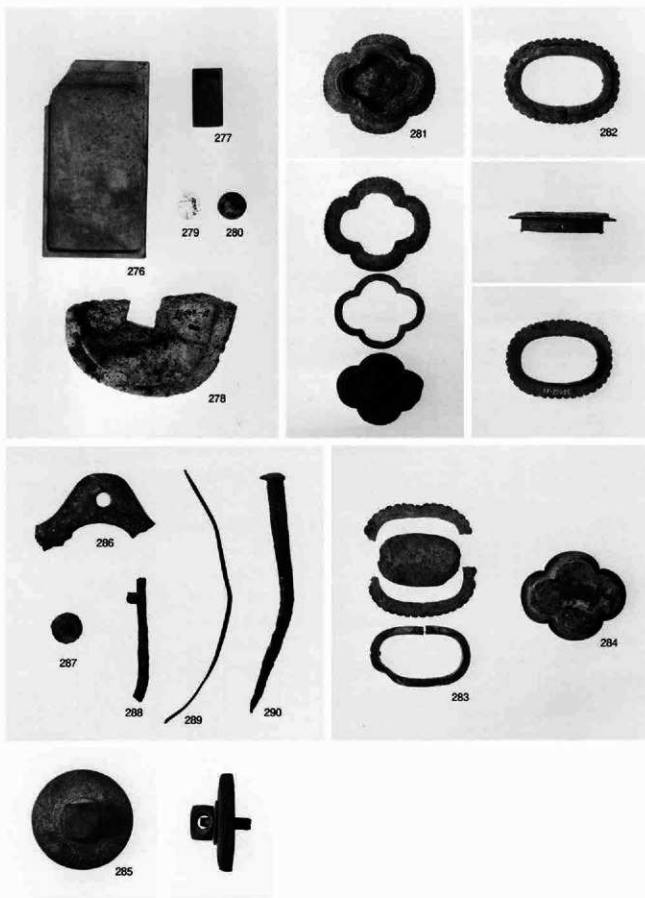
区画51-15 染付碗265 皿266~273 朝鮮製平碗274・275

第25図 第51次調査出土遺物 (19)

区画15

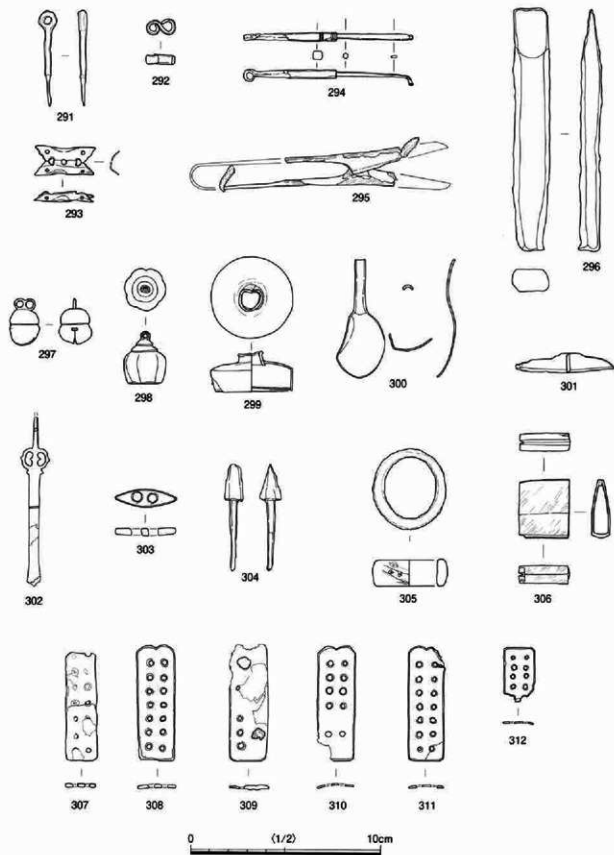


石製品 276-277 バンドコ 278 鹿角製品 陶石 279-280 金属製品 引手金具 281-284 環付金具 285  
金具 286-289 釘 290

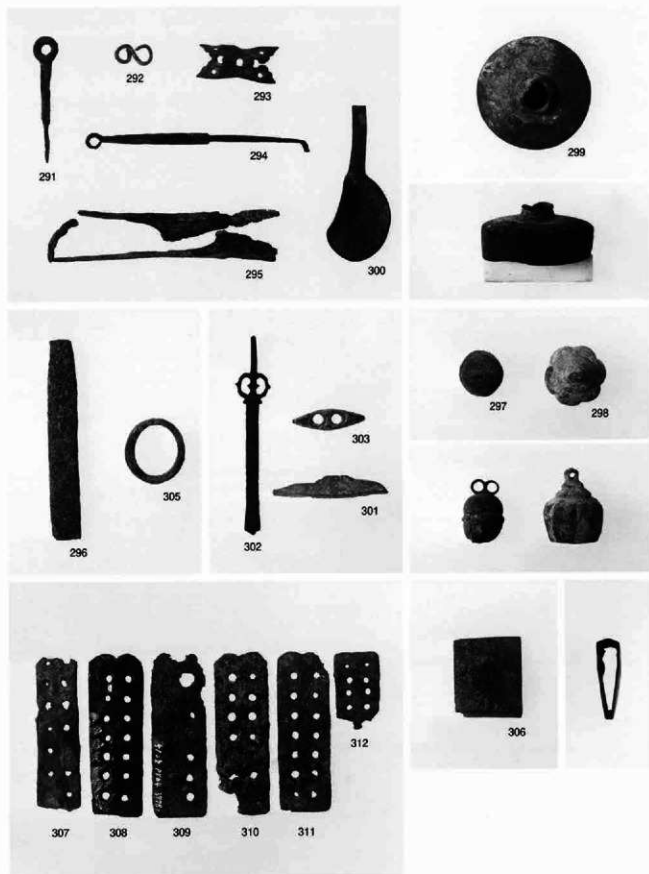


区画51-15 石製品硯276-277 バンドロ278 鹿角製品鈎石279-280 金属製品引手金具281-284  
 環付金具285 金具286-289 釘290

区画15



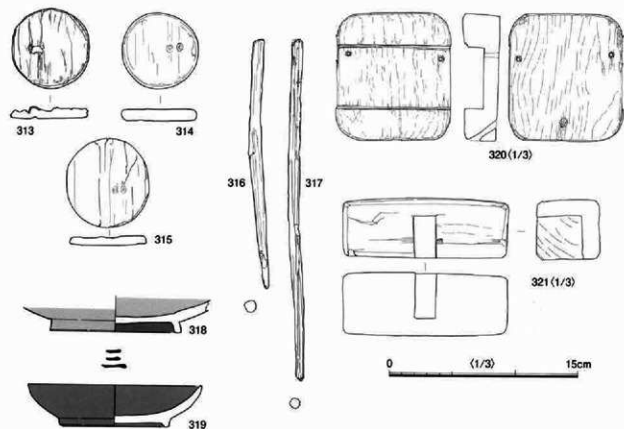
金屬製品金291 真鍮292 飾金具293・302 鍍294 鉄295 タガネ296 鉗297 鍍298 水漬299  
 匙300 不明301 靴303 鍍304 不明鉄製品305 鍍306 小札307~312



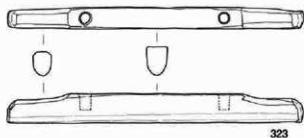
区画51-15 金属製品 鍍金291 鍍金292 飾金具293・302 鍍金294 鉄295 タガネ296 鈴297 錘298 水筒299  
匙300 不明301 棒303 鍍金304 不明鉄製品305 鍍金306 小札307~312

第27図 第51次調査出土遺物 (21)

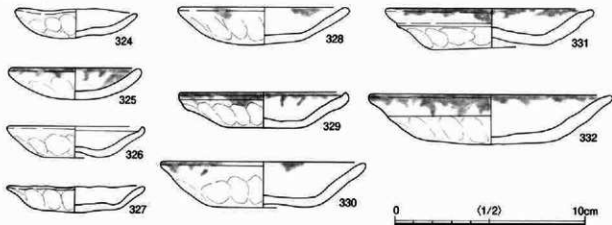
区画15



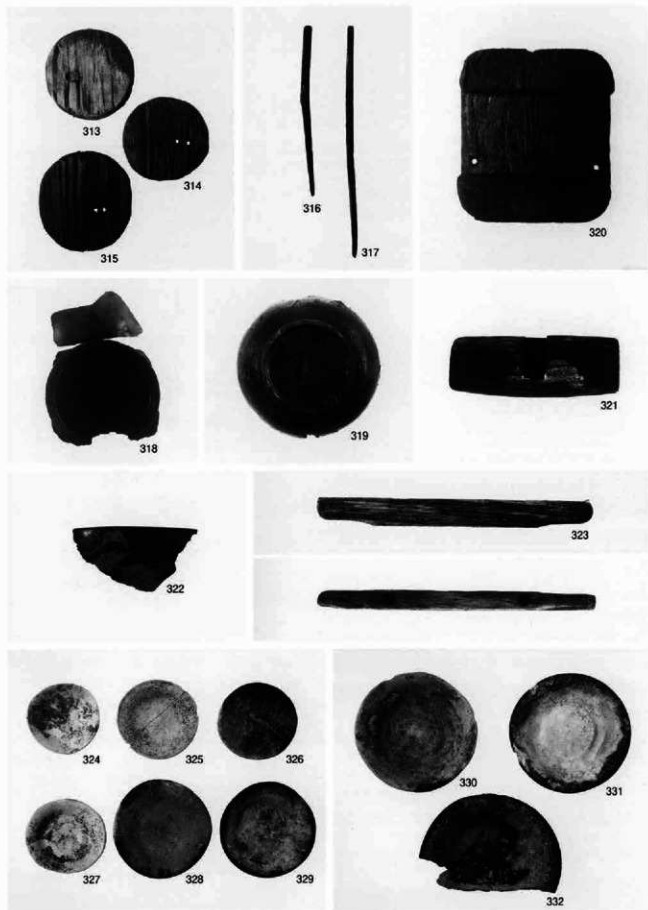
SD2861



SD3031



木製品由物蓋313～315 箸316～317 漆皿318・319 下駄320 加工材321 漆桶322  
糸巻き木杵323 土師質皿324～332

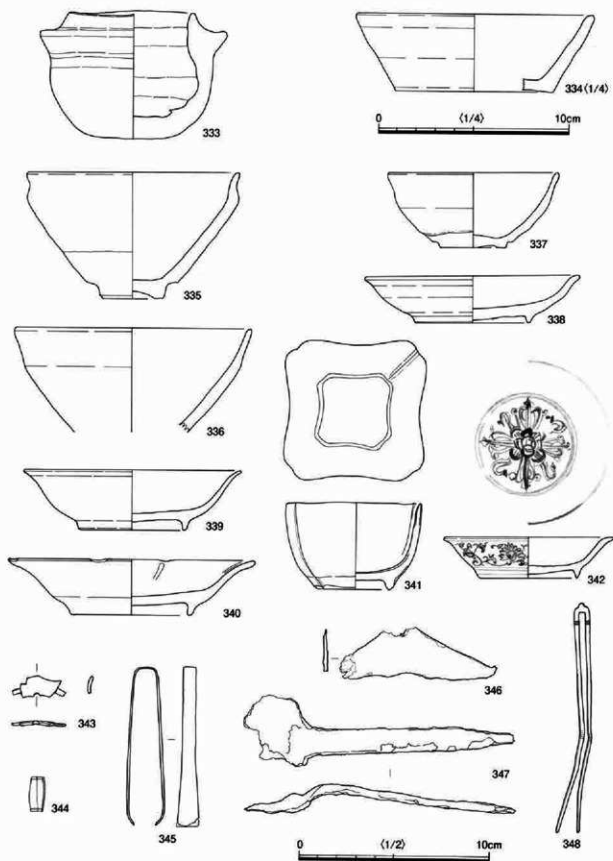


区画51-15 木製品曲物蓋313~315 箸316・317 漆皿318・319 下駄320 加工材321

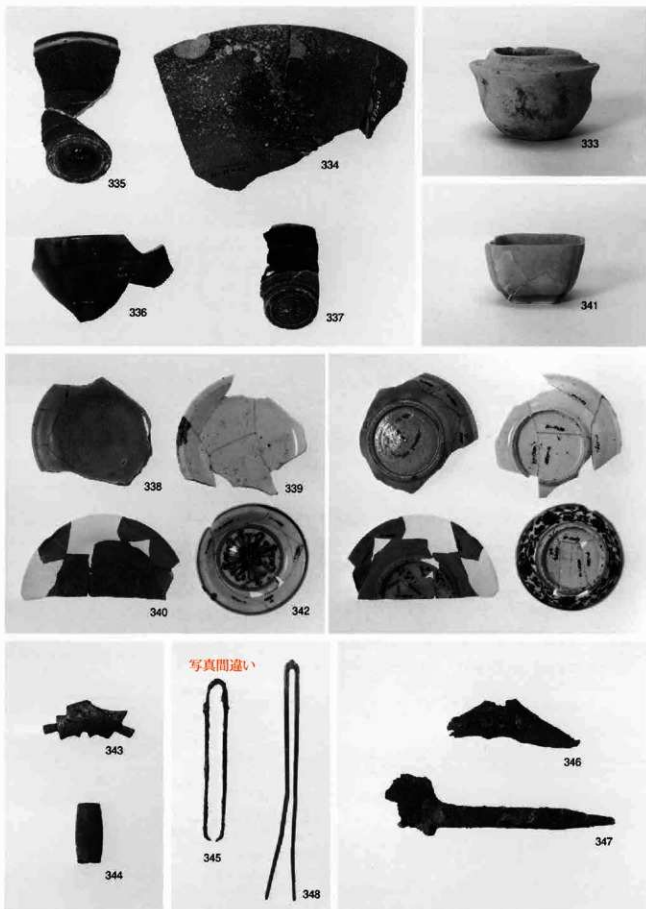
SD2861 木製品漆碗322 糸巻き木杵323 SD3031 土師質皿324~332



SD3031

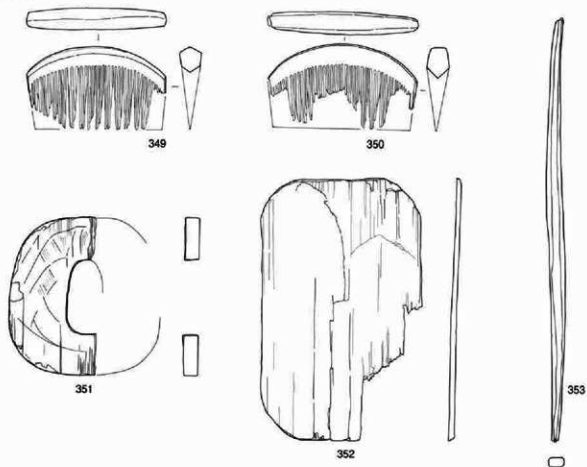


土師質土釜333 越前焼鉢334 鉄輪碗335~337 灰輪皿338 白磁皿339 青磁皿340 坏341  
 染付皿342 金属製品日貫343 円筒状金具344 毛抜き345 火打金346 火皿347 簪348

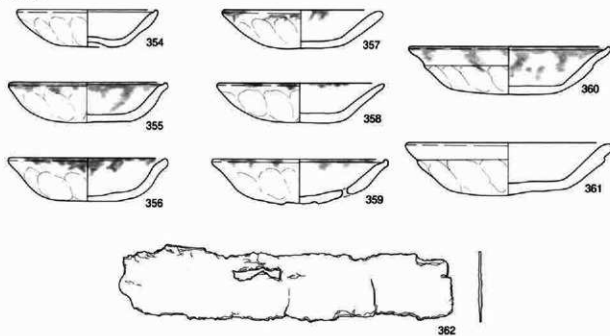


SD3031 土師質土器333 越前焼鉢334 鉄軸腕335~337 灰軸皿338 白磁皿339 青磁皿340 坏341  
 染付皿342 金属製品目貫343 円筒状金具344 毛抜き345 火打金346 火皿347 簪348

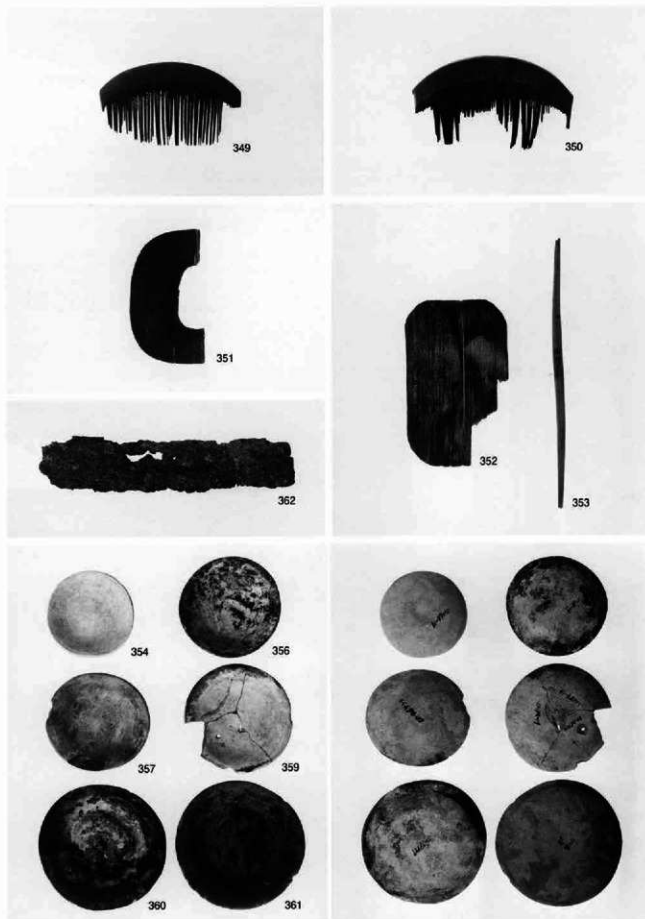
SD3031



SD3032



0 (1/2) 10cm

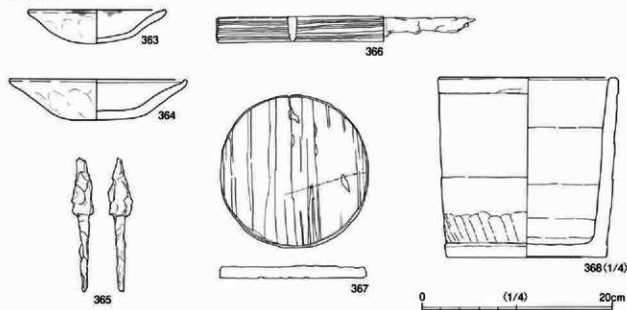


SD3031 木製品 349-350 鈎 351 折敷 352 箸 353

SD3032 土師質 354~361 金屬製品 包丁 362

第30図 第51次調査出土遺物 (24)

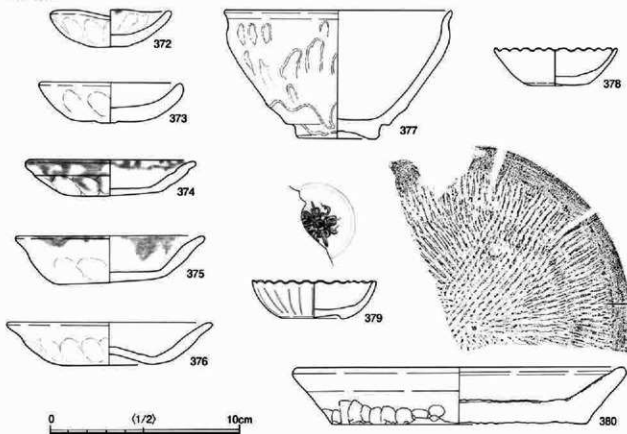
SD3034



SD3035

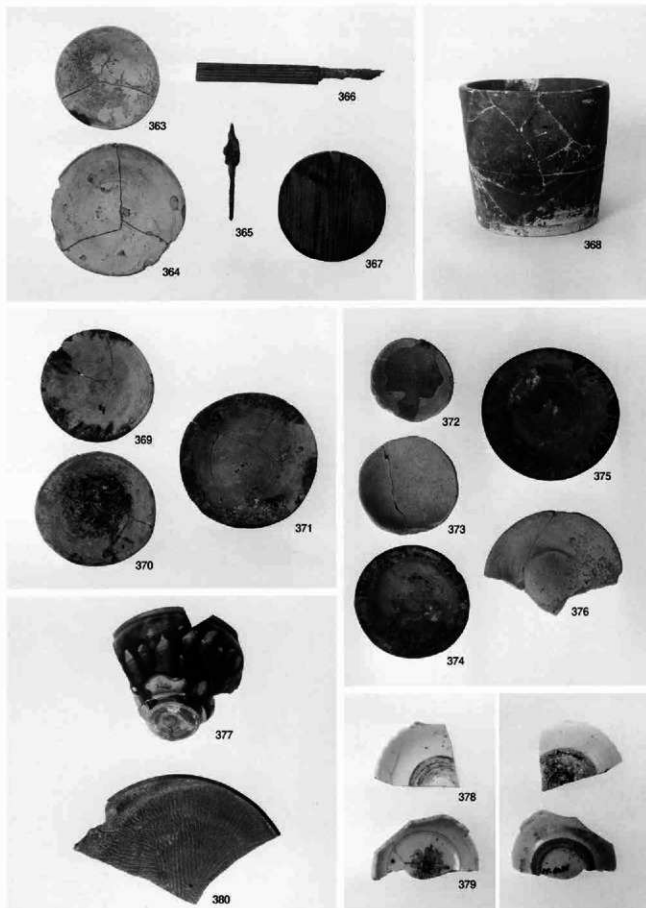


SD3036



土師質皿363・364・369～376 金屬製品皿365 小柄366 木製品曲物底板367

越前焼火桶368 卸皿380 鉄釉碗377 白磁茶皿378 染付茶皿379

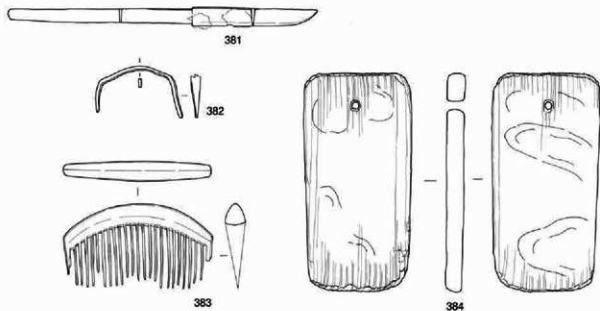


SD3034 土師質皿363・364 金属製品匙365 小柄366 木製品曲物底板367 越前焼火桶368

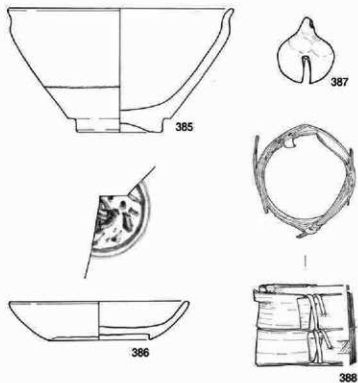
SD3035 土師質皿369～371 SD3036 鉄輪碗377 白磁菊皿378 染付菊皿379 越前焼印皿380

第31圖 第51次調査出土遺物 (25)

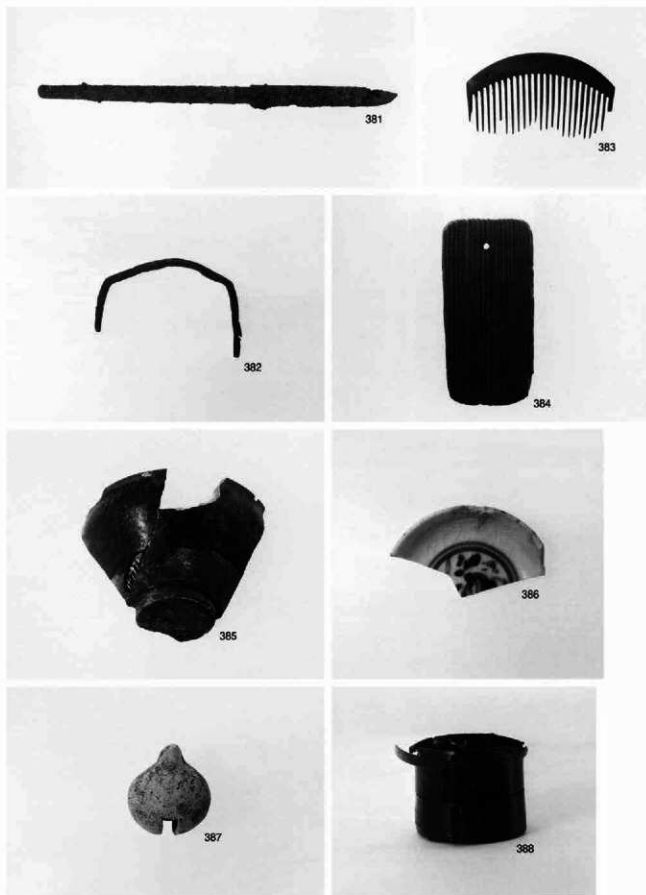
SD3036



SD3037



0 (1/2) 10cm

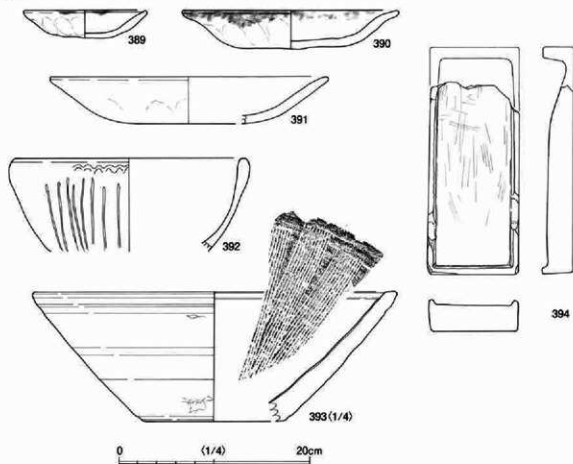


|        |           |        |          |          |
|--------|-----------|--------|----------|----------|
| SD3036 | 金属製品刀子381 | 鏡382   | 木製品櫛383  | 下駄384    |
| SD3037 | 鉄釉碗385    | 漆付皿386 | 土師質土鈴387 | 木製品曲物388 |

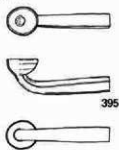


第32図 第51次調査出土遺物 (26)

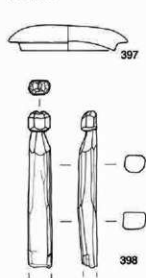
SD3040



SD3042



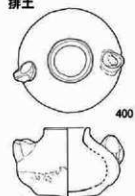
SD3050



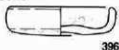
表土



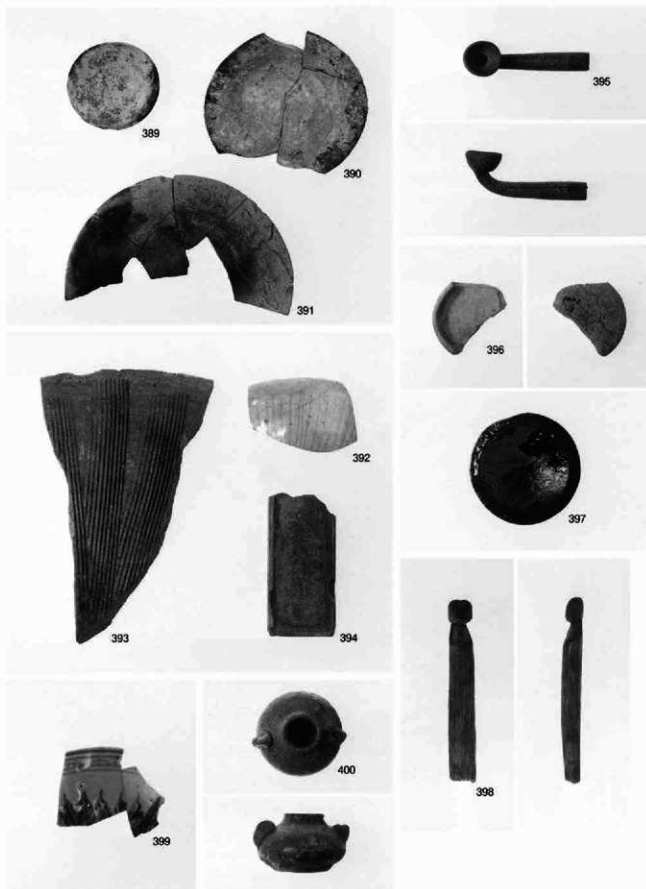
排土



SD3045



0 (1/2) 10cm



SD3040 土師質皿389～391 青磁碗392 越前焼摺鉢393 石製品硯394

SD3042 金屬製品キセル395 SD3045 土師質皿396 SD3050 木製品漆塗り蓋397 陶物398

表土 染付碗399 拵土 灰輪木滴400

### Ⅲ 第 52 次 調 査

### Ⅲ 第52次調査

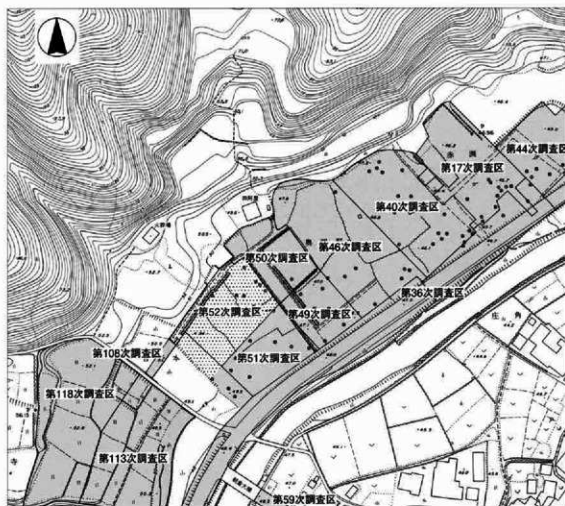
#### 1. 調査の経過と概要

今回報告する第52次調査区は、福井市城戸ノ内町吉野本地係に所在し、第51次調査区の西隣に位置する。

第52次調査地区のある吉野本地係から北へ奥間野地係・赤濁地係にかけては、県道鯖江・美山線改良工事に伴う調査も含めて第17次調査・第40次調査・第42次調査・第44次調査、第46次調査、第49・50次調査と発掘調査を重ね約6,000㎡を発掘してきた。これらの地区は一乗谷川近くを南北方向に幅8mの南北幹線道路がとおり、この幹線道路に面して町屋が軒を連ねる。山裾側はサイゴ一寺跡、法万寺跡など寺院があった。その中間は中級の武家屋敷が存在する地区である。

今回の第51次・52次調査は、大規模な武家屋敷が並ぶ平井地区とは異なる吉野本～赤濁地係の町割りやその構成を明らかにすることを旨とした第4次5カ年計画の調査の第4年次にあたる。

第52次調査は第51次調査に引き続き、昭和60年8月4日から開始した。11月7日には第51次調査地区

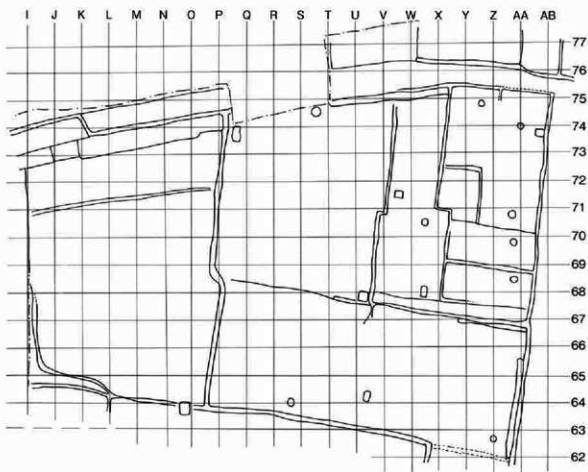


挿図7 第52次調査区周辺地形図 (1/2,000)

と合せてヘリコプターによる写真測量を行い、12月6日までに補足調査も終了した。

今回報告する第52次調査区は、51次調査区と接する所は発掘調査で見つかった屋敷によって分けたので、実際の調査地区と少し異なる。すなわちいわゆる「医者の家」は第52次調査でも発掘したが第51次調査報告で扱い、反対に南側の52-8は第51次調査でも発掘したが第52次調査分として報告する。

第52次調査は、東西方向の幹線道路SS2001に面して面積45m<sup>2</sup>ほどの小区画の家が4軒並ぶ。これらの家々はそれぞれ井戸を持つ。しかしながら、これまで便所として考えられてきた石積遺構はない。東西道路に直角に交わる南北方向の道路SS2952に面しては区画52-7(面積400m<sup>2</sup>)と区画52-8(700m<sup>2</sup>)程の屋敷が2軒ある。このうち区画52-8は「医師の家」よりやや幅の広い土塀基礎を持ち、土塀には薬医門をもつところから武家屋敷を想定している。ただ今回の屋敷では主屋のほか主要な建物跡が削平されていたため屋敷内部の構成については詳らかにならなかった。



挿図8 第52次調査区グリッド設定図

## 第52次調査日誌抄

昭和60年(1985)8月5日～12月6日

- |  |  |
|--|--|
| <p>8. 5 地区杭の設定</p> <p>6 調査区の東北から遺構検出を開始。礎石建物SB3210を検出。</p> <p>7 第51次調査区から続く溝SD3035を西に向かって掘り進める。その南は遺構らしき石やピットなし。</p> <p>8 51-1・2付近を調査。区画の溝を検出。</p> <p>10 天候を見て、西側の土塀基礎付近の耕土や盛り土を取る。</p> <p>12 道路SS2952の上は西側の石垣が崩れた石で埋まっている。</p> <p>14 13・14日の2日間でSS2952の北半分の崩れた石をほぼ除去する。</p> <p>15 土塀基礎SA3185から東に向かって、再度遺構検出にかかる。SE3190、SD3174を検出。</p> <p>19 礎石建物SB3198、溝SD3173等を検出。</p> <p>20 溝SD3174を東に掘り進める。石段SV2962を検出。</p> <p>22 70～68ライン付近を調査。溝SD3171、石積遺構SF3195等を検出。</p> <p>第52次調査区の屋敷の区画がほぼ明らかとなった。</p> <p>24 区画52-6と区画52-1・2の遺構面を探す。</p> <p>25 SF3195、SD3176、SD3175を掘る。</p> <p>27 第51次調査区SB3059の上を覆う茶褐色土を除去し、礎石を検出。SB3059西側の焼土をとる。</p> <p>28 第51次調査区SB3201を検出。</p> <p>29 区画52-8の東半分を調査。しっかりとした整地面は認められたが、遺構は無し。</p> | <p>9. 2 SS2952北半分の道路面(砂利敷)を検出。石垣が崩れて作業困難。</p> <p>4 SS2952上の盛り土は、上下2層に分かれ、上層からは江戸後期の伊万里出土。</p> <p>6 西側の上の屋敷に登る坂道を検出。</p> <p>10 SA3184の南半分を調査。区画52-8の門を検出。</p> <p>14 道路SS2952の側溝SD3180を検出。この頃から長雨に悩まされる。</p> <p>10. 2 門SI3189付近の遺構精査。午後から52-8、52-7の下層調査に入る。52-7東南部で銅銭埋設遺構検出。</p> <p>4 区画52-7の東北隅にある石積み施設SF3196は、南北溝SD2862を埋めてから造っていることが判明。</p> <p>7 門SI3189から北側のSS2952の道路面を検出作業にかかる。</p> <p>11 道路SS2952の道路面をほぼ検出。</p> <p>14 道路SS2952の側溝を検出。</p> <p>16 道路SS2952上の石の排除にかかると。</p> <p>28 写真撮影のため遺構清掃。</p> <p>30 写真撮影。</p> <p>11. 7 第51次調査区も合わせて、ヘリコプターによる写真測量を実施。</p> <p>12 補足調査。</p> <p>18 補足調査遺構の実測</p> <p>27 レベル等の測量。</p> <p>12. 6 発掘機材等を撤収し調査終了。</p> |
|--|--|

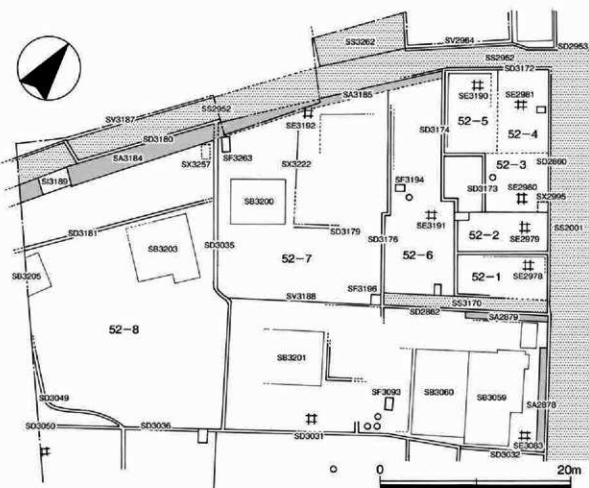
## 2. 遺構 (第33図～38図、PL41～PL50)

第52次調査区は、第51次調査区の西側に位置する。区画51-15「医師の家」の西半分は第52次調査で発掘したが、第51次調査区として報告したので、ここでは触れない。第52次調査区は東西道路SS2001に面する小区画屋敷52-1～5からなる第1区画群と南北道路SS2952に面する中規模屋敷からなる第2区画群の2つに分けられる。第1区画群は52-1～5までの5区画である。51-1～51-4まではSS2001に開口を開いているが、52-5はSS2952に開口を開く。これらはいずれも開口4mから7m、奥行き7m～11m、面積は36㎡～77㎡の小区画群である。第2区画群は52-6～52-8の3区画で、52-6は小区画が2つ合わさったとも推定される。52-7と52-8は道路に面した所だけ土壁を有する中規模屋敷である。

最初に52次調査区を取り巻く道路や、屋敷地を区画する溝について記述した後、52-1から区画ごとに述べる。

### 町割りに関する遺構

SS2952 東西幹線道路SS2001と直交する南北方向の道路で、幅は場所によって多少異なるが、広い所で3.3m、狭い所で2mある。東西道路SS2001の交差点から南に約15mはSS2001と直交している



挿図9 第52次調査区略図

が、それ以南は15°程東に傾いている。道路表面は、全面に砂利が叩き締められて舗装されている。SS2952の西は2m近く高くなっており、巨石を積んだ石垣となっている。またSS2001との交差点から15m南には山側の屋敷に登っていく道SS3262が交わる。SS3262の幅は約9mある。この付近から北へは道路SS2952の両側に側溝が存在するが、南へは道路東側はSD3035まで、道路西側は門SI3189の向かい付近まで側溝がない。

道路側溝SD3180は道路西側を北に流れて、区画52-8の門SI3189の付近で斜めに道路を横切って道路東側を流れ、暗渠SZ3264の所で東に屈折してSD3035となる。この道路面SS2952を覆う盛土には伊万里や唐津が含まれ、江戸時代初めごろまでには埋められたと考えられる。

**SV2964、SV3187** 南北方向の道路SS2952の西側に並ぶ巨石を積み上げた石垣である。石は1m×0.7m×0.5mを超える石も使用されている。西側の屋敷と道路SS2952との比高差は約2mあり、場所によってはこうした巨石が2段に積み上げられている。発掘調査時には、道路に多数の巨石が崩れ落ちていた。

**SS3262** 調査地区北西隅近くに位置し、南北道路SS2952に繋がる道路である。発掘した長さは3mであるが、道路幅は9mある。道路SS2952の境に石段SX3261がある。SS3262は通常の道路ではなく西側の屋敷(古絵図に描かれている法萬寺)に繋がる道路であろう。この通路の両側にも巨石が積まれている。

**SS3170** 石組溝SD2862の西に位置する袋小路で、幅1m、長さ17.5mある。溝SD2860を挟んで東西道路SS2001に繋がる。この通路の西には区画52-1と区画52-6があり、奥には区画52-7があって行き止まりとなっている。区画52-1との境界は明瞭ではなかった。

**SD2862** 第51次調査地区の区画51-15の西側を北流する溝で、東西方向の溝SD2860に繋がる。幅は0.4m、深さ0.5mほどある。東西方向の溝SD3176を合流させている。なお、その合流地点の南にある石積遺構SF3096は、この溝を壊して作っている。したがって、石積遺構SF3196より南は、SF3196をつくった時点で埋められていたのであろう。また、東西方向のSD2860との合流地点に近いところは、下層溝が区画51-15の土層基礎SA2879の下にもぐって行く。

#### 区画52-1

東西方向の幹線道路SS2001に面する路地SS3170の西に位置する小区画屋敷である。規模は地口13.5m×奥行10m、面積35㎡を測る。西は溝SD3171、南は溝SD3175で区画される。敷地は道路SS2001より0.4mほど高く、南の屋敷地52-6より0.3mほど低い。屋敷地の東南隅に溝SD2860に笏谷石SX2993によって蓋がされている。蓋石の大きさは長さ0.8m×幅0.45m×厚さ0.15mである。蓋石から入ったところには、6石からなる石敷となっていることから、この笏谷石の蓋石のところから52-1の屋敷の入口だったと考えられる。

**SB2968** 表面が削平されているため建物規模ははっきりしないが、SS2001に面して礎石が3石、2間半分残っているの、地口いっぱい建っていたと推定される。西側も溝SD3171の溝石を兼ねるように礎石が3間分残っていた。屋敷地の奥にも礎石が東側に4石、南側に2石確認できる。

**SE2978** 屋敷地の北西隅寄りにある井戸である。井戸の上端はかなり壊れているが、井戸の南側には扁平な笏谷石を4石敷いてあり、すぐそばに礎石があることからこの井戸は建物SB2968内にあったことになる。この区画は井戸を有するが、これまでの調査で便所と推定してきた石積遺構は存在しない。



## 区画52-2

同じく道路SS2001に面し、区画52-1の西隣に位置する小区画屋敷である。規模は地口4.5m×奥行10m、面積45㎡を測る。東は溝SD3171によって52-1と区画され、南はSD3175によって52-6と区画される。西は石垣SV2962で52-3と区画され、52-3が0.3m高い。建物については、表面が削平され礎石が残っていないため不明である。

SE2979 屋敷地の北西寄りに位置する石組の井戸である。直径は0.7m、深さは安全を考慮して底まで掘り下げていないので不明。井戸の北側が砂利敷状になっている。

SF3193 屋敷の南西隅に位置し、規模は縦1.6m×横1.0m×深さ0.5mである。西側から流れてくる溝SD3174が、この石積施設SF3193に直接流れ込む形になっているところから、便所ではなく一時的に水を溜める施設と考えられる。

## 区画52-3

道路SS2001に面する屋敷で、東は石垣SV2692、南はS溝D3174で区画される。西隣との境界ははっきりしないが、溝SD3173とその南北方向の延長線上と推定される。地口は約6m、奥行きは11m、面積は、南西隅で溝SD3174が敷地に入り込んでいるため約65㎡である。敷地は溝SD3173で南北に2分される。

建物については、東西方向大通りSS2001の側溝SD2860の溝石に礎石と思われる石が3石2間分認められるが、他に対応する礎石がないので建物規模は不明である。溝SD3173以南については、SD3173の南北方向の溝石に3石2間分の礎石らしき石が認められることから、4m四方の狭い空間にすぎないが、2間四方の礎石建物が建っていた可能性がある。なお区画53-3も、便所と推定される石組遺構は認められない。

SE2980 敷地北西部に位置する自然石の石組井戸である。直径は0.8m、深さは底まで掘り下げていないので不明。井戸の北側と西側には扁平な石が敷かれており、この平らな石が天端石で、この上に井戸枠が載っていたと推定される。

SX2995 北東隅に位置する石積施設である。規模は縦0.8m×横0.8m×深さ0.5mである。北面の石は溝SD2860の側石を兼ねるような形になっている。石積施設SX2995は、位置からして便所とは思えない。

他に溝SD3173に接するように越前焼大甕SX3212が設置されている。

## 区画52-4

東西方向の道路SS2001と南北方向の道路SS2952が交わる南東に位置する屋敷で、規模は東西約9m×南北約5.5m、面積約49.5㎡である。したがって、この屋敷地は東西方向に長く、井戸や水回りの遺構が道路SS2001側にあることから、入口も道路SS2952側だった可能性が高い。

SB3206 道路SS2952に面する南北方向5mの礎石建物である。西端の礎石は、溝SD3172の溝石を兼ね、北側の礎石列も溝SD2860の天端石を兼ねている。東端はSX3211付近と推定され、敷地いっぱいには建っていたようである。

SE2981 屋敷地のほぼ中央に位置する直径0.6m程の石組の井戸である。井戸の南側に平らな天端石が残存している。井戸の西側から北方向に溝SD2860まで中央を揃えた2列の石列SX2996があり、その東には石敷1m×0.5mの範囲で石敷がある。

SF2985 区画の北端、溝SD2860に接しており、大きさは縦0.8m×横0.8m×深さ0.6mである。この石

積施設も位置と石敷SX2996の存在から便所とは考えられず、井戸や石積施設、石敷など一連の遺構から、この付近が台所的な空間だったと推定される。

#### 区画52-5

この区画もSS2952に面する地口5.5m×奥行9m、面積約49.5mの小規模屋敷である。南は溝SD3174、東は溝SD3173によって区画される。北端は、52-4との間がはっきりしないが、SB3206の南列付近であろうとされる。建物は2棟ある。

**SB3197** 道路SS2952に面する礎石建物である。礎石が不明なところもあるが、東西方向は溝SD3172から石列SX3208までの4m、南北方向は地口いっぱいの5mと推定される。建物内には井戸SE3190がある。この井戸から東側は焼土が広がっていた。

**SB3198** SB3197の東側に隣接する礎石建物である。この建物は小規模ながら礎石が比較的良好に残っており、東西3.4m×南北3.4mである。この建物内の北西隅には南北1.1m×南北1.4m×深さ0.5mの土塼SX3210がある。

**SE3190** 礎石建物SB3197の内部にあり、直径0.5m程の石組井戸である。この井戸も東側に平らな大きい石が見られるところから天端まで残っていたのであろう。

52-3～52-5までの区画は、その境界が明瞭ではなくひとつの屋敷とも捉えることができるが、井戸が3本見つかったところから、3区画に分けるのが自然と考えた。ただ、これら3区画からも便所と考えられる石積施設は存在しなかった。

#### 区画52-6

先述した52-1～5までの屋敷との南側に位置する屋敷で、北は溝SD3174で、南はSD3176で区画される。東側は通路SS3170に面し、西側は道路SS2952に面する。屋敷の規模は、東西方向は約22m、南北方向は西端で6m、東端で7.5mある。これはこの屋敷の南北を区画する溝SD3174とSD3176の2本の溝が、この屋敷からみると外に屈折しているためである。溝SD3175の52-2との境界付近では木炭や灰を含む泥で埋まっていた。

この区画は両溝の屈折部分で2つの屋敷に分けられる可能性がある。この区画を2つの屋敷地と捉えると、西側は屋敷と道路の間に土塼SA3185があり、入口らしき所は確認できない。東側の入口については通路SS3170に接して石積遺構SF3195が存在するので、その西の石敷SX3215付近、もしくはさらに西の溝SD3176とSX3216の間を想定することができる。

**SD3174** 区画52-6の北側の境界溝である。幅は約0.3m、深さは0.3mある。道路SS2952から13.5m東に流れ、一度2m北に直角に屈折した後、また屈折して10m東に流れる。道路SS3170に達して、北に流れを変えるが、そこから溝がはっきりしなくなる。

**SD3176** 区画52-7との境界となる溝である。幅は約0.3m、深さは0.3mある。土塼基礎SA3185から12m東に流れ、溝幅分南に屈折してまた東に流れ、溝SD2862に合流する。

**SB3221** 敷地の西寄りに位置する礎石建物である。おそらく東西に長い建物で東行方向は4mと推定されるが西行方向は不明。

**SE3191** 屋敷地内中央部の屋敷地が広がったところに位置する石組の井戸である。直径約1.2mで天端石もよく残っている。この井戸付近は焼土が薄く広がっていた。もし、区画52-6を2つの屋敷と想定

すると井戸はこのSE3191しかなく、共同井戸となる。

**SF3194** 屋敷中央部の南側に位置する。SF3194は石がほとんど抜かれており、東側の圓石が残るだけである。規模は東西0.6m×南北1.0m×深さ0.6mほどである。

**SF3195** 区画の東端道SS3170に接するようにある。SF3195は南側の人頭大の天端石4石並んで残っている。このSF3195の内部は、下層に灰を多く含む黒い泥で埋まっていた。

敷地東端近くに規模1m四方、深さ0.2mの浅い土壌SX3216がある。内部は焼土で埋まっていた。この周辺には石敷SX3218の他、上面が平らな石が見られるが、まとまって遺構を形成しない。また、屋敷地の北東隅は、後世に水田化するときに削られて一段低くなっている。

## 区画52-7

南北方向の道路SS2952に接する屋敷である。北は溝SD3176、東は石垣SV3188、南は溝SD3035で区画される。屋敷地の規模は、南北約15.5m×東西約20mである。西は土塀基礎SA3185がある。ただこの土塀基礎の南半分については、中央付近に井戸SE3192が土塀石垣に食い込むようになっていて、この部分の石垣は、後世に積まれたような跡があったことから、存在しなかった可能性がある。というのはこの間に門に類する入口がないとこの屋敷に入ることができないからである。しかし、このSE3192から石積遺構SF3263の間に明確な門跡は見つからなかった。

**SA3185** 区画52-7の西を限る土塀の基礎で、道路SS2952に面する。この土塀基礎は、区画52-6から南に延び、幅は0.8m、残存している高さは、屋敷内から測ると0.6m、道路側からは0.3mほどである。外側に面を揃え、石を横長に使って2~3石積んでいる。

**SV3188** 52-7の東を限る石垣で、51-15との境界となる。長さは南端から12mあり、それより北は溝SD3177となる。高さは0.3m程で、小振りの自然石を2~3石積み上げている。51-15との比高差は0.3m程あって52-7側が高い。

**SD3035** 屋敷の南を区画する溝で、幅約0.5m、深さ約0.7mと深くて幅が広い。西端は、土塀基礎SA3185とSA3184の間を抜けてSD3184に繋がる。この部分はおそらく暗渠になっていたと推定される。また、溝SD3035は区画52-7東南隅で北側に屈曲して東に流れる。

この屋敷地は、溝SD3179ラインで東西に二分され、さらに西半分は石列SX3222によって分けられる。溝SD3179は南北方向の石組溝で3m分しか残っていない。石列SX3222は径15cmほどの石が一列に7.5m並ぶ。

**SB3200** 南西エリアに位置する。礎石は2石しか残っていないが、礎石を据えた跡3か所が残っていた。この建物は溝SD3035や溝SD3176、石垣SV3188と方向をそろえており、土塀基礎SA3185とは10°程東に振っている。規模は南北5.6m×東西4.7mと推定される。

**SF3263** 屋敷地の南西隅に位置し、東西1.5m×南北0.8m×深さ0.4mの石積み施設である。通常の石積施設より長い。直径0.3m程の石が2段ほど積まれ、中は焼土で埋まっていた。

**SB3199** 北西のエリアに位置し、土塀基礎SA3185から1.5m東に礎石が3石並んでいた。礎石が3石しか残っていないので規模は不明である。礎石建物SB3199の西側にある右列SX3217はこのSB3199の雨だれ溝の圓石であろう。

**SE3192** この北西エリアの南西隅に位置する井戸で、直径が0.8mとやや小さい。この区画52-7では唯一の井戸である。他に石で囲った浅い土壌SX3220やSX3219があるが詳細は不明。

SX3229 SD3179以東のエリアで見つかった銅銭を埋藏遺構である。楕円形土壇に石を2〜3石積み上げ、その上に長径0.7m、短径0.5m、長さ0.3m程の底を抜いた笏谷石の水鉢を重ねていた。さらに越前焼播鉢で蓋がしてあった。底には銅銭3,784枚が納められていた。銅銭には紐を通してあったらしい。この遺構の脇に礎石らしき石が2石残っているところから、おそらく建物の床下に埋藏されていたのだろう。



挿図10 銅銭出土状況

#### 区画52-8

道路SS2952に面して土塼基礎SA3184とそこに設けられた門SI3189を持つ規模の大きい屋敷である。規模は、東西方向については北辺となるSD3035が土塼基礎外側から測って32.5mある。南北方向については、北の境界となる溝SD3036から南へ約20m分発掘調査しているが、さらに南側は発掘調査外となるため、屋敷規模は不明である。



挿図11 土塼基礎石垣SA3184 (東から)

SA3184 52-8の北端から門まで16mを測り、門より南は8m分検出した。幅は門より北がやや広くて2.5mあり、南側はやや狭くて1.7mある。残存している高さは、道路面から約1m、屋敷内側から約1.5mある。外側の石垣の積み方は、まず道路側溝の溝石を並べ、その上に不規則ではあるが1mから2mおきに0.7m×0.5m程の石を置いてその間を径0.3m前後の石を2〜3石積み上げている。内側の石垣の積み方は径0.2〜0.3mの石を4〜5段積み上げている。



挿図12 土塼基礎石垣SA3184 (東から)

SI8189 両脇に高さ約1.0mの大きい石を立てている。道路から1m入ったところに2.4m間隔で礎石が2石あるところから棟門形式の門だった考えられる。SS2922の道路面と門のレベルはほぼ同じであるが、屋敷は門のレベルから0.4m近く低い。

SD3181 門SI3189から東に約4.5m離れて土塼基礎SA3184とはほぼ平行にのびる溝である。この間はSX3257・SB3204を除いて遺構がなく薄い砂利敷となっていた。なお溝SD3181は北端で溝SD3035とは繋がっていない。南の端は不明であるが、検出した長さは約20m、幅0.3m、深さ0.2mある。砂利敷面の北端にあるSX3257は石積施設が崩れたものと考えられ、内側にあった杭は石積みの崩落を防ぐために打った杭と考えられる。なおSB3204は礎石3石のみで規模は不明。

SB3203 屋敷地の北端近くに位置し、溝SD3181とはほぼ平行に建つ礎石建物である。規模は南北6.6m(3間半)×東西5.8m(3間)の南北棟で、東北部に0.9m×2.7mの張り出しを持つ。礎石は失われているところもあるが、外周の礎石には半間の間にも1石入れているところが多い。

SB3205 発掘南端に位置し、溝SD3181とは平行ではなく南側がやや東に振っている。礎石建物

SB3203からは9m南に離れている。規模は東西方向が3.7mで、南北方向は発掘区の外になり不明である。北辺は比較的大ぶりの石を詰めて並べており、土台を回した建物だった可能性がある。このことから建物SB3205は蔵のような建物とも推定される。

石列SX3254と石列SX3255の間は、通路だったと推定される。この通路でこの屋敷の空間2分でき、屋敷内部の使われ方が異なっていたと考えられる。

この通路付近から東については、上層の遺構が倒平されていた。0.3m下にSX3245をはじめとするいくつかの土壌が見つかったが、しっかりとした遺構面とはならなかった。SX3245、SX3248からは建築部材の木片が多数出土した。

**SD3049** 調査区東南隅近くの東西方向の溝で、屋敷地の東端近くで北に大きく屈曲する屈曲部分から溝石が失われて溝も浅くなり溝そのものが不明確になる。



遺物の整理および掲載は、はじめに道路遺構と側溝および武家屋敷や町屋を区画する溝からの遺物をまとめた。つぎに町屋および武家屋敷内の出土遺物を扱い、整備中などその他からの出土遺物は最後に掲載した。出土遺物は上層からⅠ遺構面、Ⅱ遺構面、Ⅲ遺構面からの出土にわけられる。ただし、昭和60年度刊行の概報<sup>1)</sup>でも報告されているが、区画が異なれば遺構面すなわち遺物群が対応しているとは限らない。

また、本調査区は多種多様な遺物が出土しているが、時間的制約のなかで、以前に実測されていた遺物の掲載がほとんどである。多数の遺物の図・写真を掲載できなかったことは否めないため、出土遺物の種類・数量については、遺物台帳から作成した表3を参照していただきたい。今後、図・写真等が未掲載になった遺物が重要な遺物と判断されたものについては別稿で報告するものとする。

既刊の報告書を踏襲し、遺物の分類については越前焼大甕・搦鉢の分類は『県道鯖江・美山線改良工事に伴う発掘調査報告書』1983年、土師質皿は「朝倉氏遺跡発掘調査報告Ⅰ」1979年による。また、近世および中世前の出土遺物については記載していない。金属製品の材質については、肉眼・顕微鏡による観察が多いため銅製の記載についても合金である可能性を持つ。

#### SS2952出土遺物 (第39図、PL.51)

越前焼 (401)は口縁部が肥厚なⅣ群の甕で、焼成は良好である。(402)は口径33.8cmの鉢である。

#### SS3262出土遺物 (第39図、PL.51)

金属製品 (403)は鉄製の鎌である。非常に腐食し、上部が欠損しているが中央部がくびれた六角形を呈す。一乗谷では蕨形のものも多く出土している。約120gである。

#### SD3172出土遺物 (第39図、PL.51)

瓦質土器 (404)は風炉である。口径21.6cmに復元でき、肩部には円形の窓を開ける。これは瓦質であるが、一乗谷では笏谷石と呼称される緑色凝灰岩製の風炉も出土している。

土師質土器 (406)はB類の土師質皿で口径7.1cm、器高1.8cmを測る。

#### SD2953出土遺物 (第39図、PL.51)

越前焼 (405)は口径5.8cm、底径9.4cm、器高11.2cmを測る甕で、胎土は灰色である。

#### SD2862出土遺物 (第39図、PL.51)

越前焼 (407)は口径9.8cmを測る甕で、胴部にヘラ記号を有す。(408)は口径4.4cm、底径5.2cm、器高7.5cmを測る甕である。

土師質土器 (409・410)はC類の皿で、(409)は口径9.4cm、器高2.3cmを測り、胎土は暗赤褐色である。(410)は口径9.1cm、器高2.1cmを測り、胎土は灰白色である。共に口縁部にタールが付着する。

瀬戸・美濃焼 (411)は口径10.2cm、器高2.7cmを測り、内面を菊肌状に削ぐ灰釉皿である。

中国製陶磁器 (412)は口径が約12.5cmに復元できる青磁碗である。体部外面には竊蓮弁文を有する。(413)は端反の白磁皿で口径11.2cm、器高2.85cmを測る。

金属製品 (414)は金製の葉状の飾金具である。最大長4.2cm、最大幅2.4cm、厚さ約0.5mmを測り、重

量は約2gである。葉の切り込みなどの形状から、菊の葉状とも考えられる。

#### SD3171出土遺物 (第39図、PL.51)

越前焼 (415) は口径が約19cmの鉢である。茶褐色に焼き締まっている。

土師質土器 (416) はD類の皿で、口径約16.7cm、器高2.6cmに復元できる。

#### SD3175出土遺物 (第40図、PL.52)

越前焼 (417) はIV群の甕である。

中国製陶磁器 (418) は青磁碗である。口径12.8cm、器高4.4cmを測る。

木製品 (419) は搗粉木と考えられる。残存長は17.7cm、最大径3.2cmである。撞部は欠損している。

#### SD3176出土遺物 (第40図、PL.52)

越前焼 (420) はIII群、(421) はIV群の甕である。(422) は壺で、口縁は欠損しているが底部は13.2cmを測る。肩部にヘラ記号を有す。(423) は口径17.1cm、器高7.1cmの鉢である。

土師質土器 (424)～(426) はC類の皿である。(424) は口径8.7cm、器高2.15cmである。(425) は8.8cm、器高2.3cmである。(426) は口径8.9cm、器高2.0cmである。(425)・(426) は同溝の下層から出土した。

中国製陶磁器 (427) は口径11.8cm、底径、6.8cm、器高3.1cmを測る端反りの白磁皿である。(428) は口径12.0cmを測る端反りの染付皿である。

#### SD3177出土遺物 (第40図、PL.52)

越前焼 (429) は口径19.2cm、底径8.8cm、器高6.8cmを測る鉢である。

土師質土器 (430) は口径6.5cm、器高2.8cmを測るB類の皿である。ケール痕はない。

#### SD3035出土遺物 (第40-41図、PL.52-53)

越前焼 (431) はIII群の甕である。口径が約19cmに復元できる。(432) は口径23.4cm、器高8.9cmを測る鉢である。(433)・(434) は搗鉢である。(433) は口径36.1cm、底径20.2cm、器高12.9cmに復元できるIV群の搗鉢である。9条1組の撞目を有するが、非常に磨り減っている。(434) は口縁断面が丸みをおびたIII群の搗鉢で口径21.6cm、器高7.8cmを測る。7条1組の撞目を有する。(435) は口径19.4cm、底径16.2cm、器高20.4cmを測る桶である。底板の上に六段程の粘土を積む。内面は撞目の残る箇所もあるが、外面はヘラ等で調整されている。

土師質土器 (436)～(438)・(440) はC類の皿である。(436) は口径6.8cm、器高1.8cmを測り、(437) は口径7.2cm、器高1.7cmを測る。(438) は口径8.7cm、器高1.9cmを測り、(440) は口径9.0cm、器高2.0cmを測る。(439-441) はD類の皿である。(439) は口径10.9cm、器高2.1cmを測り、(441) は口径10.7cm、器高2.4cmを測る。(440)・(441) はII造構面出土である。

瀬戸・美濃焼 (442) は口径10.2cmを測る鉄軸碗である。(444) は口径12.0cm、底径4.8cm、器高2.6cmの端反灰釉鉀皿である。軸は、口縁内部にのみかかり、胎土は緻密で堅く焼き締まる。底部は回転糸切痕が残る。(443) は口径7.2cm器高4.0cmに復元できる灰釉香炉である。

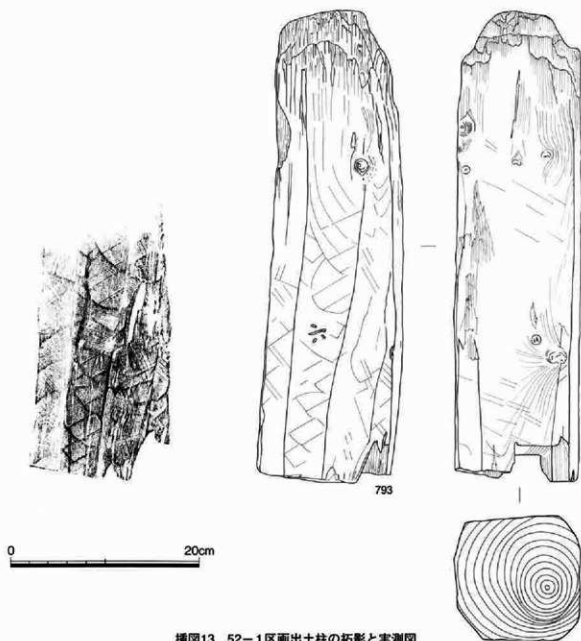
瓦質土器 (445) は口径約12.0cm、器高約5.0cmに復元できる三足の香炉と考えられる。菊の印花が横



一段に廻る。Ⅱ遺構面出土である。

**中国製陶磁器** (446)は口径13.0cmに復元できる青磁碗である。線刻の蓮弁文が施され、透明がかった薄い青緑色の釉がかかる。Ⅱ遺構面出土である。(447)は底径6.0cmの青磁皿と考えられる。内面見込に印花文がみられる。青磁碗底部を打ち欠き、2次的に使用した遺物が出土することがあるが、この(447)も器壁が薄いため明確でないが同様の使用が考えられる。(448)は端反の白磁皿である。口径11.2cm、底径6.4cm、器高2.9cmを測る。

**金属製品** (449)は刀子で、残存刃長は7.9cm、茎の長さは6.6cmである。全てⅡ遺構面出土である。(450)は鉄釘である。全長は13.0cm、頭部は巻頭である。頭部は天端から見ると、長辺が1.7cm、短辺が1.0cmである。首部の断面は0.6cm×0.6cmで、ほぼ正方形であるが、中央になるとやや平たく長方形になる。釘頭より2/3まで均等に先細り、先端までは急に細くなる。(451)は長さ34.5cmを測る火箸である。断面は約3mm角である。



挿図13 52-1区面出土柱の拓影と実測図

石製品 (452)はD型のバンドコの蓋部である。表裏面ともに丁寧な器面調整が行なわれている。内面は煤で黒色になっている。Ⅱ遺構である。

#### 区画52-1出土遺物 (第42-43図, PL.54-55, 挿図13)

越前焼 (453)はⅣ群の甕である。(454)は口径11.8cm、(455)は口径11.8cm、(456)は口径4.3cmの甕である。これらの甕はⅡ遺構面出土である。(457)はⅡ遺構面から出土した口径24.8cmの鉢である。

中国製陶磁器 (459)は長径10.1cm、短径7.8cm、器高2.6cmの青磁皿である。(458)は口径12.2cm器高3.1cmの白磁菊皿である。畳付け部分以外、全面に白磁軸が施されている。(460)は口径9.0cm、器高2.0cmの端反白磁皿である。(461)は口径11.6cm、器高2.9cmの白磁皿である。(460)・(461)はⅡ遺構面出土である。

金属製品 (462)は鉄製の鏝である。全長12.9cmを測る。打ち込んだときに表に見える部分の長さは11.3cm、爪部の長さは2.9cmである。断面は幅0.9cm、厚み0.4cmで、やや板状である。(463)は鉄鏝である。本体は円錐形、茎は四角い。全長5.1cm、茎長3.1cmである。(464)は刀装具の内の足金物である。漆は付着していない。Ⅱ遺構面出土である。その他の武器類として鉄砲の鉛製弾丸1点がある。径1.2cmである。(465)は資金具である。最大外径3.4cm、最大内径2.5cmを測る。Ⅱ遺構面出土である。

木製品 (466)・(467)・(469)・(470)・(471)・(472)・(473)糸車の部品と考えられる。Ⅱ遺構面出土である。第51次調査区でも出土している。(793)は柱である。材質は松と思われ、芯持ちの材である。柱の中央やや下に「六」の墨書番付が見られる。高さは50.0cm、断面は14.2cm×12.8cmを測る。全体に湾曲しており、頭部は欠損し、底部には撃による溝が中心を通るように作られている。この溝幅は約4.0cm、深さは約2.0cmを測る。表面は手斧ではつられ、平刃で刃幅は最大で約3.0cmを測る。また番付のある面にはこれより大きな刃痕もあるようにみられる。別の刃によるものか、あるいは同一の刃で加工したことによる痕跡なのかは明らかでない。SE2978の井戸の西側で出土し、整備工事の際に引き抜いた。

その他 (468)輪の羽口である。最大径10.1cm、残存長11.3cmを測る。土製の羽口で、非常に堅く焼き締まっている。

#### 区画52-2出土遺物 (第43-45図, PL.55-57)

越前焼 (474)はⅣ群の甕である。(475)は口径31.9cmの鉢である。(476)は口径30.2cm、器高9.4cmを測るⅢ群の播鉢である。播幅2.9cm、播目は10条1組である。(477)は口径20.8cm、器高8.7cmを測るⅣ群の播鉢である。播幅2.8cm、播目は11条1組である。全てⅠ遺構面出土である。

土師質土器 (478)は口径8.6cm、器高2.3cmを測るC類の皿である。(479)は口径9.4cm、器高2.4cmを測るA類の皿である。(480)は灯心押で直径2.7cm器高0.5cmを測る。全てⅠ遺構面出土である。

瀬戸・美濃焼 (481)は口径10.5cm、器高6.2cmを測る鉄軸碗である。胎土は肌色で、ホソボソしており、鉄釉の発色は良好で藍色を呈す。(482)は口径12.2cmを測る灰軸碗である。ともにⅠ遺構面出土である。

中国製陶磁器 (483)は口径12.9cm、底径7.2cm、器高3.3cmを測る端反りの白磁皿である。(484)は口径12.2cmを測る端反白磁皿である。(485)は口径16.4cm、底径10.5cm、器高2.8cmに復元できる端反白磁皿である。全てⅠ遺構面出土である。(486)は口径9.4cm器高2.8cmを測る端反の染付皿である。外面胴部には唐草文、見込には十字花文を描く。(487)は口径11.9cm、器高2.6cmを測る端反の染付皿である。外面胴部、見込に唐草文を描く。(487)以外の中国製陶磁器はⅠ遺構面出土である。

木製品 (488)は神像である。器高11.0cm、最大幅2.8cm、厚1.3cmを測る。前面は赤色顔料が残り、背面には墨書がかすかに残るが、判読不能である。また、頭部背面に径0.1cmのクギ孔が2箇所、縦に存在する。壁などに取り付けられていたのであろうか。I遺構面出土である。(489)は杓子で残存長19.2cm、最大幅5.3cm、厚さ約0.6cmを測る。墨書で宝袋、俵、宝珠、小植、蓬葉文様などの絵や、その裏には男女の巫現が描かれている。また、俵や宝珠とともに軽澤金が描かれているとする理解もある<sup>3)</sup>。五穀豊穡、子孫繁栄などを願った「招福杓子」といわれるものである。(490)は用途不明の棒状製品と考えられる。残存長17.7cm、最大径1.1cmを測る。先端には、長さ3.2cmを測る円錐形の銅製金属器を被せている。(491)は刀子の鞘と考えられる。長さ9.1cm、幅2.9cm、厚さ0.6cmを測る。(488)以外はII遺構面出土である。

#### SF3193出土遺物 (第45図、PL.57)

土師質土器 SF3193はI遺構である。(492)は口径7.2cm、器高1.9cmを測るB類の皿である。(493)は口径7.1cm、器高1.8cmを測るC類の皿である。

瀬戸・美濃焼 (494)は口径7.7cm、器高1.7cmを測る灰軸皿である。見込に印花をもつ。

中国製陶磁器 (495)は口縁の外反する青磁の稜花皿である。口径13.4cm、器高3.1cmを測る。(496)は口径12.6cmを測る染付碗である。外面口縁部は波濤文、外面胴部は芭蕉葉文を描く。(497)は底径3.9cmを測る染付碗底部である。

#### 区画52-3出土遺物 (第45図、PL.57)

越前焼 (498)はIV群の甕である。(499)はIII群の播鉢で口径30.8cm、底径12.4cmを測る。舞幅は約3.1cmで9条1組である。2点ともI遺構面出土である。

土師質土器 (500)はG類の皿である。口径5.5cm、器高1.6cmを測り、蓋に使用されたとも考えられる。(501)は口径8.4cm、器高2.4cmを測るB類の皿である。(502)は口径8.9cm、器高2.0cmを測るC類の皿である。(503)は口径9.2cm、器高2.4cmを測るC類の皿である。タールが口縁外内面に多量に付着する。全てI遺構面出土である。

瀬戸・美濃焼 (504)は鉄軸碗である。口径22.1cm、器高6.1cmを測る。口縁下のくびれは強く、外面腰部以下は銷軸が施される。(505)は口径9.1cm、器高2.3cmを測る灰軸皿である。見込に菊花文の印花をもつ。全てI遺構面出土である。

#### 区画52-4出土遺物 (第45図、PL.57)

越前焼 (506)は鉢で口径15.3cm、底径11.8cm、器高6.5cmに復元できる。I遺構面出土である。

#### 区画52-5出土遺物 (第46図、PL.58)

越前焼 (507)はIV群の甕である。(508)は口径20.8cmに復元できる甕である。共にI遺構面出土である。(509)は口径7.1cmを測る掛花生と考えられる。越前焼としているが、他地域産の可能性もある。

土師質土器 (510)は口径5.4cm、器高2.1cmを測るB類の皿である。(511)は口径8.5cm、器高2.0cm、(512)は口径9.0cm、器高2.2cmのC類の皿である。(511)は口縁外内面にタールが付き、(512)は内面・外面ともに黒色である。(513)は直径3cm程の土鈴で、上に紐を通して吊るすための穴がある。これまでの出土例をみると、中に土製の小玉が入って音がなる。これは本体が欠損し、玉がない。

瀬戸・美濃焼 (514)は口径5.7cm、器高2.6cmの灰釉の坏である。外面胴部下部以下は露胎である。

中国製陶磁器 (515)は口径11.5cm、器高2.8cmの端反の白磁皿である。(516)は口径9.0cm、器高2.2cmの端反の染付皿である。外面は唐草文で、見込に羯磨文を描く。I 遺構面出土である。

#### 区画52-6出土遺物 (第46・47図、PL.58・59)

越前焼 (517・518)はIV群の甍である。(519)はII群の甍である。(520)は口径4.7cm、器高10.9cmの小壺である。(521)は口径12.1cm、(522)は10.1cmの壺である。(523)は口径31.8cm、底径15.4cm、器高8.2cmの鉢である。口縁内面に榊目文が3箇所確認できる。(524)は器高2.9cmの鉢である。(525)は口径21.6cm、器高8.7cmを測るIII群の播鉢である。播目は8条1組である。(526)はIV群の播鉢で播目は13条1組である。(527)は口径20.6cm、器高4.1cmを測る浅鉢である。内面全体に播目を施す。播目は8条1組である。(528)は残存率が悪いので口径など復元できないが、火桶と考えられる。全てI 遺構面出土である。

土師質土器 (529)は口径7.1cm、器高1.8cmのB類の皿である。(530)は口径8.8cm、器高2.1cmを測り、(531)は口径8.6cm、器高2.3cmを測る。ともにC類の皿である。全てI 遺構面出土である。

中国製陶磁器 (532)は口径13.7cmを測る青磁碗である。(533)は口径16.4cm底径9.9cm、器高4.0cmを測る端反の白磁皿である。(534)は口径11.3cm、器高3.1cmを測る端反の白磁皿である。(535)は長径約10cmに復元できる白磁皿である。器高は1.9cmを測る。(536)は白磁角形掛花生である。口径5.3cm、器高は約15cmに復元できると思われる。灰色の胎土に白磁釉がかかる。欠損部分があるため穿孔は確認できない。白磁角形掛花生の一乗谷朝倉氏遺跡での出土は第50次発掘調査がある。I 遺構面からの出土である。(537)は底径7.4cmを測る染付皿である。見込には人物を描き、高台内には「洪武年造」の字款が描かれる。全てI 遺構面からの出土である。

金属製品 (538)は口径8.6cm、器高1.4cmをはかる銅製の燭台である。蠟燭を立てるため、筒型金属を皿の中央に穴をあけ取り付けている。皿内面中央付近に約3cmを測る円形の跡が薄く確認できるが、これが蠟燭の底部の大きさだと捉えることもできる。I 遺構面からの出土である。

石製品 (539)は砥石で、使用面の最大長14.8cm、幅4.7cmを測る。厚さは4.5cmあり、両面に低いだけ使用痕がある。(540)は硯で、底部に足を持つ。外面には漆膜が残る。残存長は8.4cm、残存幅2.9cm、厚1.4cmである。海の部分は欠損している。2点ともI 遺構面からの出土である。

#### SE3191出土遺物 (第48図、PL.60)

越前焼 SE3191はI 遺構である。(541)は鉢である。

中国製陶磁器 (542・543)は青磁碗である。(542)口径21.7cm、(543)は口径12.0cmを測り、2点とも外面に線刻の蓮弁文をもつ。(544)は口径8.0cm、器高2.6cmを測る無文の青磁皿である。(545)は口径10.6cm、器高2.9cmを測る端反の白磁皿である。(546・547)は端反の染付皿である。(546)は口径11.0cmを測り、(547)は口径12.0cmを測る。外面には唐草文を描く。(548)は茶筒底の染付皿で、外面および見込に梵字文を描く。

#### SF3194出土遺物 (第48図、PL.60)

越前焼 SF3194はI 遺構である。(549)は口径23.2cmを測る鉢である。(550)は口径40.8cm、器高15.6cmを測るIV群の播鉢である。播目は8条1組である。

中国製陶磁器 (551)は口径10.4cmを測る端反の白磁皿である。

区画52-7出土遺物 (第48-51図、PL.60-63)

越前焼 (555-557)はⅣ群の甕である。(559)はⅡ群の甕である。(558)・(554)は壺である。(552)は口径5.9cmを測り、(553)は口径6.6cmを測る壺である。(560)は口径5.7cm、器高6.6cmの鉢である。(561)は口径33.6cmを測るⅣ群の播鉢である。播目11条1組である。(562)は口径37.6cm、器高10.9cmを測るⅣ群の播鉢である。播目は11条1組である。胎土は黄白色で、焼き締まっていない。内面半分以下は非常に使用されており、播目が磨耗している。(563)は口径35.9cmを測るⅣ群の播鉢である。播目は9条1組である。以上、(555)～(563)はⅠ遺構面出土である。(565)はⅣ群の甕である。(564)は口径15.9cm、底径15.5cm、器高44.4cmを測る壺である。肩に匏記号が刻まれる。(566)は口径23.7cm、器高4.3cmを測るⅣ群の播鉢である。播目は9条1組である。(567)は口径35.9cmを測るⅣ群の播鉢である。(568)は鉢である。(564-568)はⅡ遺構面出土である。

土師質土器 (569)は口径4.6cm、器高1.3cmを測るG類の皿である。蓋として使用されたとも考えられる。(570)は復元長径約5.7cm、短径4.3cm、器高1.1cmを測る「耳かわらけ」といわれるH類の皿である。箸置として使用されたと考えられる。ともにⅠ遺構面出土である。

瀬戸・美濃焼 (571)は口径12.4cmを測る鉄軸碗である。底部は欠損している。(572)は口径4.7cmを測る鉄軸壺である。胴底部は軸葉がかからない。口縁は蓋を設置できるように肩部から約0.1cm窪み、幅0.9cmの受部を呈する。(573)は鉄軸の小壺である。口径2.2cm、底部3.3cmを測る。(574)は最大径3.3cm、器高1.3cmの小壺の蓋である。上面には鉄軸がかかるが、下面は露胎である。轆轤轆きで長く延びた底には回転糸切り痕がつく。(579)は口径約9.3cmに復元できる灰桶香炉である。(571-576)はⅠ遺構面出土で、(579)はⅡ遺構面出土である。

中国製陶磁器 (575)は口径9.1cm、器高2.6cmを測る端反の青磁皿である。(576)は口径11.9cm、器高3.5cmを測る青磁皿である。(580)は底径4.5cmを測る外面無文の青磁碗である。(575-576・580)はⅠ遺構面出土である。(577)は底径5.5cmを測る青磁壺である。上部が欠損している。(578)は口縁10.9cm器高2.8cmを測る端反の白磁皿である。(577)・(578)はⅡ遺構面出土である。(581)は外面に宝相華唐草文、内面には玉取獅子文を描く端反の染付皿である。口径11.8cmを測る。(582)は碁筒底を呈する皿で、外面に芭蕉文が描かれる。内面には花鳥文が見られるものである。(581)・(582)はⅠ遺構面出土である。(583)は口径17.9cm、器高2.4cmを測る端反の赤絵皿である。Ⅱ遺構面出土である。

朝鮮製陶磁器 (584)は口径19.5cm、底径11.6cm、器高11.7cmを測る鉢である。胎土は暗赤褐色で、堅く焼き締まっている。Ⅱ遺構面出土である。

金属製品 (585)は黄銅である。長軸1.5cmを測り、約0.5cmの穴を2個もつ。Ⅰ遺構面出土である。(586)は長径5.6cm、短径5.3cmの木瓜形の切羽である。表面から裏面の縁約0.5cmまで包み込むように漆膜で覆われている。(589)～(687)は銭貨である。(589)～(597)開通元寶、(598)・(599)札重元寶、(600)札徳元寶、(601)唐國通寶、(602)開元通寶、(603)宋通元寶、(604)太平通寶、(605-606)淳化元寶、(607-608)至道元寶、(609)咸平元寶、(610)景德元寶、(611)・(612)祥符元寶、(613)祥符通寶、(614)天禧通寶、(615)・(616)天聖元寶、(617)・(618)明道元寶、(619)・(620)景祐元寶、(621)～(624)皇宋通寶、(625)～(627)至和元寶、(628)・(629)至和通寶、(630)・(631)嘉祐元寶、(632)・(633)嘉祐通寶、(634)・(635)治平元寶、(636)・(637)治平通寶、(638)～(640)熙寧元寶、(641)～(643)元豐通寶、(644)～(647)元祐通寶、(648)～(652)紹聖元寶、(653)・(654)元符通寶、(655)～(658)聖宋元寶、(659)大觀通寶、(660)・(661)政和通寶、(662)宣和通寶、(663)建炎通寶、(664)～(666)淳熙元寶、(667)・(668)紹熙

元寶、(669)・(670)慶元通寶、(671)嘉泰通寶、(672)開禧通寶、(673)・(674)嘉定通寶、(675)～(677)紹定通寶、(678)・(679)景定元寶、(680)正隆元寶、(681)大定通寶、(682)・(683)洪武通寶、(684)永樂通寶、(685)宣德通寶、(686)朝鮮通寶、(687)天福鎮寶である。すべて銅銭で、50種、3,784枚を数える(表4)。銅銭が出土した遺構は16世紀中頃と推定されるSX3229である。周囲を2～3段の自然石を積上げた楕円形のピット内の底に、容器を伴わず直に置かれていた。これまでの多種の研究報告で記載されているが<sup>(1)</sup>、建物の床下に設けられた銅銭貯蔵のための施設と考えられ、出土した銭は備蓄銭と考えられる。一括して埋められており、朝倉氏滅亡後の散逸は無いものと思われる。銅銭は紐を通した網銭の状態出土した部分が多い。1網の平均を97枚と仮定した場合、出土した銅銭は39網に換算できる。銭のほとんどは磨耗や破損はあまりみられず、精銭の出土銭である。銅銭の最古銭が開元通寶、最新銭が明銭の宣德通寶である。また、一乗谷で銭貨がまとまって出土した例と比較すると明銭の「永樂通寶」の割合が高いことが特徴である。以上、全てⅠ遺構面出土である。

**石製品** (587)は最大径4.4cmの球状石製品であり、中央に径0.8cm、深さ2.1cmの穴を穿つ。明確な用途は不明であるが、群書類集に収められている「七十一番歌合」の念珠挽の絵に、数珠に穴を開ける錐の重石として同様の石のような物を使用しているように見えるといわれている<sup>(4)</sup>。一乗谷では第15・25次発掘調査や第10・11次発掘調査で同じ形態の石製品が出土している。(588)は底部に足を持たず平らな長方礎である。残存最大長は13.1cm、幅8.3cm、高さ2.3cmを測る。内面は楕円形で、観音縁帯幅は0.8cmで、視下部縁帯幅は1.6cmと広くなっている。陸部に墨の痕が少し残る。以上、全てⅠ遺構面出土である。

| No. | 銭貨名  | 国名 | 初鋳年  | 枚数  | No. | 銭貨名  | 国名 | 初鋳年  | 枚数    |
|-----|------|----|------|-----|-----|------|----|------|-------|
| 1   | 開元元寶 | 唐  | 621  | 253 | 27  | 元祐通寶 | 北宋 | 1086 | 352   |
| 2   | 乾元重寶 | ＊  | 758  | 8   | 28  | 紹聖元寶 | ＊  | 1094 | 167   |
| 3   | 乾元元寶 | 前蜀 | 919  | 1   | 29  | 元符通寶 | ＊  | 1098 | 64    |
| 4   | 周通元寶 | 後周 | 955  | 1   | 30  | 聖宋元寶 | ＊  | 1101 | 138   |
| 5   | 唐國通寶 | 南唐 | 959  | 2   | 31  | 大觀通寶 | ＊  | 1107 | 19    |
| 6   | 宋通元寶 | 北宋 | 960  | 10  | 32  | 政和通寶 | ＊  | 1111 | 126   |
| 7   | 太平通寶 | ＊  | 976  | 25  | 33  | 宣和通寶 | ＊  | 1119 | 15    |
| 8   | 淳化元寶 | ＊  | 990  | 25  | 34  | 建炎通寶 | 南宋 | 1127 | 1     |
| 9   | 至道元寶 | ＊  | 995  | 69  | 35  | 淳熙元寶 | ＊  | 1174 | 11    |
| 10  | 咸平元寶 | ＊  | 998  | 58  | 36  | 紹興元寶 | ＊  | 1190 | 3     |
| 11  | 景徳元寶 | ＊  | 1004 | 75  | 37  | 慶元通寶 | ＊  | 1195 | 2     |
| 12  | 祥符元寶 | ＊  | 1009 | 98  | 38  | 嘉泰通寶 | ＊  | 1201 | 1     |
| 13  | 祥符通寶 | ＊  | 1009 | 55  | 39  | 開禧通寶 | ＊  | 1205 | 1     |
| 14  | 天禧通寶 | ＊  | 1017 | 90  | 40  | 嘉定通寶 | ＊  | 1208 | 6     |
| 15  | 天聖元寶 | ＊  | 1023 | 152 | 41  | 紹定通寶 | ＊  | 1228 | 4     |
| 16  | 明道元寶 | ＊  | 1032 | 25  | 42  | 景定元寶 | ＊  | 1260 | 3     |
| 17  | 景祐元寶 | ＊  | 1034 | 64  | 43  | 正隆元寶 | 金  | 1157 | 8     |
| 18  | 皇宋通寶 | ＊  | 1038 | 495 | 44  | 大定通寶 | ＊  | 1178 | 1     |
| 19  | 至和元寶 | ＊  | 1054 | 55  | 45  | 洪武通寶 | 明  | 1368 | 4     |
| 20  | 至和通寶 | ＊  | 1054 | 16  | 46  | 永樂通寶 | ＊  | 1408 | 169   |
| 21  | 嘉祐元寶 | ＊  | 1056 | 50  | 47  | 宣徳通寶 | ＊  | 1433 | 1     |
| 22  | 嘉祐通寶 | ＊  | 1056 | 100 | 48  | 朝鮮通寶 | 朝鮮 | 1423 | 1     |
| 23  | 治平元寶 | ＊  | 1064 | 72  | 49  | 天福鎮寶 | 安南 | 984  | 1     |
| 24  | 治平通寶 | ＊  | 1064 | 14  | 50  | 判読不能 |    |      | 5     |
| 25  | 熙寧元寶 | ＊  | 1068 | 394 |     |      |    |      |       |
| 26  | 元豊通寶 | ＊  | 1078 | 474 |     | 合計枚数 |    |      | 3,784 |

表4 SX3229出土銭貨一覧表

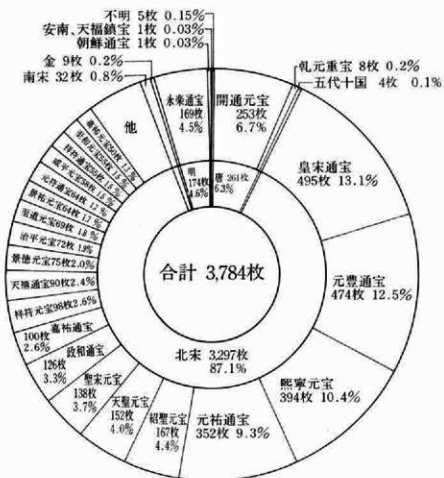


表5 SX3229出土銭貨構成

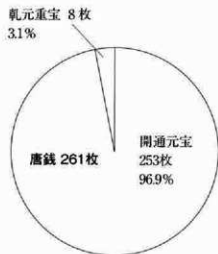


表6 SX3229出土唐銭の構成

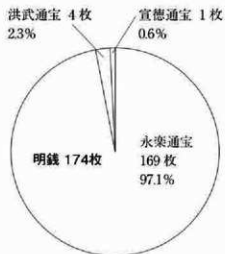


表7 SX3229出土明銭の構成

#### 区画52-8出土遺物 (第52-58図、PL.64-70)

越前焼 (688)~(690)はIV群の甕である。(691)は口径14.6cmを測る甕である。(692)は口径14.6cmを測る甕である。(693)は口径9.1cmの甕である。(695)は口径13.8cm、底径14.1cm、器高22.4cmを測る甕である。肩部に施記号をもつ。(688-693・695)はI遺構面出土である。(694)は口径13.2cmの甕である。(696)は口径13.6cmの甕である。(694-696)はII遺構面出土である。(697)は15.1cmを測る鉢である。(698)は口径31.6cm、底径15.0cm、器高8.3cmを測る鉢である。内面上部に櫛目で上下に半円を合せた文を呈す。(699)は口径34.0cm、底径16.9cm、器高7.2cmを測る鉢である。内面上部に櫛目で波状文を呈す。(697)~(699)はI遺構面出土である。(700)は口径36.9cmを測るIV群の搦鉢である。(701)は口径26.6cm、器高8.1cmを測るIV群の搦鉢である。2点とも搦目は8条1組で、I遺構面出土である。(702)は、口径28.8cm、底径13.2cm、器高11.0cmを測るIV群の搦鉢である。搦目は9条1組である。(703)はIII群の搦鉢で、口径23.7cm、底径12.4cm、器高8.1cmを測る。搦目は7条1組である。(702)・(703)はII遺構面出土である。(704)はIII群の搦鉢で、搦目が9条1組で間隔を空けて施されている。III遺構面出土である。

土師質土器 (705)は口径5.9cm、器高1.5cmを測るC類の皿である。(706)は口径7.0cm、器高2.0cmのB類の皿である。(705)・(706)はI遺構面出土である。(707)は口径6.9cm、器高1.9cmを測るB類の皿である。II遺構面出土である。(708)は口径7.0cm、器高1.7cmを測るC類の皿である。III遺構面出土である。(709)は口径8.8cm、器高2.2cmを測るC類の皿である。I遺構面出土である。(710)は口径8.0cm、器高2.1cmを測るB類の皿である。II遺構面出土である。(711)は口径8.5cm、器高1.9cmを測るC類の皿である。III遺構面出土である。(712)は口径10.2cm、器高2.2cmを測るC類の皿である。I遺構面から出土している。(713)は口径10.2cm、器高2.4cmを測るC類の皿である。II遺構面出土である。(714)は口径10.1cm、器高1.9cmを測るA類の皿である。III遺構面出土である。(715)は羽釜である。口径11.1cmを測る。体部に端部が上に反った貼り付けの鈎がつく。一乗谷では高さ約10cmになる標準的なサイズの土製の釜である。I遺構面出土である。

瀬戸・美濃焼 (716)は口径11.8cm器高6.0cmを測る鉄軸碗である。内面と外面体部上半に鉄軸を施し、外面体部下半は露胎する。施軸の境界は整えられ、軸の垂れはない。底部はやや深く削り込み、内返り高台とする。(717)は口径11.7cm、器高6.3cmを測る鉄軸碗である。内面と外面体部上半に鉄軸を施し、外面体部下半は錆軸を施す。施軸の境界はほぼ整えられているが、軸の垂れが少し確認できる。(716)・(717)はI遺構面出土である。(718)は口径11.5cm、器高6.3cmを測る鉄軸碗である。外面体部下半は錆軸を施す。施軸の境界は整えられ、軸の垂れはない。III遺構面出土である。(719)は、口径11.7cmを測る鉄軸皿である。内面および外面体部上半は鉄軸を施し、下半は錆軸を施す。鉄軸は垂らしている。II遺構面出土である。(720)は口径12.3cmを測り、推定復元すると器高14cm以上なる。広い口縁部から肩部にかけて僅かに影らむ。胴部は直線的に立ち上がる寸胴状の甕である。内外面全体に黒褐色の錆軸が施される。I遺構面出土である。(721)は口径5.4cm、器高1.6cmの灰軸皿である。見込に押印を施す。I遺構面出土である。(722)は口径8.9cm、器高2.5cmを測る端反の灰軸皿である。底部は断面三角形の貼り付け高台で、高台内には輪トナン痕がある。I遺構面出土である。(723)は口径11.8cm、器高2.5cmを測る灰軸皿である。見込に菊花の印花文をもつ。高台内には輪トナン痕が残る。I遺構面出土である。(724)は口径10.6cm、器高2.7cmを測る灰軸皿である。内面を菊肌状に削ぐ。(725)は口径12.0cm、器高2.8cmの灰軸皿である。見込に菊花の印花文を有す。(724)・(725)はIII遺構面出土である。



中国製陶磁器 (726)は口径8.2cmを測る端反の青磁碗である。内面を菊花状に削ぐ。I 遺構面出土である。(727)は底径4.0cmを測る青磁碗の底部である。高台内面の釉葉は削がれている。I 遺構面出土である。(728)は口径15.8cmに復元できる青磁碗である。外面にノミ状工具で彫られた蓮弁文を施す。III 遺構面出土である。(729)は底径4.6cmを測る青磁碗の底部である。外面は細線で蓮弁文を刻み、見込には薄く印花が確認できる。高台端部は丸く整え、高台内面の釉葉は削がれている。III 遺構面出土である。(730)は口径10.4cm、器高3.6cmを測る青磁の菊皿で、I 遺構面出土である。(731)は長径8.3cm、短径6.8cmを測る楕円形で、青磁釉が厚くかかる菊皿である。III 遺構面出土である。(732)は口径6.4cmを測る青磁香炉である。(733)は口径8.2cm、器高6.6cmを測る青磁香炉である。口縁内側に返りが付き、口縁部、胴部、底部に数条の凹線が周り、竹節形につくられる。I 遺構面出土である。(734)は口径8.8cmの青磁香炉であり、口縁部内側に返りが付き、算木文を施す。I 遺構面出土である。(735)は口径7.9cmを測る青磁香炉である。口縁内側に返りが付き、口縁部、胴部、底部に数条の凹線が周り、竹節形につくられる。II 遺構面出土である。(736)・(737)は口径約9.0cm、器高約2.1cmを測り、(738)は口径22.2cm、器高3.9cmを測る端反の白磁皿である。(739)は高台内に「福」の字が描かれる白磁皿の底部で(736~738)と共にI 遺構面出土である。(740)は口径10.7cm、器高2.6cmを測る白磁皿である。高台脇から丸みをもって開き口縁に至る。II 遺構面出土である。(741)は口径13.1cm、器高3.1cmを測る白磁皿で、III 遺構面からの出土である。(742)は口径6.4cm、底径2.4cm、器高3.6cm、(743)は口径6.2cm、底径2.4cm、器高3.2cmを測る白磁の坏である。2点とも見込に幅約0.8mmの輪状になった軸の掛からない部分を有する。(742)はI 遺構面、(743)はIII 遺構面出土である。(744)は口径13.4cm、器高5.2cmを測る染付碗である。外面口縁には波濤文帯を、胴部には芭蕉葉文を描く。見込には蓮花文を描く。II 遺構面出土である。(745)は底径5.1cmを測り、III 遺構面から出土した染付碗である。(746)は口径12.8cm、器高2.9cmの染付皿である。高台内に「宣徳年造」と描く。I 遺構面出土である。(747)は底径9.9cmを測り、内面に玉取獅子文を描く染付皿である。I 遺構面出土である。(748)は口径9.8cm、器高2.9cmを測る「荳苜底」をもつ染付皿である。II 遺構面出土である。(749)は口径13.5cm、器高3.1cmの端反の染付皿である。III 遺構面出土である。

金属製品 (750)は鉄製の鉤状金属製品で、最大長11.9cmを測る。幅約1.0cm、厚さ約0.4cmの棒状金属器の先端を鉤状にしている。用途は不明である。(759)・(758)は鉄釘である。(759)の全長は10.8cmだが先端がやや曲がっているため、本来はもう少し長い。頭部は巻頭であり、天端からみると長辺1.6cm、短辺0.9cmである。首部の断面は0.5×0.5cm、中央部断面は0.4×0.4cmで、ともに正方形である。I 遺構面出土である。(758)は全長7.3cmである。頭部は巻頭だが巻ききらず、折れのみにとどまる。天端からみて長辺1.2cm、短辺0.5cmである。首部断面は0.6×0.4cmで長方形である。釘頭より1/2まで均等に先細り、残りに急に細くなる。I 遺構面出土である。(754)は鉄製の猿繫である。2つの輪が組み合った状態で、全長は7.0cmを測る。L字型の部分は完形で、柱などの部材に固定する側は先端が切れている。L字型部材の全長は6.4cm、断面は円形に近く径0.7cm、先端2.2cmが直角に曲げられ、他端の輪は外径0.9cmである。一方、これに組み合う輪は外径が1.1cmで、先端は途中で切れる。I 遺構面出土である。(755)は鉄製の猿繫である。L字型のみ完形で出土した。全長は7.4cm、輪部は外径1.5cm、穴の内径は0.7cmを計る。輪に近い部分の首部は太く、輪から3/7の辺りから断面が径0.6cmで一定になる。先端2.6cmが直角に曲げられ、先端断面は径0.5cmとやや細くなる。I 遺構面出土である。(753)は鉄製の壺金である。全長4.9cm、頭部はほぼ円形で外形は1.3cm、内径は0.6cmを測る。頭部厚みは0.7cmで、

先端へ向かって次第に細くなる。Ⅰ遺構面出土である。(757)は鉄製の引手金具である。3枚が重なった状態でくっついており、全体にサビが多い。外形は長手方向で0.5cm、短手方向で3.8cm、内径は長手方向で3.6cm、短手で2.4cmを測る。最も内側の1枚目は筒形で、厚みが1cm、長手方向に釘穴が2つつく。縁の幅は0.3cmである。2枚目は板状で幅0.4cmである。3枚目は花びら状で、花弁は長手方向が0.8cm、幅は0.4cmである。Ⅲ遺構面出土である。(756)は鉄製のピンのような形をしている。全長は5.8cmを測る。頭部は円錐の先端を切断したような形で、天端は径1.1cmの円形、他方は径1.3cmの円形である。これにつながる首部の断面は0.4×0.4cmで正方形である。Ⅰ遺構面出土である。(751)は鉄製の鏡前である。本体は長さ9.3cm、高さ3.1cm、厚み1.2cmを測る。本体には3本の棒状のものがついている。中央のものが最も太く、その断面は根元で0.9cm×0.5cmで長方形である。両側2本はやや細く、どちらも0.7cm×0.4cmである。このうち一方には板状の金物がついているが、完形ではない。3本とも途中でほぼ直角に曲がっている。Ⅲ遺構面出土である。(752)は銅製の銅金具である。T字を逆さまにし、中心で折り曲げ、左右を合せた形である。合わさった底部はそれぞれ0.3cmほど内側に折り曲げている。端部には4箇所の穴が開き、ピンなどを刺して本体と固定したと思われる。表面に紋様は見られない。先端の凹みは4箇所のうち3箇所は2つあるが、残りは1つしかなく、仕上げにばらつきがみられる。Ⅰ遺構面出土である。(760)は火打金である。最大長10.8cm、幅4.2cm、厚さ約0.3cmを測る。Ⅲ遺構面出土である。(761)は銅製の鐻である。中央部がくびれた六角形を呈す。約71gである。Ⅰ遺構面出土である。(763)は径1.2cmを測る金属製の鈴である。上部には紐などを通すための1つの穴があいた部品が付く。2つ穴があいた金属製の鈴が第51次調査で出土している。中に玉が入り、音が鳴る。Ⅲ遺構面出土である。(765)は鉄製の鉄である。最大長13.5cm、刃部6.0cmを測る。Ⅲ遺構面出土である。(766)は毛抜きである。半分欠損している。残存長は9.6cmである。Ⅰ遺構面出土である。(764)は銅製の菊歯で、紅皿やお歯黒のための皿として使用されていたと考えられる。口径5.6cm、器高2.6cmを測る。Ⅱ遺構面出土である。(762)は長径3.1cm、短径2.4cmを測る鉄製の資金具である。埋没中に押し潰されて変形した可能性がある。(767-769)は鉄製の小札である。(767)は頭部を斜めに切り、紐通し孔を13ヶ所有する本小札とよばれる。最大長6.6cm、幅約1.6cmを測る。(768)・(769)は頭部に半円形が2個並び、紐通し孔が14ヶ所有する伊予札と呼ばれる。Ⅰ遺構面出土である。(768)は最大長6.4cm、幅約2.1cmを測る。Ⅱ遺構面出土である。(769)は最大長6.3cm、幅約1.8cmを測る。Ⅲ遺構面出土である。(770)は最大長4.3cm、幅1.3cmを測る銅製の飾金具である。毛彫り髪や魚々子鬘で彫金しているが、直線が綺麗に繋がっていない点などの粗さが目立つ。Ⅰ遺構面出土である。(771)は長径3.9cm、短径2.1cmを測る切羽である。周囲を鬘で均等に刻み、整形している。Ⅰ遺構面出土である。

木製品 (772)は雪下駄で、長さ18.0cm、幅8.6cm、厚さ1.9cmを測る。Ⅰ遺構面出土である。(773)長さ22.3cm、最大幅8.4cmを測る連歯下駄である。Ⅰ遺構面出土である。(775)も連歯下駄である。長さ21.6cm、幅11.1cmを測る。「眼」と呼ばれる3つの穴を穿つが、鼻緒を通さない2つの眼は径約0.4cmの穴を重複して穿って、鼻緒を通す穴よりも大きく穿孔している。Ⅲ遺構面出土である。(774)は草履下駄と考えられるものである。長さ21.6cm、幅4.6cm、厚さ1.8cmを測る。中央より少し外れた部分に「挟り」が施されている。両端に片面は径約1cm、反対面は径約0.7cmになる穴をもち、内壁が揚げている。Ⅲ遺構面出土である。(776)は取手である。蓋や建具の取手と考えられる。取り付けるための釘が打たれている。Ⅰ遺構面出土である。(777)は内外面に朱漆で円文が描かれる黒漆碗である。高台径8.1cmを測る。口縁部は欠損している。Ⅱ遺構面出土である。(778)は高台径7.4cmを測る黒漆碗である。内外

面に亀甲文が描かれる。Ⅲ遺構面出土である。(779)は口径16.3cm、高台径7.7cm、器高8.2cmを測る黒漆碗である。内外面に文様は確認できない。Ⅲ遺構面出土である。(780)は口径15.5cm、高台径8.1cm、器高9.3cmである。内面に文様が確認できるが、明確に残らない。Ⅲ遺構面出土である。(781)は曲物の蓋である。最大径10.2cm、厚さ0.35cmである。中心より約3cm外に蓋の摘みを1箇所有する。Ⅱ遺構面出土である。(782)は木筒である。残存長15.1cm、最大幅2.3cm、最大厚0.6cmである。付札と考えられ、「□おが□□□□□せん」と墨書がある。Ⅲ遺構面出土である。(783)は刀剣の鞘である。残存長15.3cm、幅3.2cmを測る。刀剣が収まる幅は2.1cmである。Ⅲ遺構面出土である。(784)は梳櫛である。黒ずんだ部分もあるが漆を塗布した痕跡は見られない。Ⅲ遺構面出土である。(785)は用途不明の木製品である。(284)・(285)は箸である。(786)は長さ29.7cm、(787)は長さ25.6cmを測る。Ⅲ遺構面出土である。

#### その他出土地の遺物 (第58図、PL.70)

ここでは、排土や整備作業中に確認された遺物を掲載する。

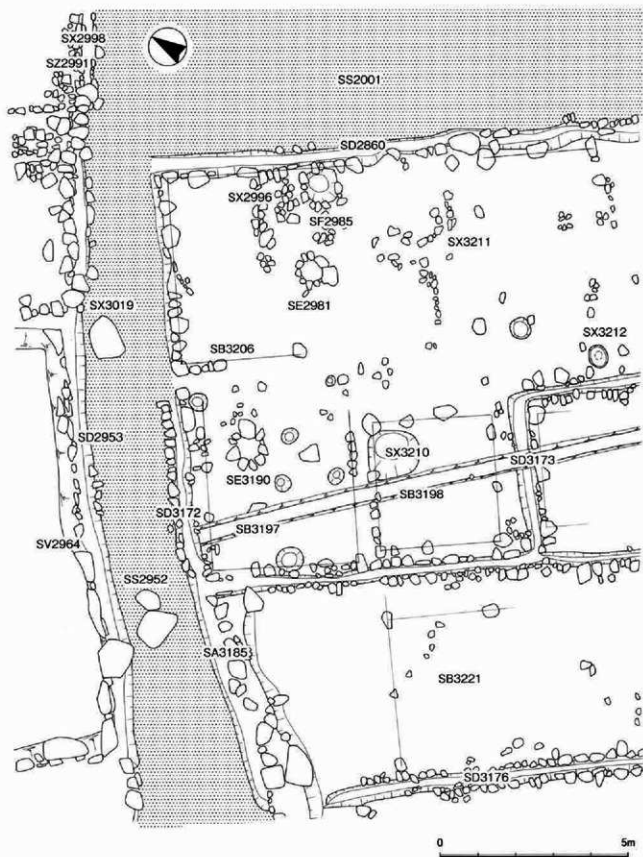
**瀬戸・美濃焼** (788)は口径12.0cm、器高6.6cmを測る鉄釉碗である。内面と外面体部に鉄釉を施し、高台部分に錆釉を施す。体部下位から高台にかけて軸の垂れが確認できる。

**金属製品** (789)は火打金である。最大長10.0cm、厚さ0.35cmを測る。(790)は銀付金具である。(791)は長径3.6cm、短径2.1cmを測る切羽である。周囲を鑿で均等に刻み、整形している。(792)は小柄である。間層文が彫金される。全長9.1cm、幅1.5cmを測る。

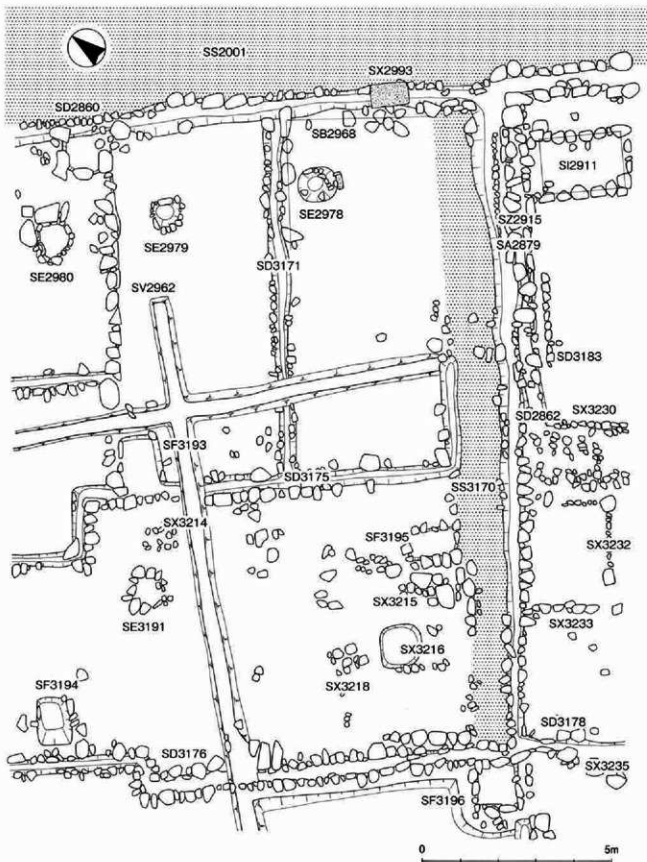
#### 註

- (1) 『特別史跡 一乗谷朝倉氏遺跡XⅦ 一昭和60年度発掘調査整備事業概報―』福井県立朝倉氏遺跡資料館1986年発行では検出した遺構に伴う遺物群をグループⅠ・Ⅱ・Ⅲとしているが、本報告ではⅠ・Ⅱ・Ⅲ遺構面出土として、対応するものである。
- (2) 青木豊昭「経濠金発見に寄せて 戦国大名朝倉氏と黄金文化」『越前若狭 地域史の謎に挑む』2006年発行。
- (3) これまでに上記の「概報」や月輪泰「朝倉氏遺跡出土の銅銭について」『朝倉氏遺跡資料館紀要1989』福井県立朝倉氏遺跡資料館1990年発行、水井久美男編「中世の出土銭 一出土銭の調査と分類―」兵庫県埋蔵線調査会1994年発行、岩田隆「一乗谷の消費と流通」『戦国大名朝倉氏と一乗谷』高志書院2002年発行などで研究報告されている。
- (4) 『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告Ⅱ 第10・11次、第54次調査』福井県立朝倉氏遺跡資料館1988年発行p28の中で、用途不明としながらも記述の推定をしている。

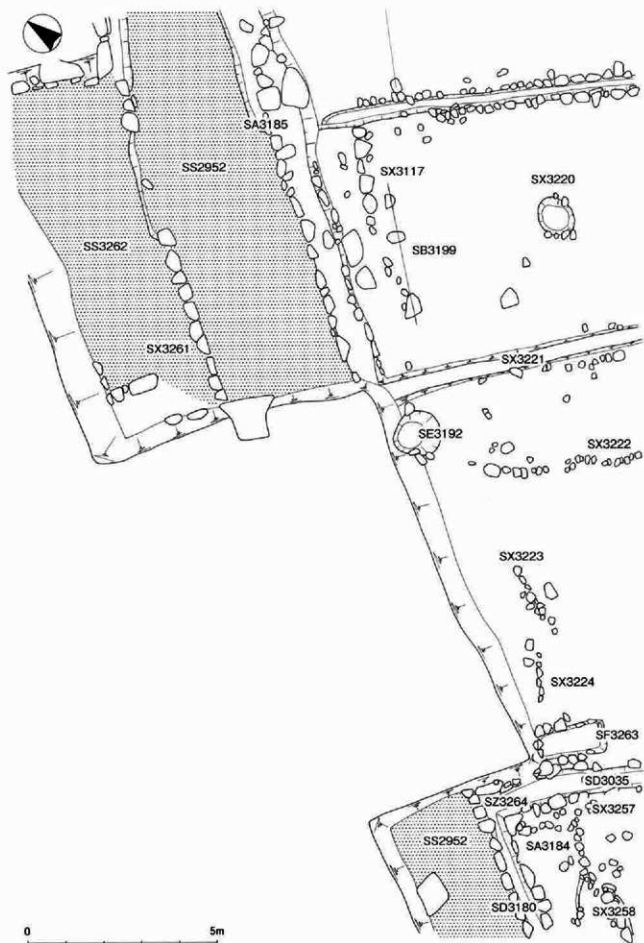
第33図 第52次調査遺構詳細図(1)



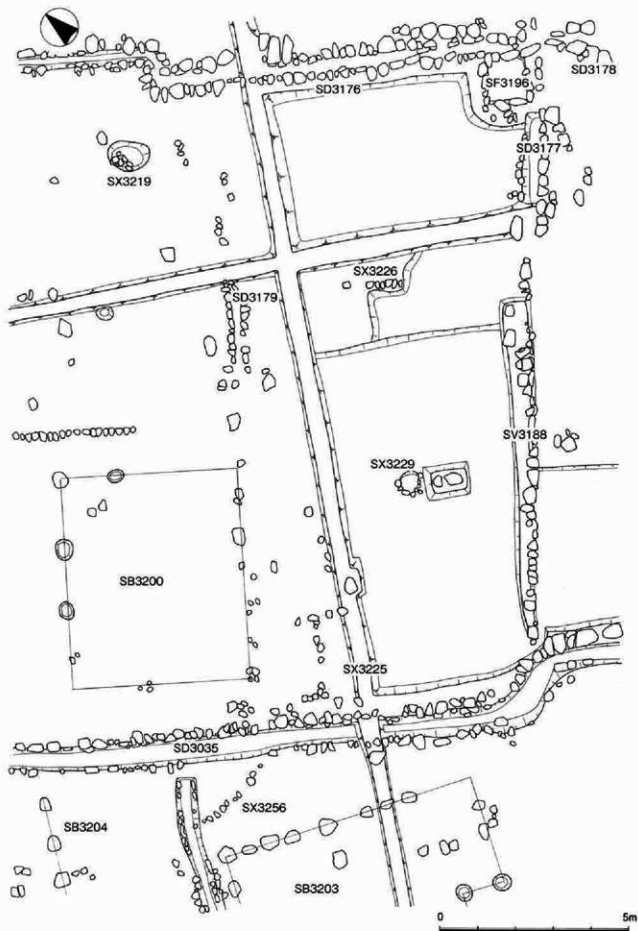
第34図 第52次調査遺構詳細図(2)



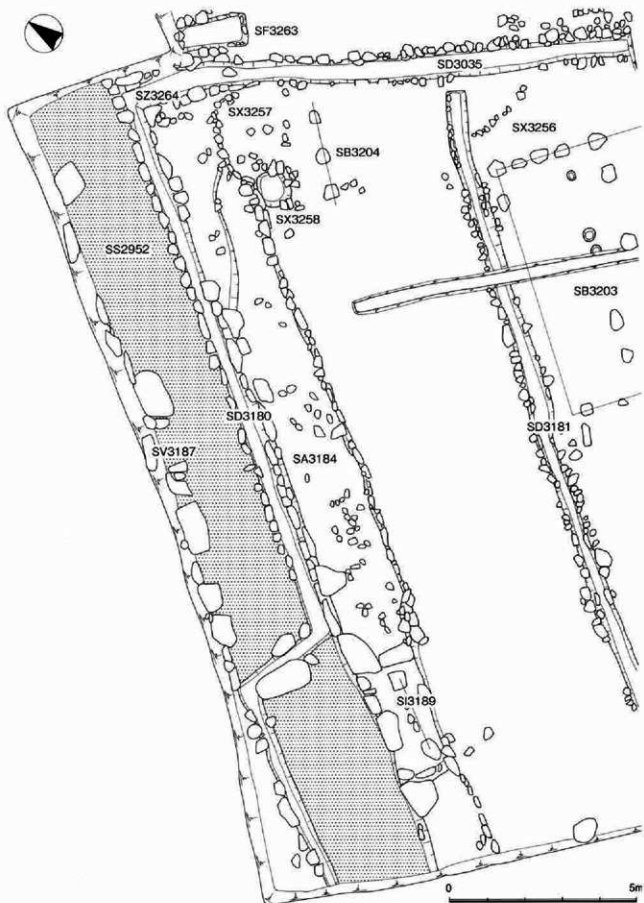
第35図 第52次調査遺構詳細図(3)



第36図 第52次調査遺構詳細図(4)

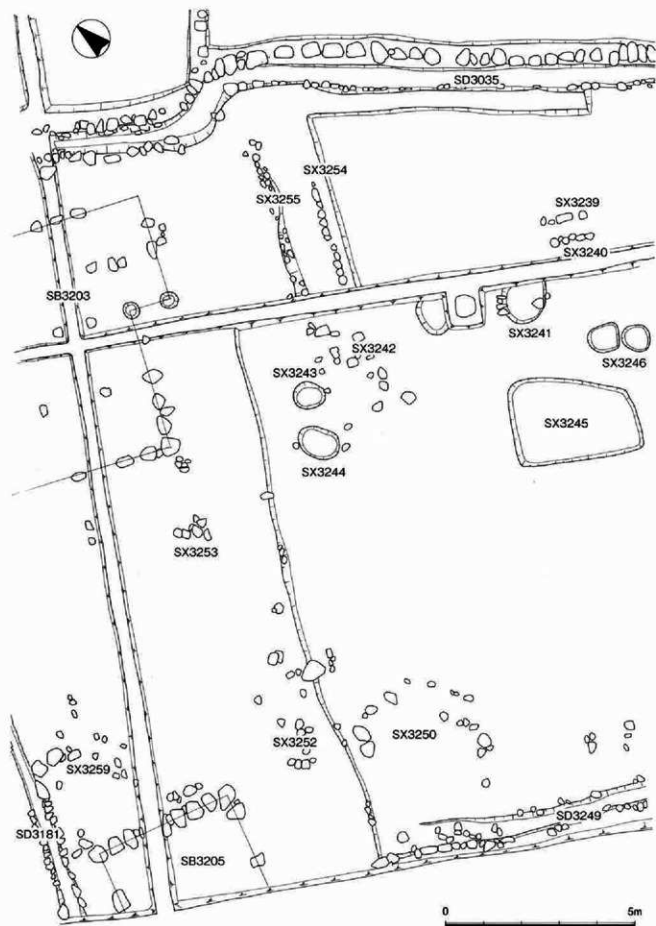


第37図 第52次調査遺構詳細図(5)





第38図 第52次調査遺構詳細図(6)





全景(南から)



北半(東から)



区画52-1・2  
(東から)

区画52-1  
(北から)区画52-2  
(北から)区画52-3  
(北から)



区画52-4  
(北から)



区画52-3  
井戸SE2980  
SX2995  
(北から)



区画52-4  
石積施設SF2985  
井戸SE2931  
石敷SX2996  
(北から)



第52次調査区

区画52-5  
(西から)区画52-5  
井戸SE3190区画52-6  
(西から)

区画52-6  
(東から)



区画52-6  
石積施設SF3195  
溝SD3174  
(東から)



区画52-6  
井戸SE3191  
石積施設SF3194





第52次調査区

区画52-7北半  
〔東から〕区画52-7南半  
〔東から〕区画52-7  
石積施設SF3263  
溝SD3035

第52次調査区



区画52-7  
石積施設SF3196(東から)  
井戸SE3192(東から)



区画52-8全景  
(西から)



区画52-8北半(東から)  
礎石建物SB3203



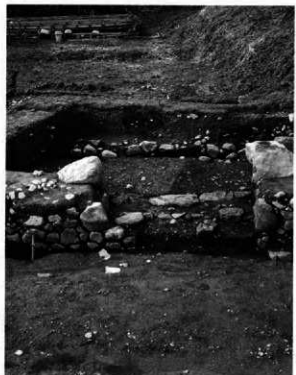


第52次調査区

区画52-8西半(南から)  
礎石建物S83205  
礎石建物S83203  
溝SD3181



区画52-8  
土層基礎SA3184  
(東から)



区画52-8  
門SI3189(西から)  
門SI3189(東から)

第52次調査区



区画52-8  
溝SD3181(北から)  
SX3257(東から)



道路  
SS2952(北から)  
SS2952北半(北から)



道路SS2952  
溝SD3172  
土掘基礎SA3185  
(北から)  
道路SS3170  
溝SD2862  
(北から)





第52次調査区

溝SD3176(東から)  
溝SD3176(南から)



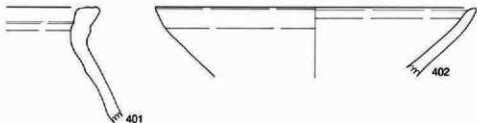
溝SD3035(西から)  
溝SD3035(東から)



溝SD3171(北から)

第39図 第52次調査出土遺物(1)

SS2952



SS3262

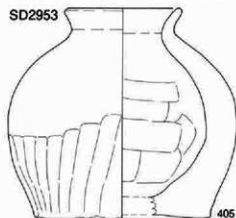


SD3172

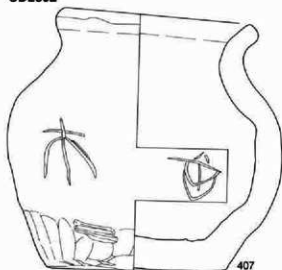


0 20cm

SD2953



SD2862



SD3172



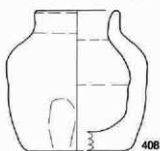
409



410



411



408



412

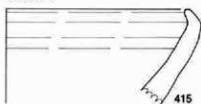


413

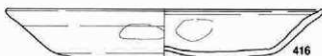


414

SD3171



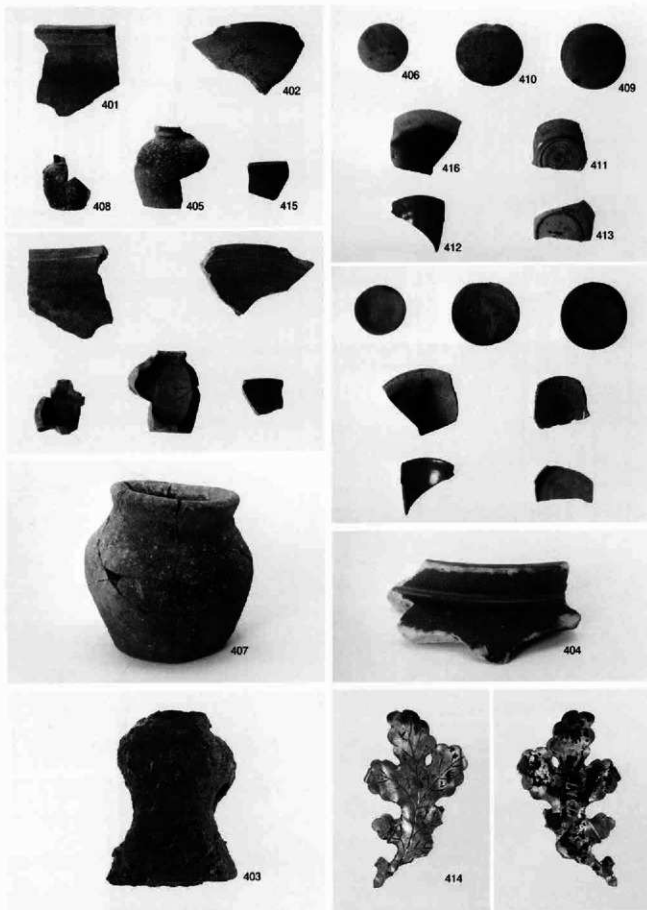
415



416

0 10cm

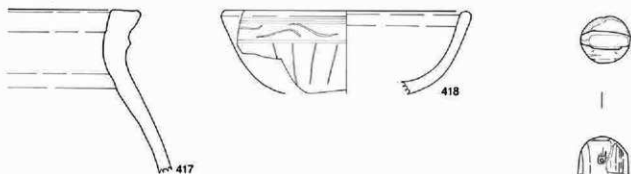
越前焼亮401 窓405・407・408 鉢402・415 土師質土器皿406・409・410・416 瓦質土器風炉404 灰輪皿411 青磁碗412  
白磁皿413 金属製品鉢403 飾金具414



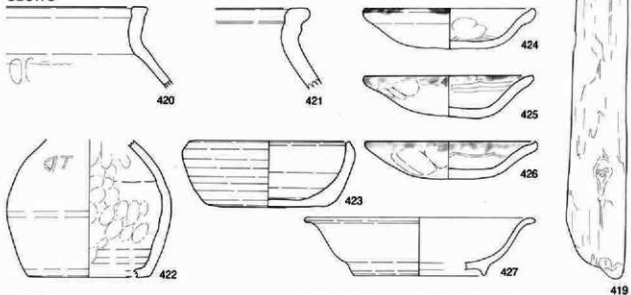
SS2952 越前焼甕401 鉢402 SS3262 金属製品鉢403 SD3172 瓦質土器風車404 土師質土器皿406  
 SS2953 越前焼壺405 SS2962 越前焼壺407 壺408 土師質土器皿409・410 灰輪皿411 青磁碗412 白磁皿413  
 金属製品俵金具414 SD3171 越前焼鉢415 土師質土器皿416

第40図 第52次調査出土遺物 (2)

SD3175



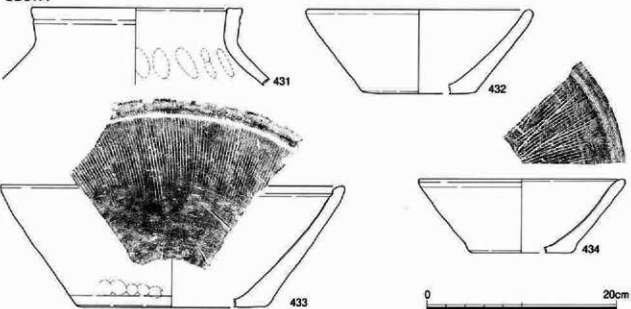
SD3176



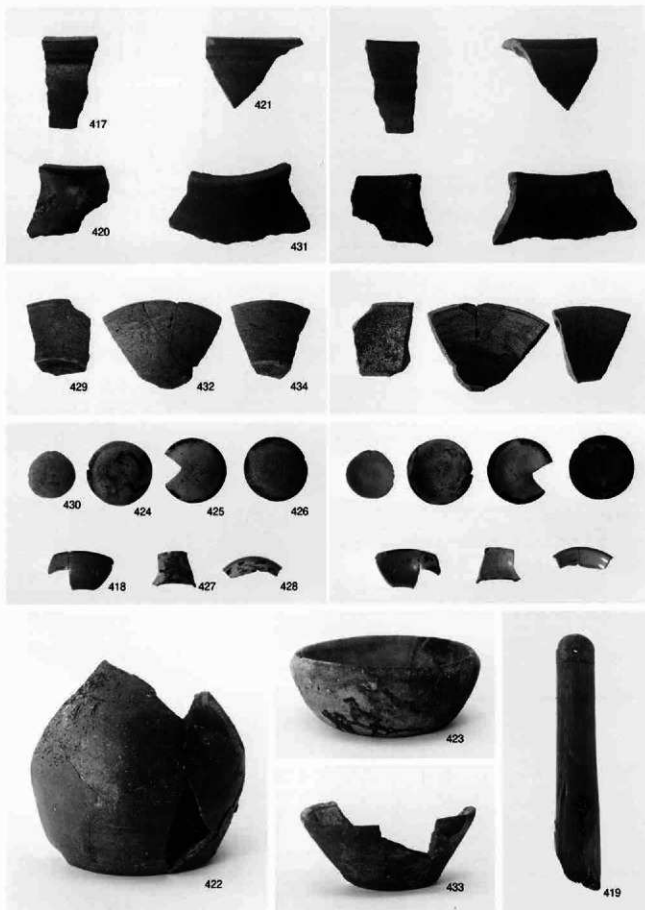
SD3177



SD3177



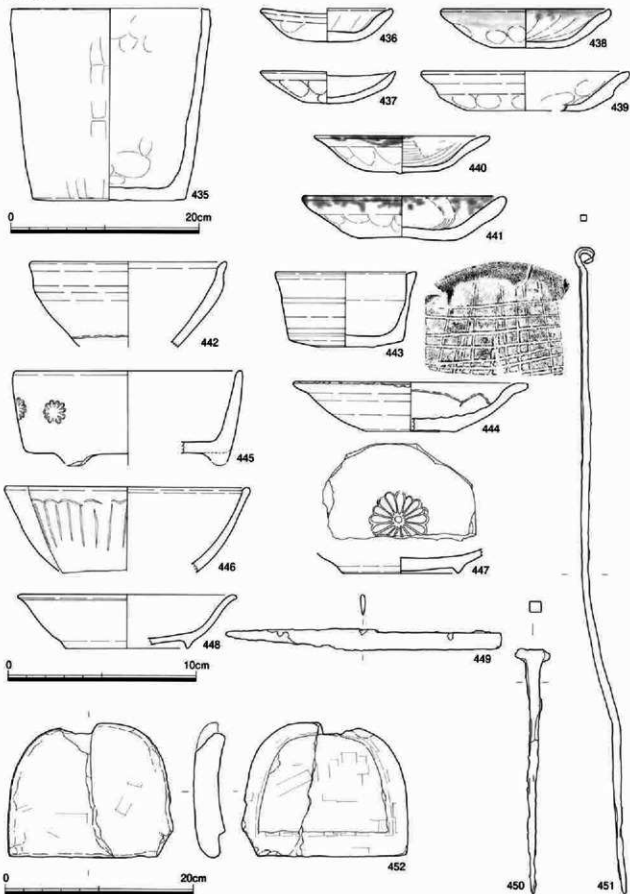
越前焼土417・420・421・431 甕422 鉢423・429・432 楕鉢433・434 土師質土器皿424～426・430 青磁碗418 白磁皿427  
染付皿428 木製品漆粉木419



SD3175 越前焼堿417 青磁碗418 木製品播磨木419 SD3176 越前焼堿420・421 壺422 鉢423  
土師質土器皿424～426 白磁皿427 染付皿428 SD3177 越前焼鉢429 土師質土器皿430 SD3035 越前焼堿431  
鉢432 播鉢433・434

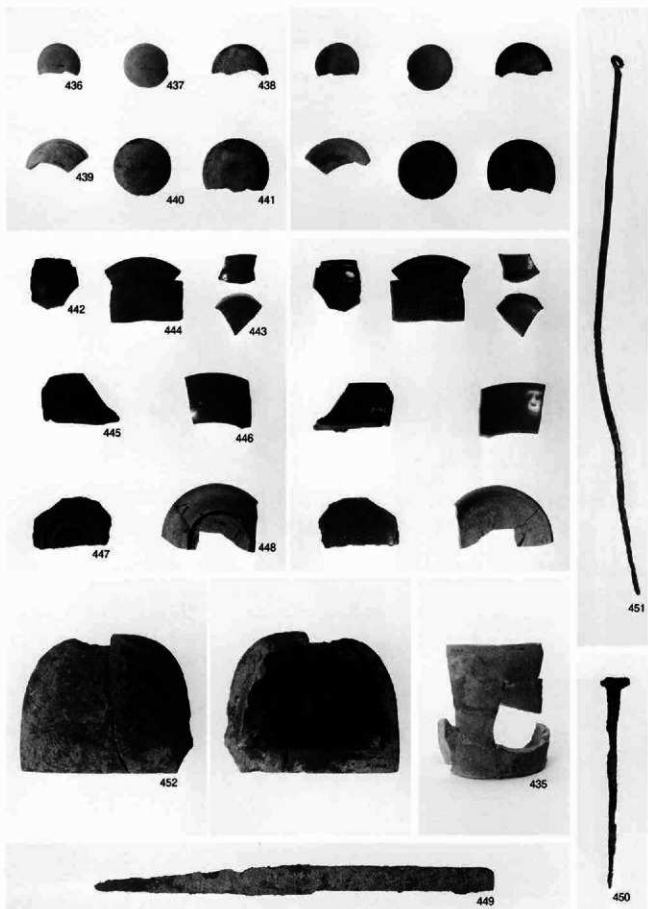
第41図 第52次調査出土遺物 (3)

SD3035



越前焼桶435 土師質土器皿436~441 鉄輪442 灰輪香炉443 銅皿444 瓦質土器香炉445 青磁碗446 皿447  
白磁皿448 金属製品刀子449 釘450 火箸451 石製品バンドロ蓋452

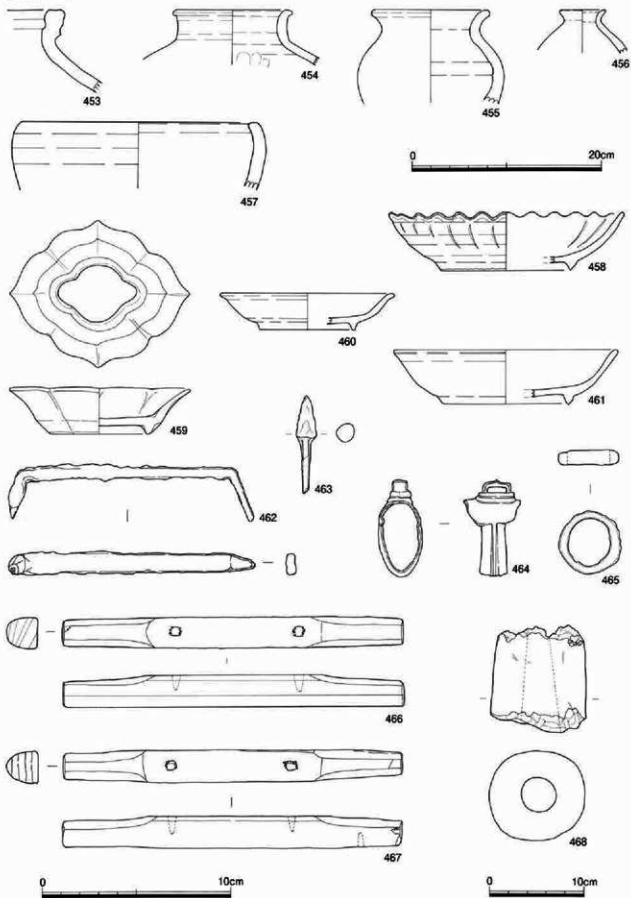




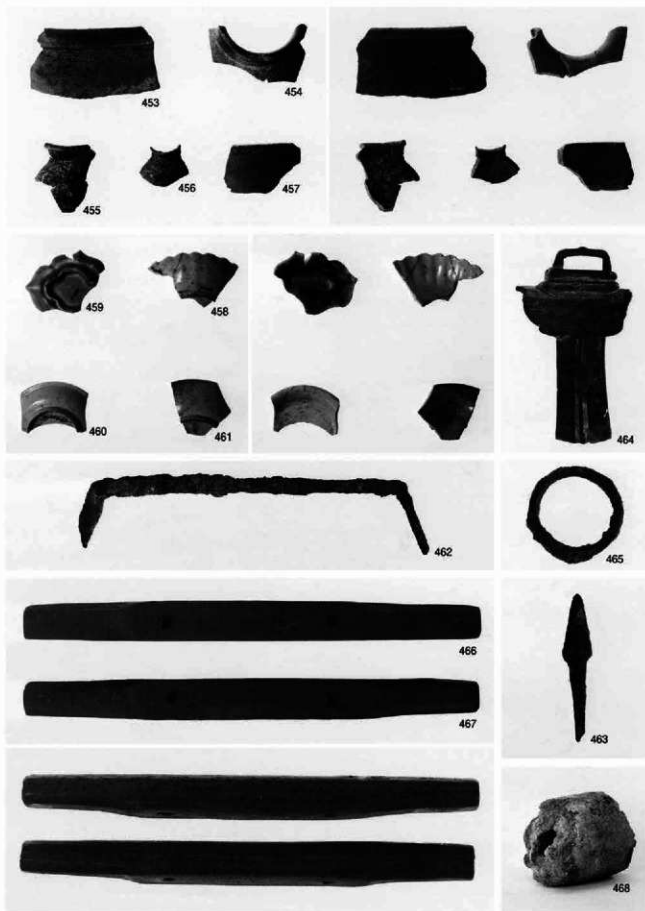
SD3035 越前焼桶 (435) 土師質土器皿436~441 鉄輪碗442 灰釉香炉443 銅皿444 瓦質土器香炉445 青磁碗446  
 皿447 白磁皿448 金属製品刀子449 釘450 火箸451 石製品バンドコ蓋452

第42図 第52次調査出土遺物(4)

区画52-1



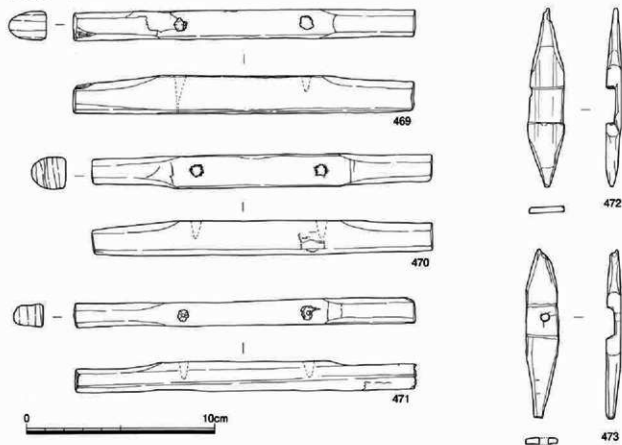
越前焼売453 壺454-456 針457 青磁皿459 白磁皿458-460-461 金属製品脱462 鉄線463 足金物464 貴金具465  
木製品糸車466・467 その他輪の羽I468



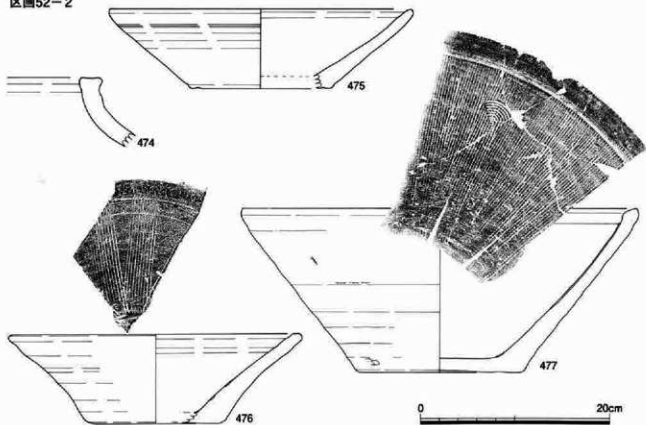
区画52-1 越前焼甕453 甕454~456 鉢457 青磁皿459 白磁皿458・460・461 金属製品匙462 鉄器463 足金物464  
 貴金具465 木製品糸車466・467 その他輪の羽口468

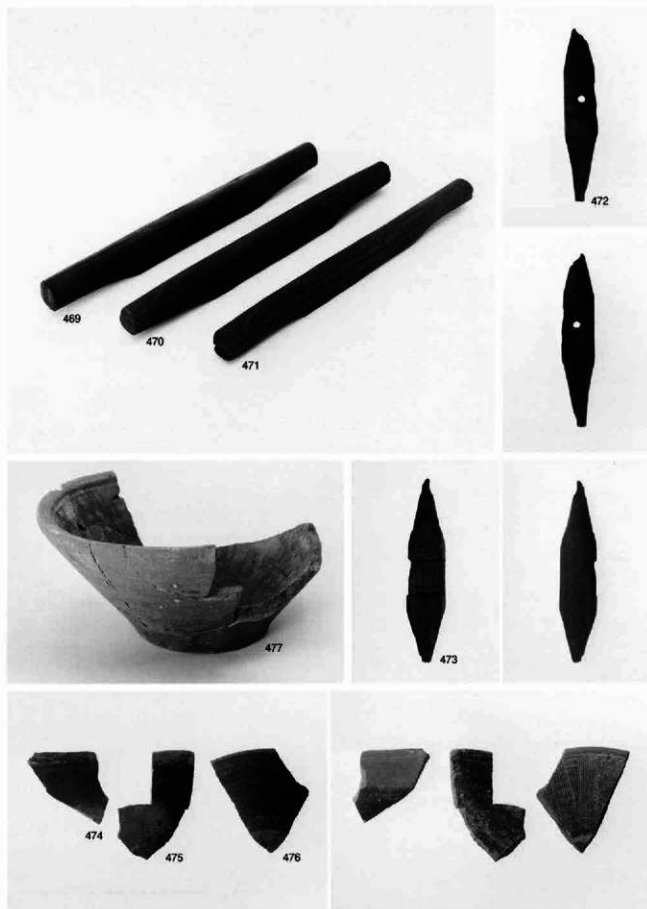
第43回 第52次調査出土遺物 (5)

区画52-1



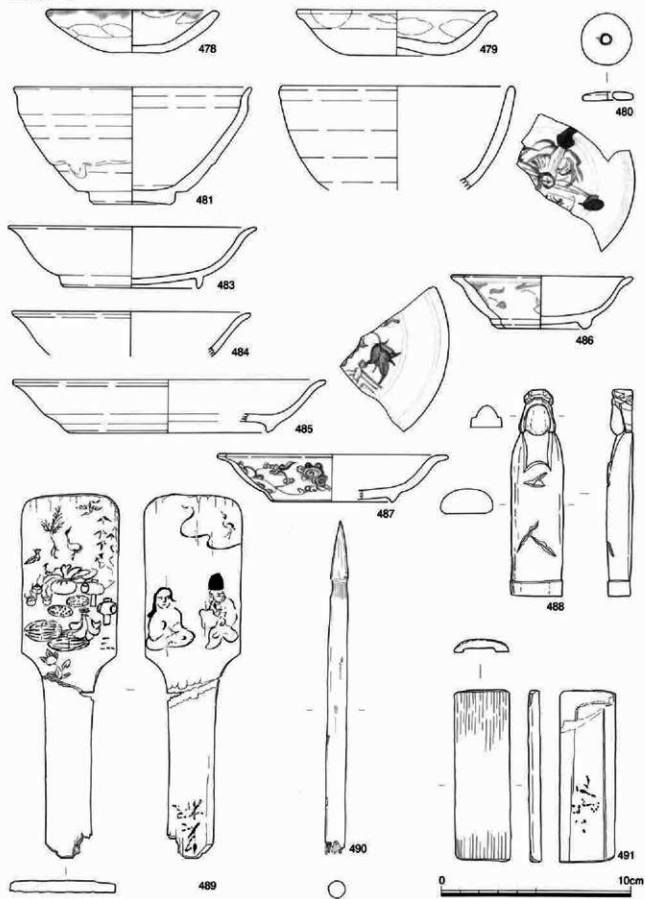
区画52-2



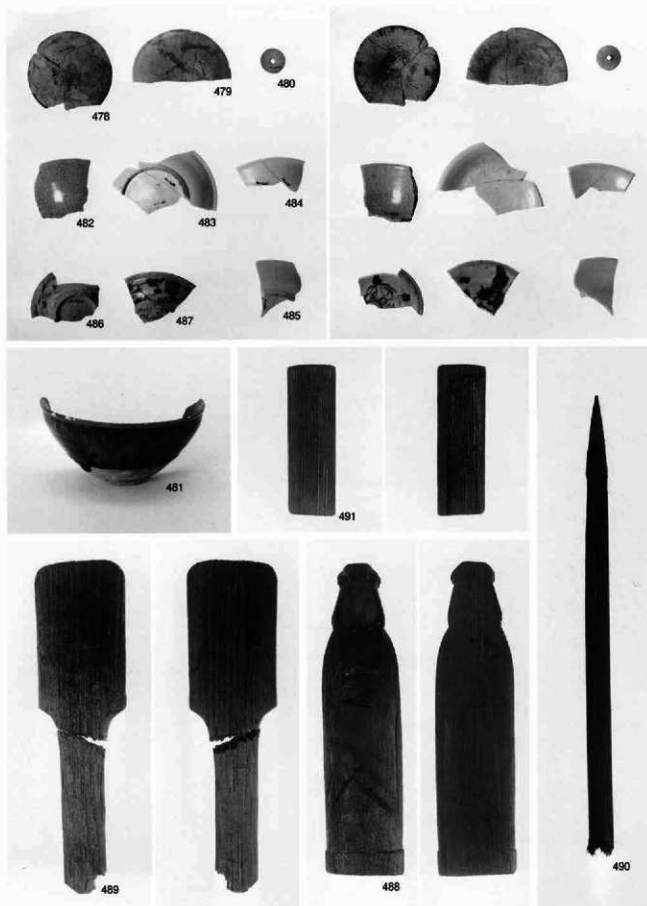


区画52-1 木製品糸車469~473 柱793 区画52-2 越前焼壳474 鉢475 摺鉢476・477

区画52-2



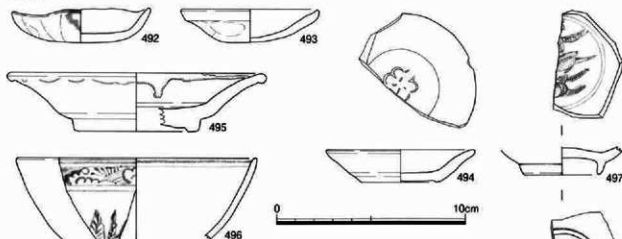
土師質土器皿478・479 灯心押480 鉄輪碗481 灰輪碗482 白磁皿483~485 染付皿486・487 木製品神像488 杓子489  
棒状製品490 箱491



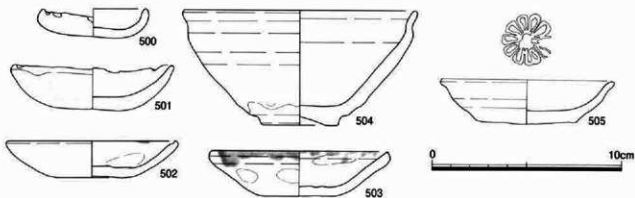
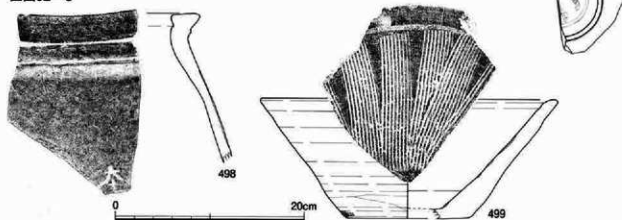
区画52-2 土師質土器皿478-479 灯心押480 鉄軸碗481 灰軸碗482 白磁皿483-485 染付皿486-487  
木製品神像488 杓子489 棒状製品490 鞘491

第45图 第52次調査出土遺物 (7)

区画52-2



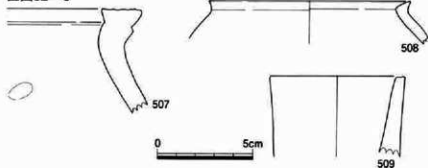
区画52-3



区画52-4

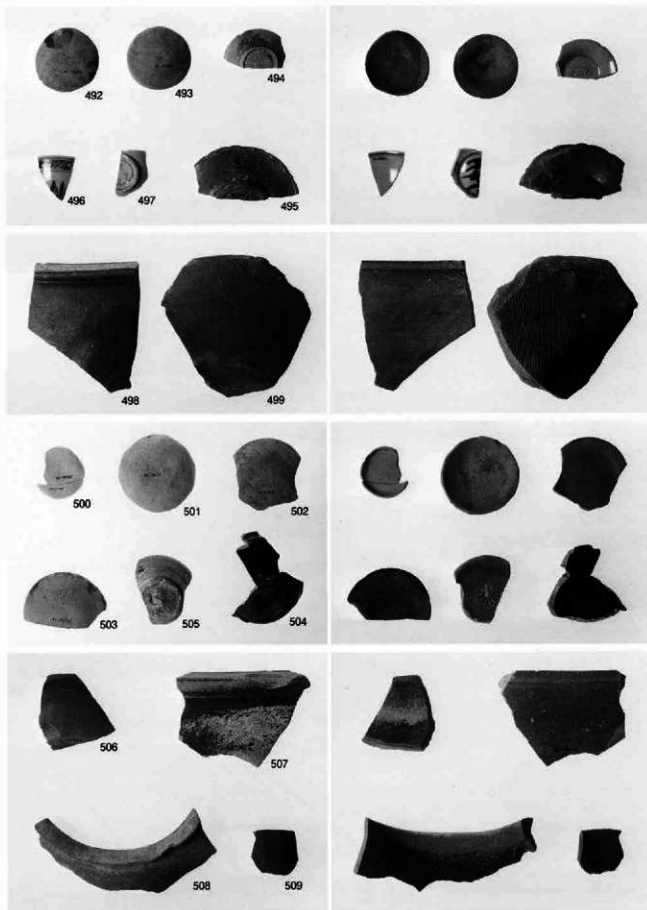


区画52-5



越前焼瓦498・507 窓508 鉢506 摺鉢499 掛花生509 土師質土器皿492・493・500～503 鉄釉碗504 灰釉皿494・505  
青磁枝花皿495 染付碗496・497

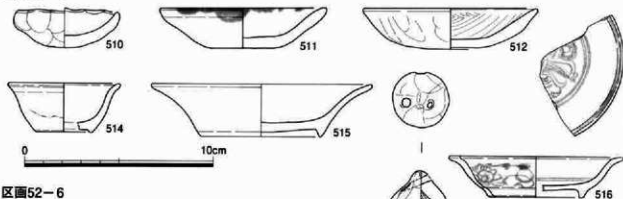




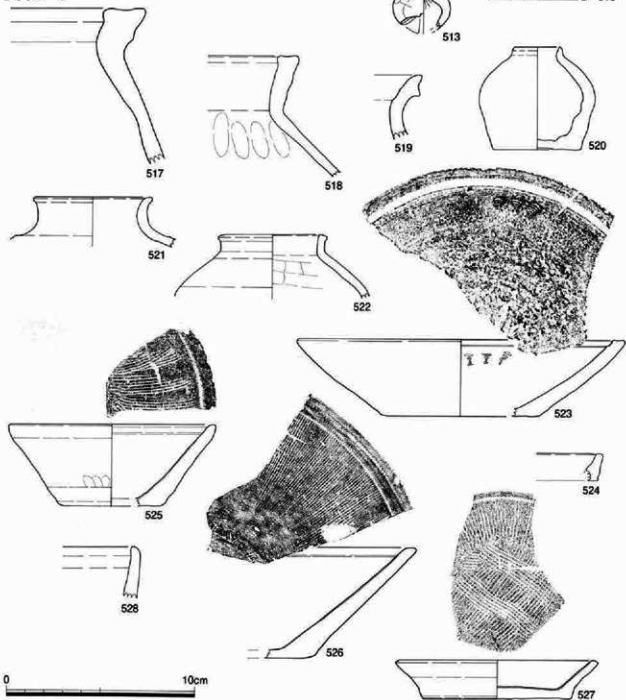
SF3193 土師質土器Ⅲ492-493 灰釉Ⅲ494 青磁後花Ⅲ495 染付碗496-497 区画52-3 越前焼甕498 摺鉢499  
 土師質土器Ⅲ500-503 鉄釉碗504 灰釉Ⅲ505 区画52-4 越前焼鉢506 区画52-5 越前焼甕507 甕508 掛花生509

第46图 第52次調査出土遺物 (8)

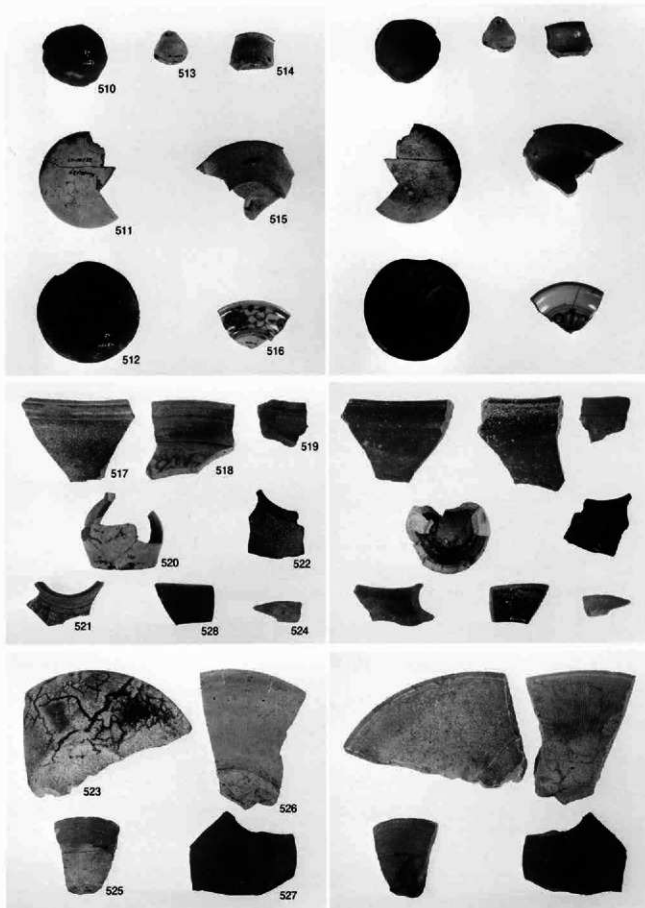
区画52-5



区画52-6



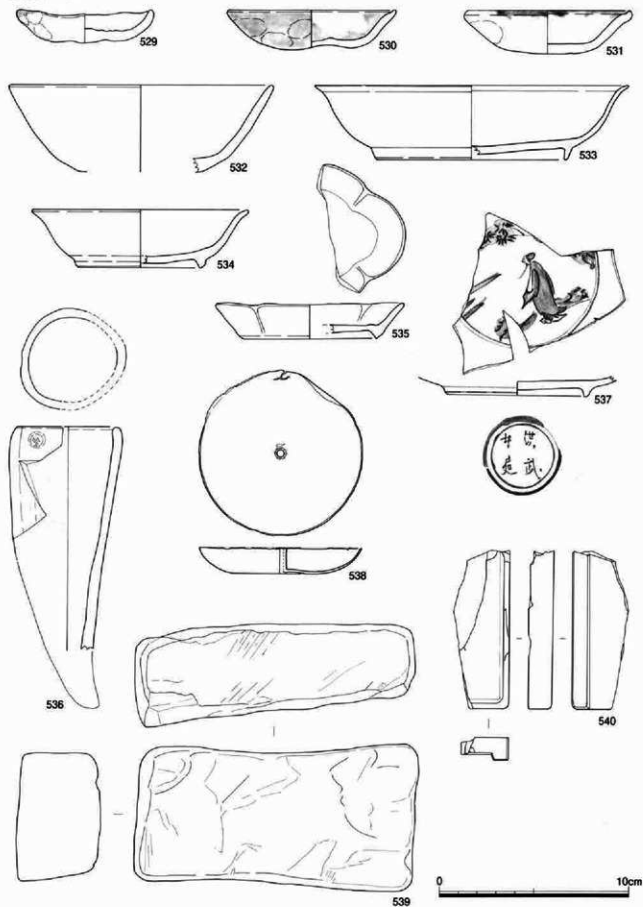
土師質土器Ⅲ510~512 土鈴513 灰輪杯514 白磁Ⅲ515 染付Ⅲ516 越前焼Ⅴ517~519 小壺520 壺521・522  
鉢523・524 搦鉢525~527 火桶(528)



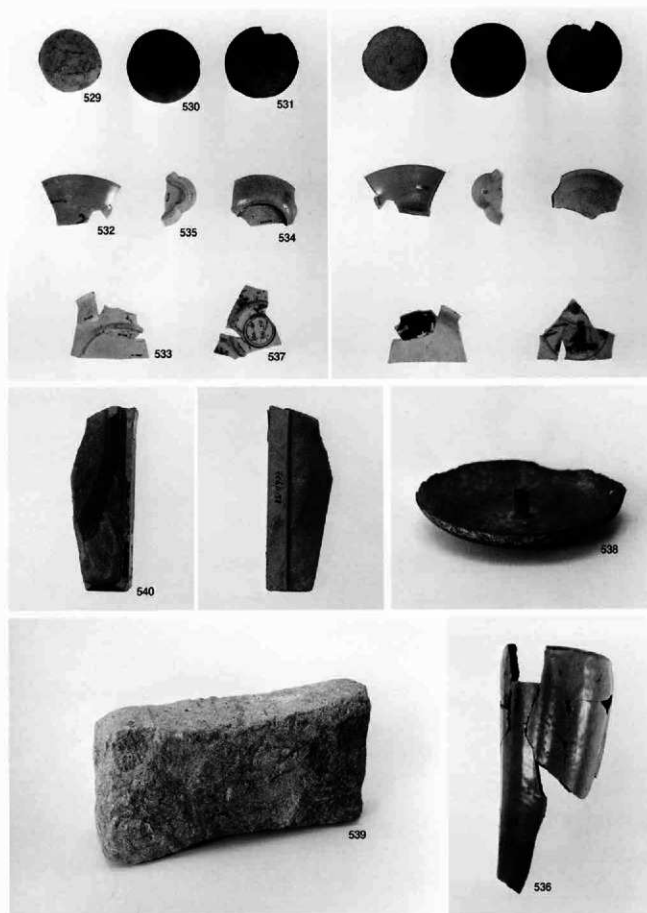
区画52-5 土師質土器皿510~512 土鈴513 灰釉杯514 白磁皿515 染付皿516  
 区画52-6 越前焼灰517~519 小壺520 壺521・522 鉢523・524 播鉢525~527 火桶(528)

第47図 第52次調査出土遺物 (9)

区画52-6



土師質土器皿529-531 青磁碗532 白磁皿533-535 角形掛花生536 染付皿537 金属製品燗台538 石製品砥石539 硯540



区画52-6 土師質土器皿529~531 青磁碗532 白磁皿533~535 角形掛花生536 染付皿537 金屬製品濁台538  
石製品砥石539 硯540

第48图 第52次調査出土遺物 (10)

区画52-6 SE3191



SE3196



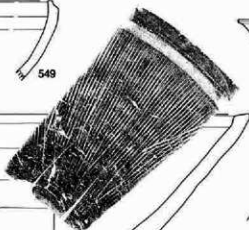
SE3191



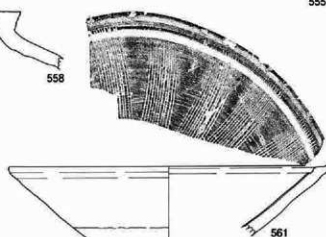
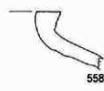
SE3139



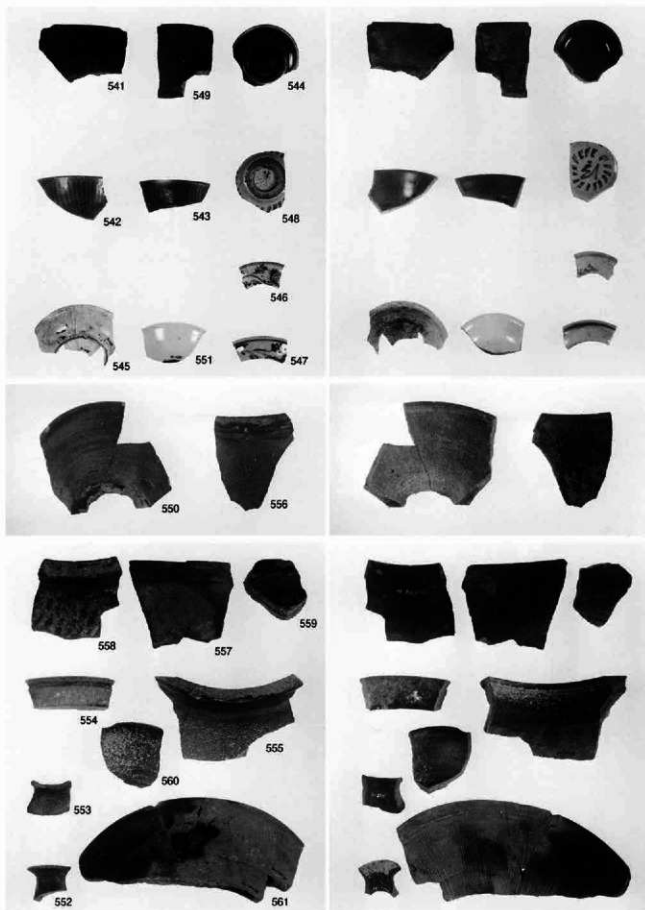
SF3194



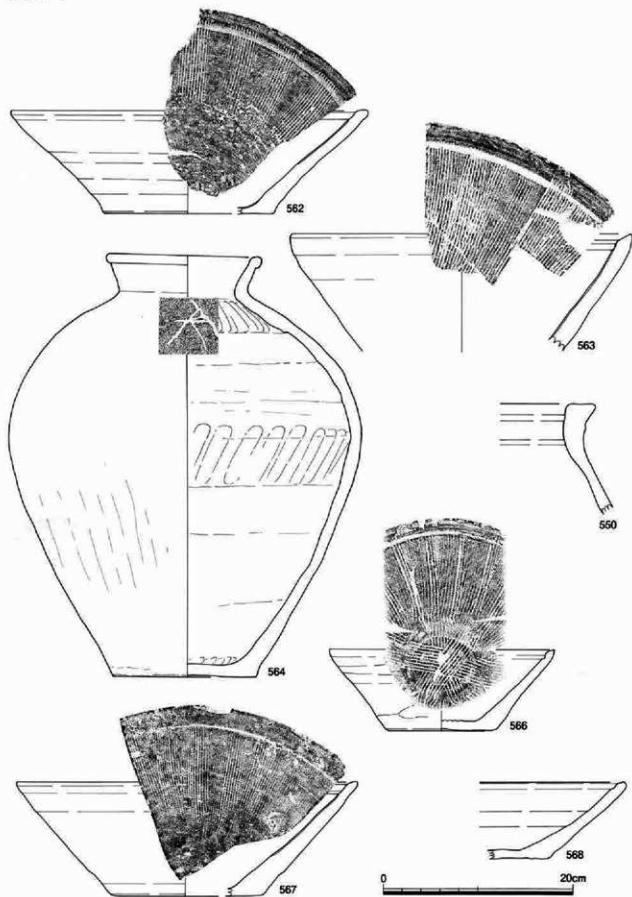
区画52-7



越前焼美555-557-559 密552-554-558 襦鉢561 鉢541-549-560 搦鉢550 青磁碗542・543 皿544  
白磁皿545-551 染付皿546-548

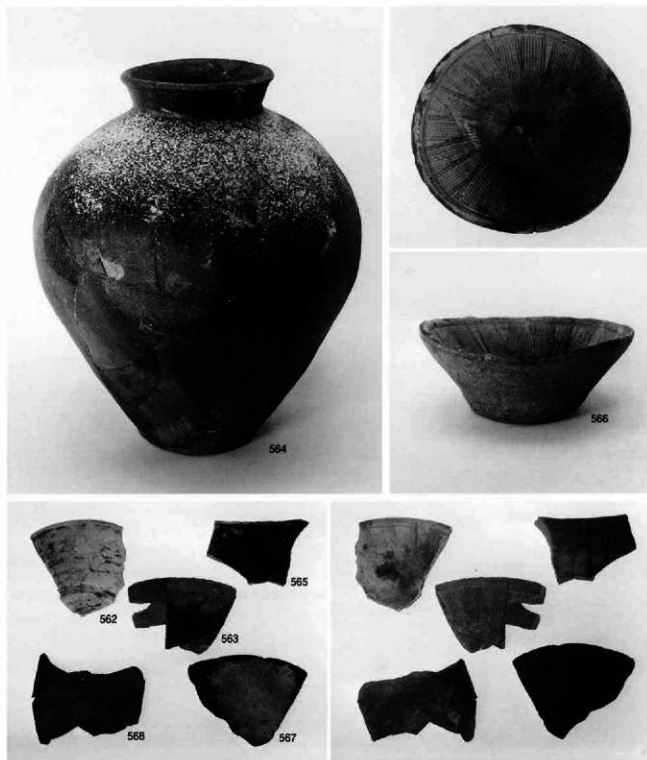


SE3191 越前焼鉢541 青磁碗542・543 SE3196 青磁皿544 白磁皿545 SE3139 染付皿546~548  
 SF3194 越前焼鉢549 摺鉢550 白磁皿551 区画52-7 越前焼甕555~557・559 壺552~554・558 鉢560 摺鉢561



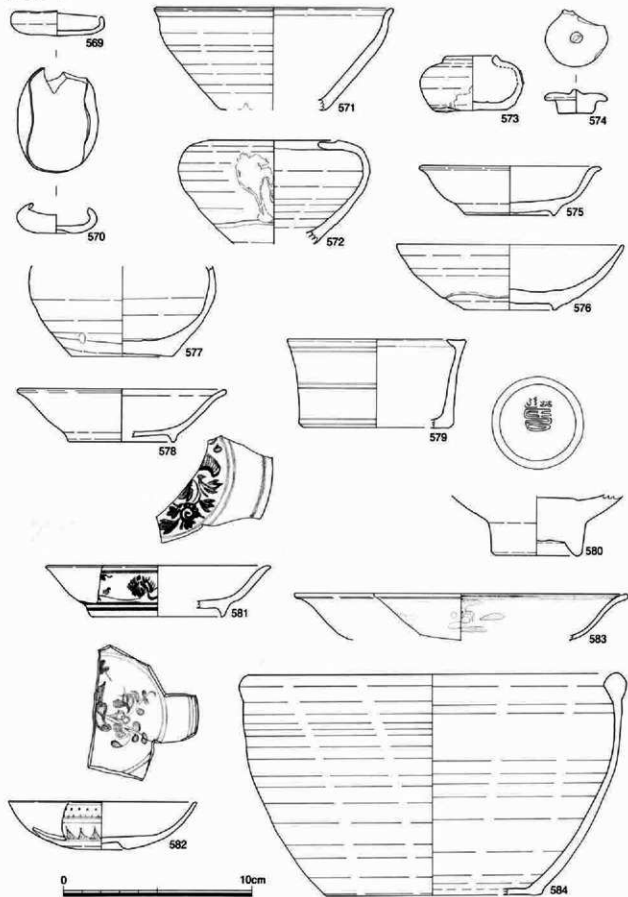
越前鏡甕565 甕564 播鉢562・563・566・567 鉢568



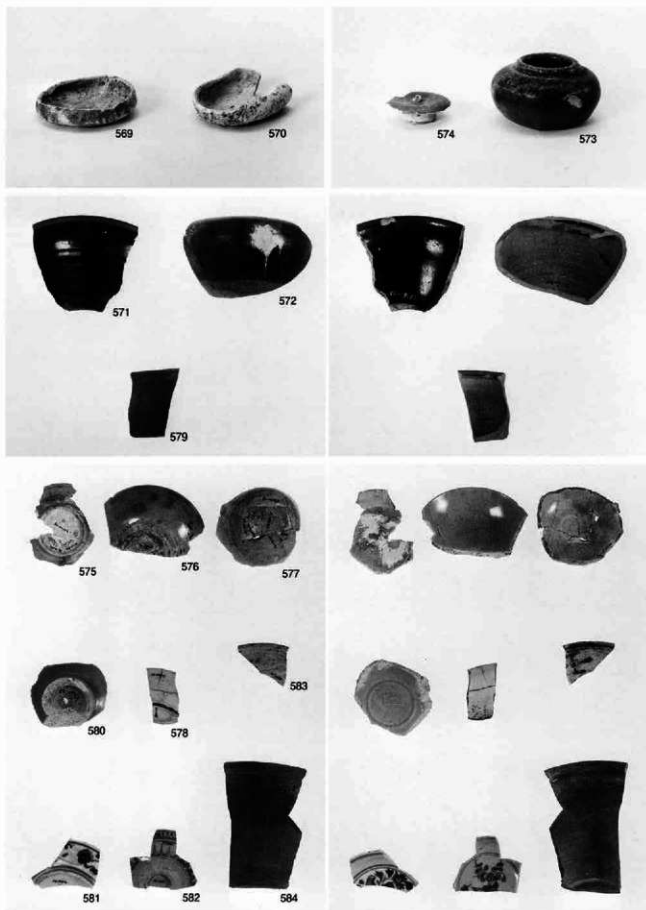


区画52-7 越前焼丸565 壺564 指鉢562・563・566・567 鉢568

区画52-7



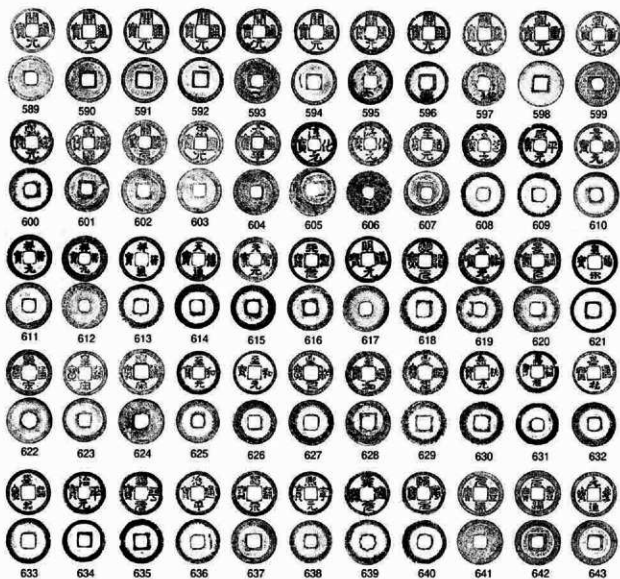
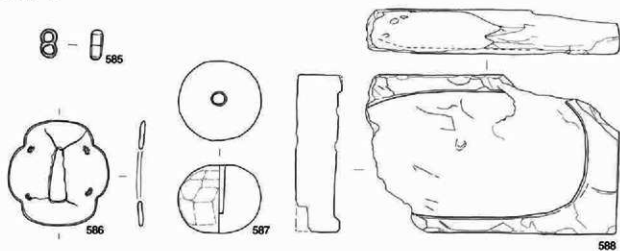
土師質土器皿569-570 鉄輪571 窓572 小窓573 蓋574 灰輪香炉579 青磁皿575-576 碗580 窓577 白磁皿578  
 染付皿581-582 赤絵皿583 朝鮮製陶磁器鉢584



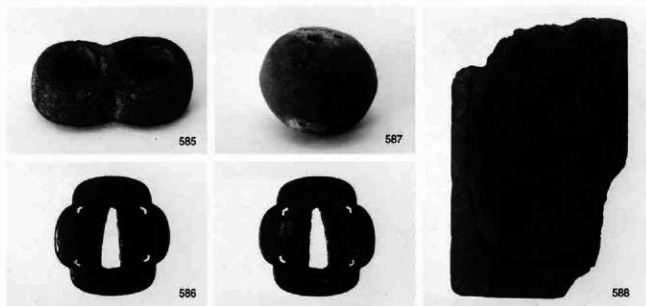
区画52-7 土師質土器Ⅲ569-570 鉄釉碗571 甕572 小壺573 蓋574 灰釉香炉579 青磁Ⅲ575-576 碗580 甕577  
白磁Ⅲ578 染付Ⅲ581-582 赤繪Ⅲ583 朝鮮製陶磁器鉢584

第51図-1 第52次調査出土遺物 (13)

区画52-7

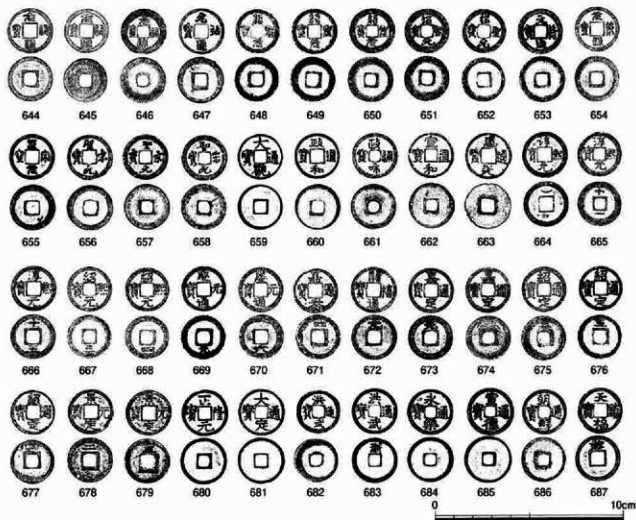


0 10cm



区画52-7 金属製品 貝粒585 切羽586 銭貨589~687 石製品 球状石製品587 硯588

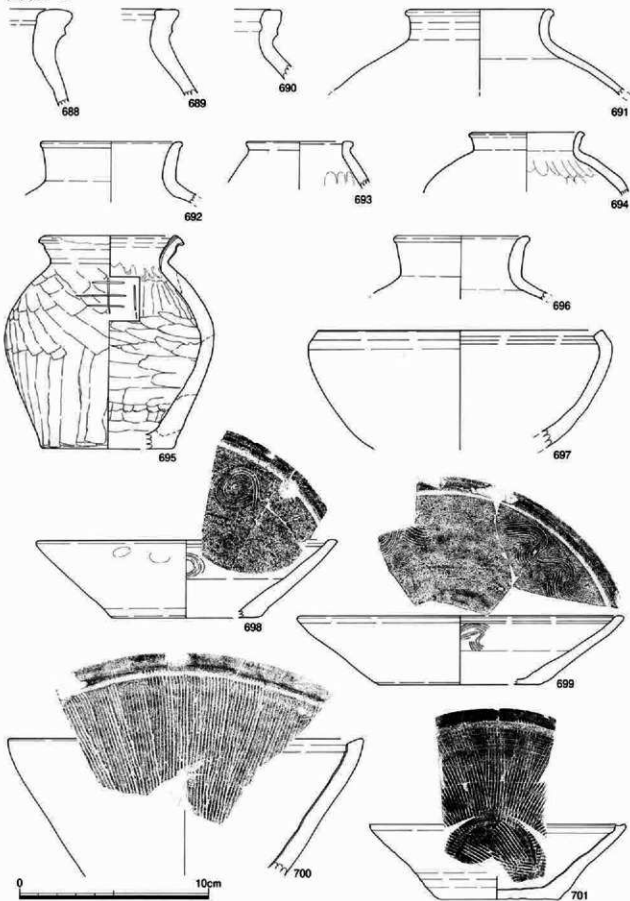
第51図-2 第52次調査出土遺物 (13)



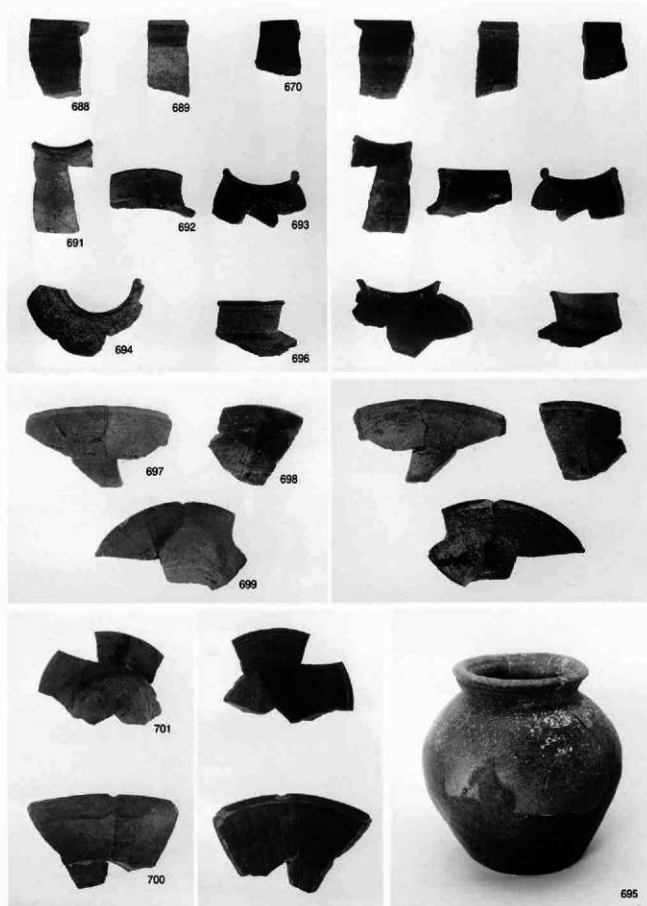
金属製品 銭貨644~687

第52图 第52次調査出土遺物 (14)

区画52-8



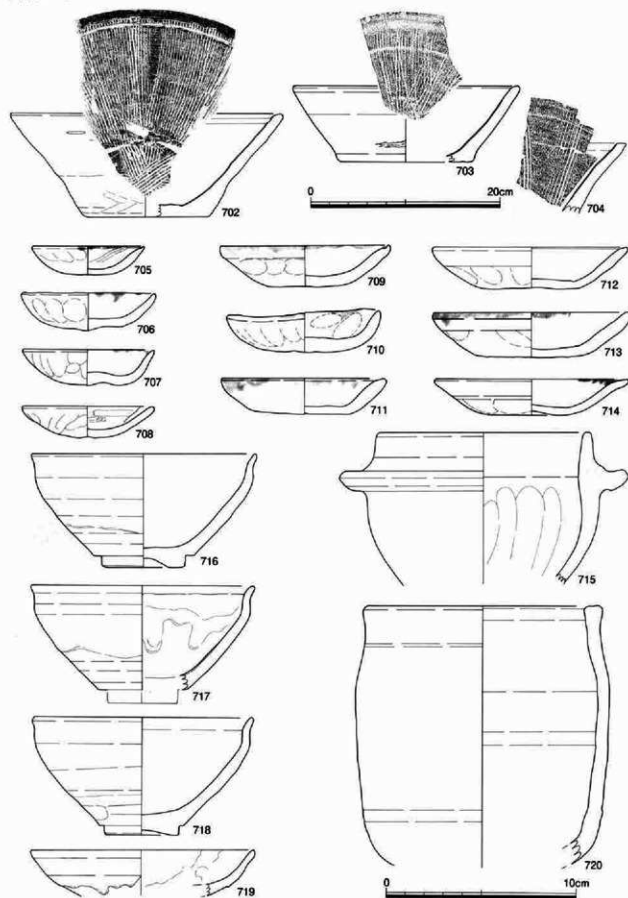
越前焼堯688~690 壺691~696 鉢697~699 摺鉢700・701



区画52-8 越前焼丸688~690 壺691~696 鉢697~699 播鉢700-701

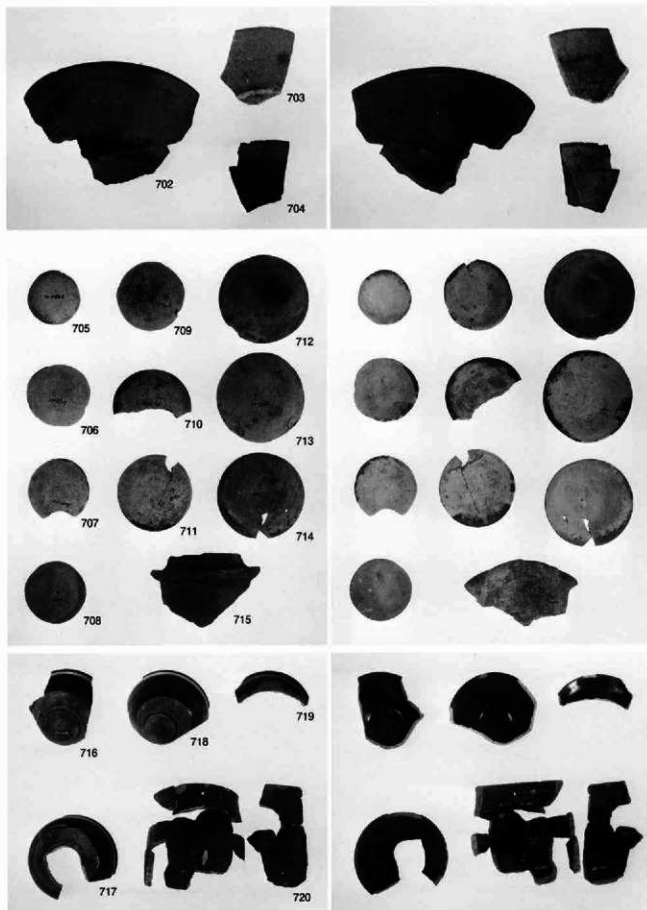
第53图 第52次調査出土遺物 (15)

区画52-8



越前焼杯鉢702~704 土師質土器皿705~714 羽釜715 鉄輪碗716~718 鉄輪皿719 壺720

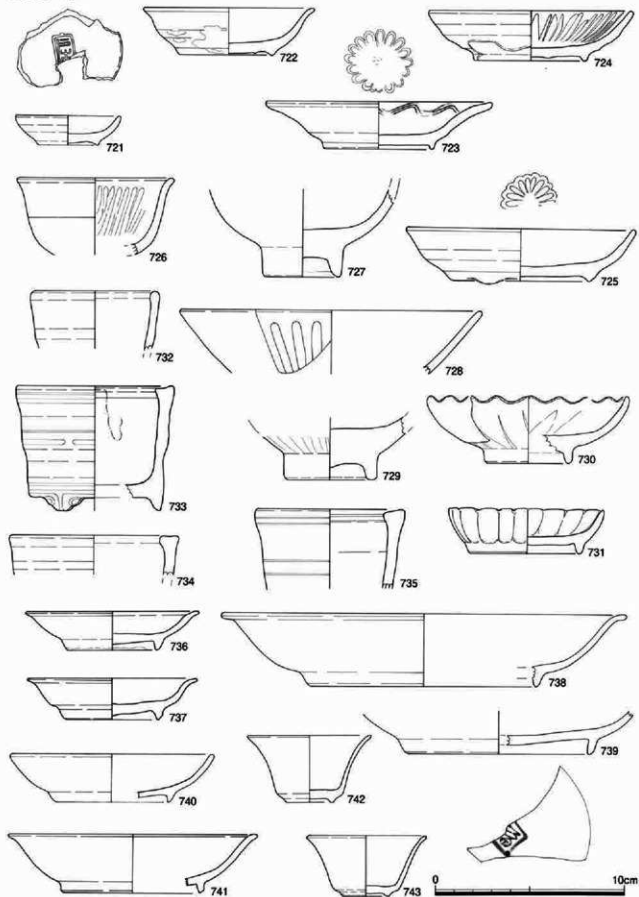




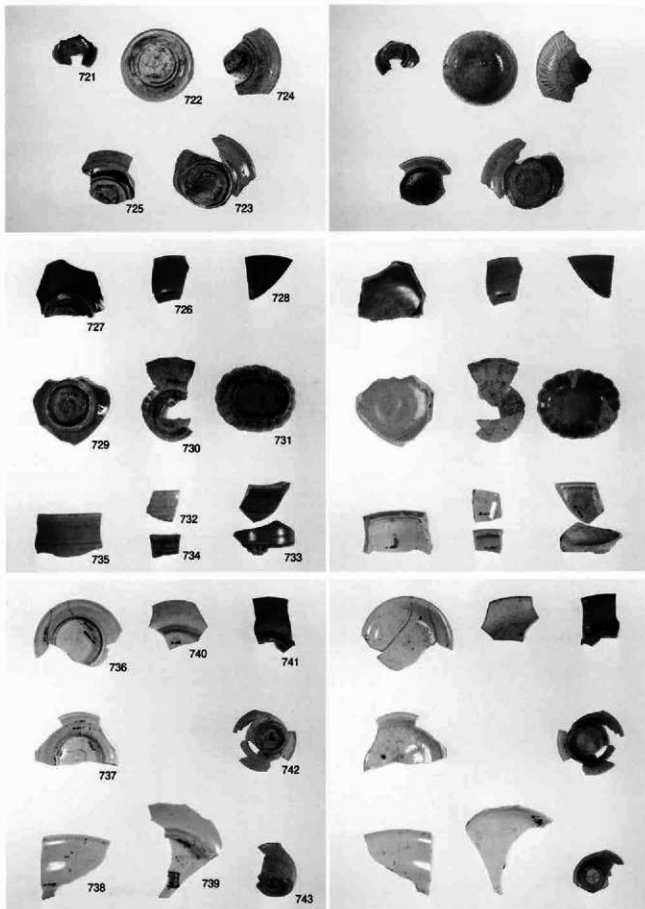
区画52-8 掘針702~704 土師質土器皿705~714 羽釜715 鉄軸碗716~718 鉄軸皿719 壺720

第54图 第52次調査出土遺物 (16)

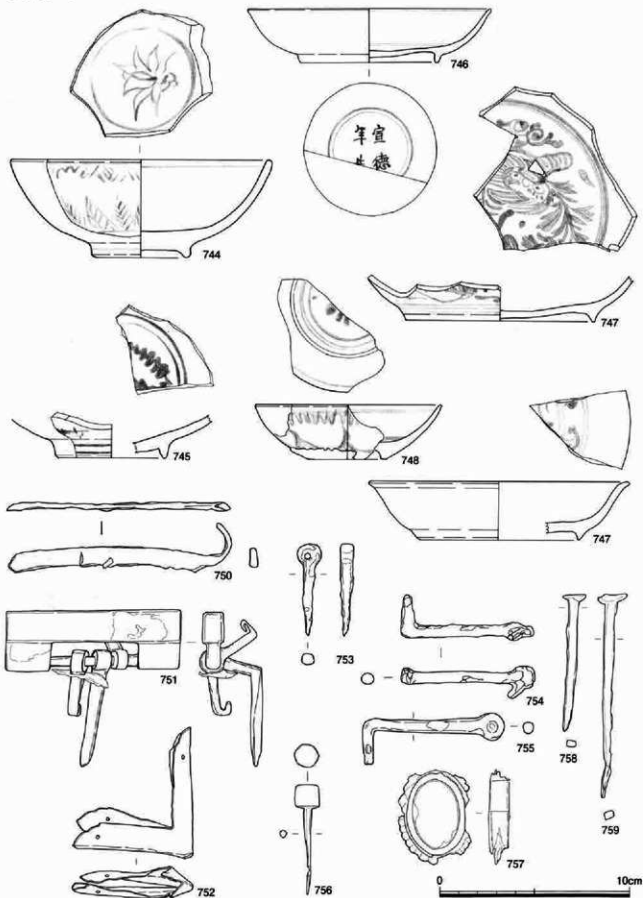
区画52-8



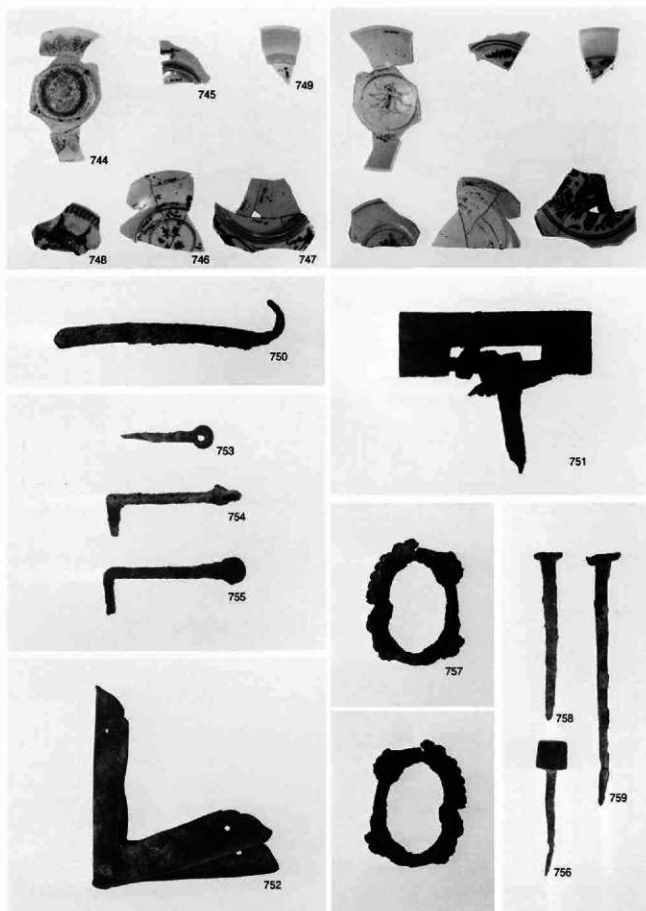
灰釉皿721~725 青磁碗726~729 菊皿730~731 香炉732~735 白磁皿736~741 坏742·743



区画52-8 灰釉皿721~725 青磁碗726~729 菊皿730~731 香炉732~735 白磁皿736~741 坏742~743



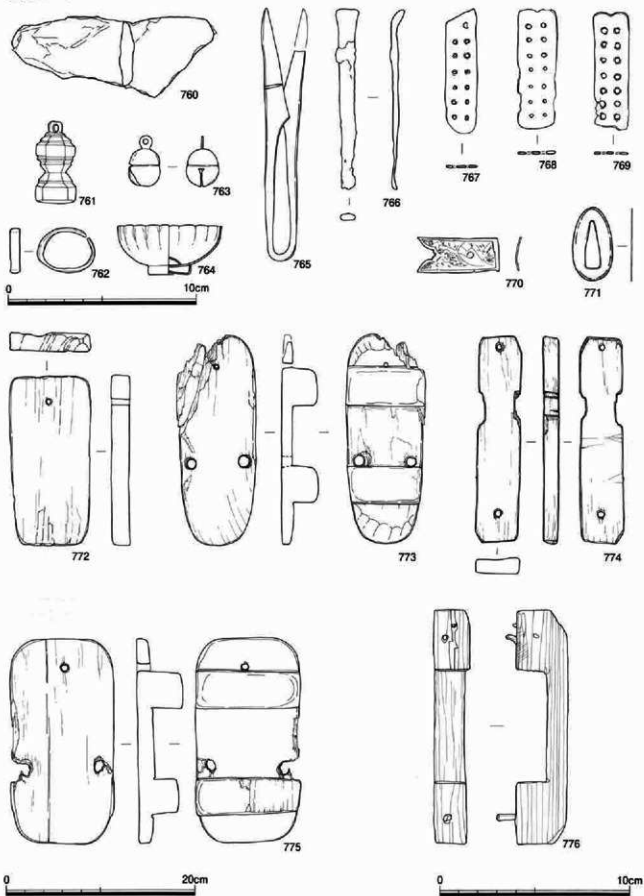
染付碗744·745 皿746~749 金属製品钩状金属製品750 錠前751 隅金具752 鍍金753 狼繫754·755  
釘状铁製品756 引手金具757 釘758·759



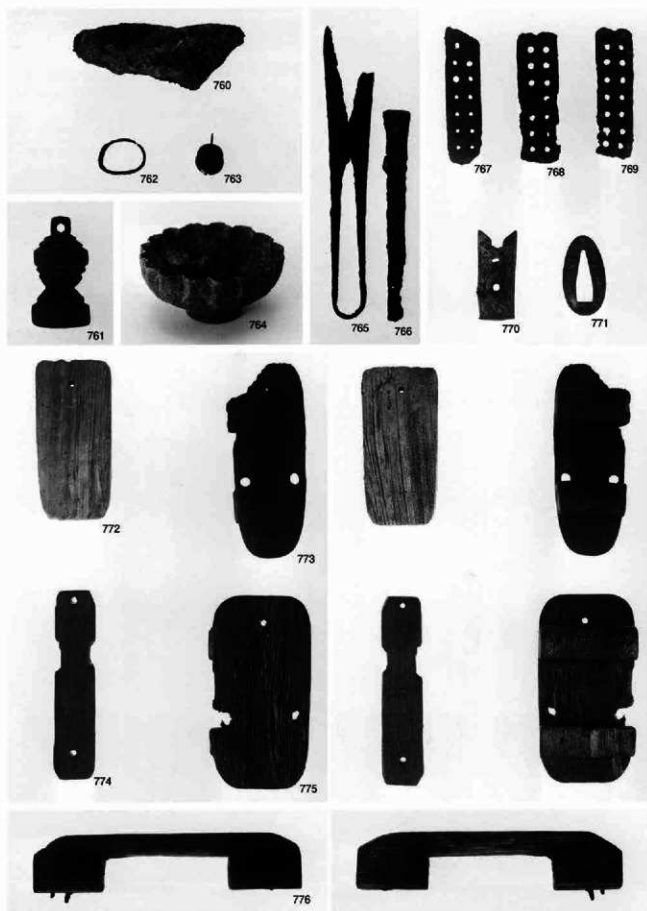
区画52-8 染付碗744・745 皿746～749 金属製品鉤状金属製品750 鏡前751 兩金具752 壺金753 狼髻754・755  
釘状鉄製品756 引手金具757 釘758・759

第56图 第52次調査出土遺物 (18)

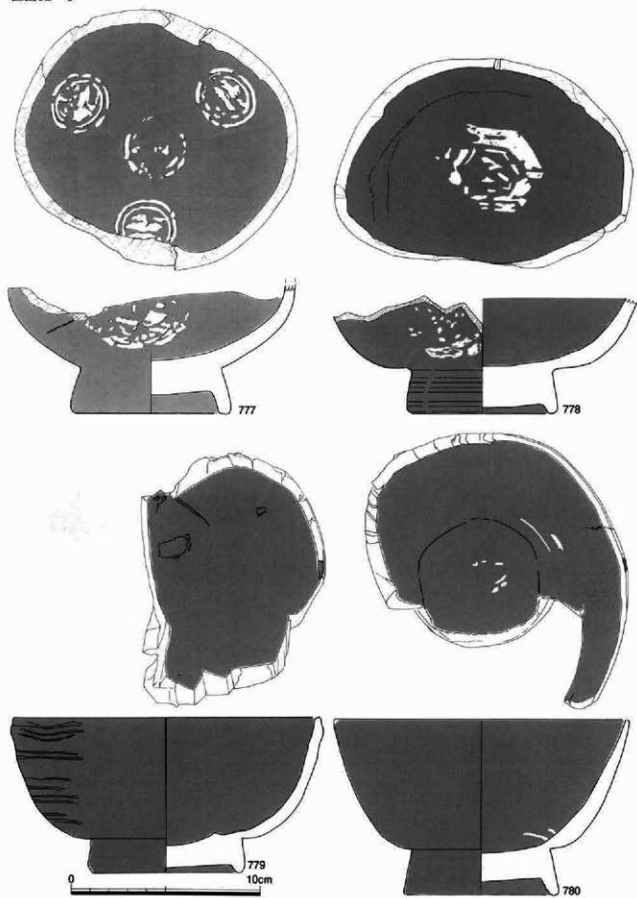
区画52-8



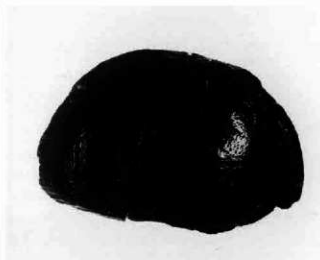
金屬製品火打金760 錘761 黃金具762 鈴763 菊皿764 鉢765 毛拔766 小札767-769 飾金具770 切羽771  
木製品雷下駄772 連雷下駄773-775 草履下駄774 取手776



区画52-8 金属製品火打金760 鍔761 鍔金具762 鈴763 菊皿764 鉄765 毛抜766 小札767-769 梅金具770 切羽771  
木製品雪下駄772 連雨下駄773-775 草履下駄774 取手776



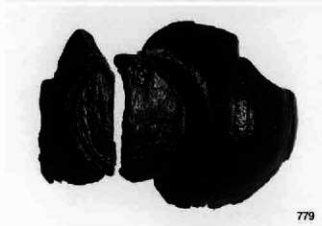
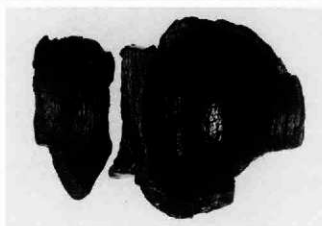




777



778



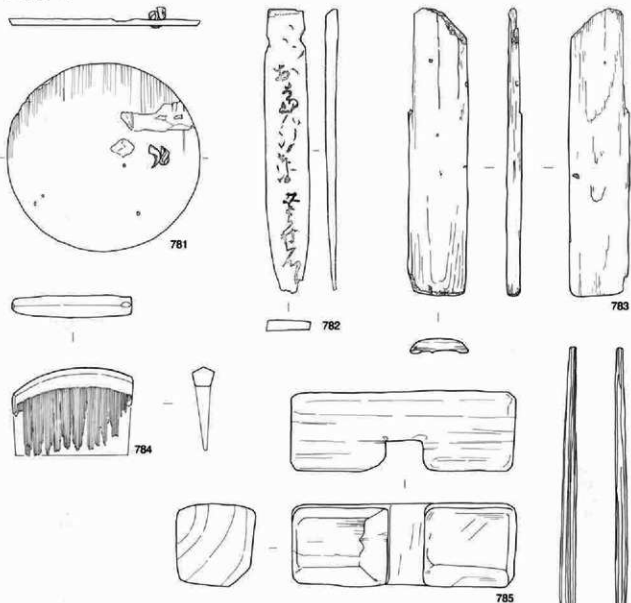
779



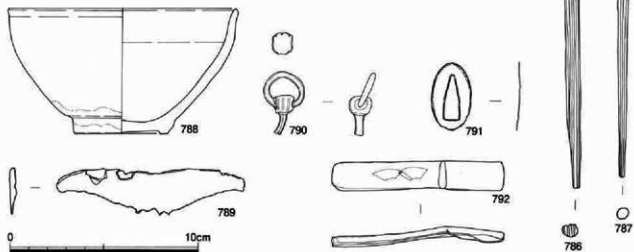
780

第58図 第52次調査出土遺物 (20)

区画52-8



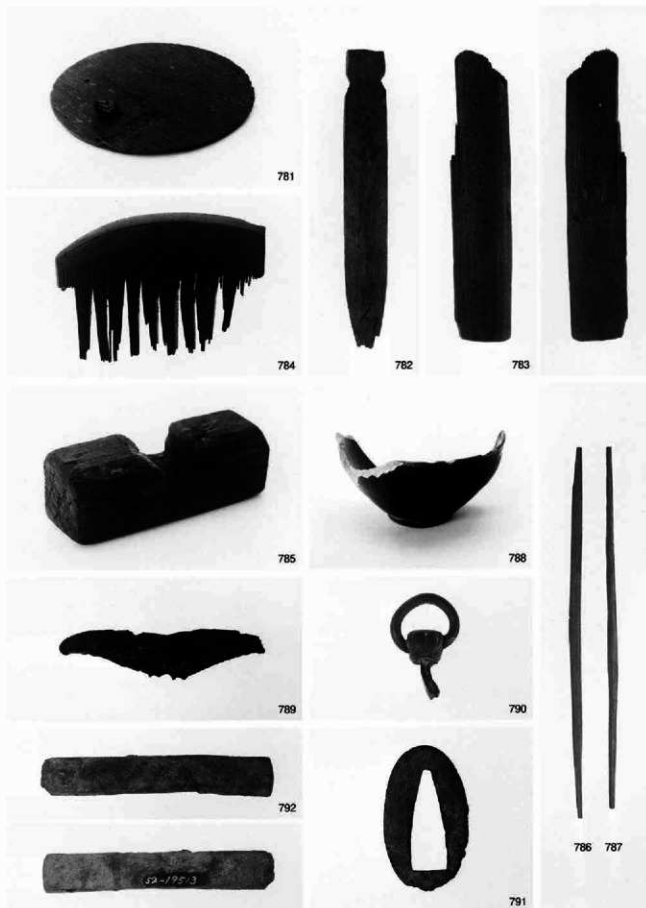
その他出土の遺物



木製品由物差781 木簡782 鞘783 櫛784 用途不明785 箸786・787

鉄輪腕788 金属製品火打金789 銀付金具790 切羽791 小柄792

0 10cm



区画52-8 木製品曲物蓋781 木筒782 鞘783 櫛784 用途不明785 箸786-787

その他出土地の遺物 鉄輪碗788 金属製品火打金789 釦付金具790 切羽791 小柄792

## IV 小 結

## Ⅳ 小 結

### 第51・52次調査区の町割り

両調査区は吉野本地係りにある。東に一乗谷川が流れ、西は御登山の麓で、「一乗谷古絵図」によれば「法万寺」があったとされる。北は奥間野地係・赤淵地係とつながり、これまでに発掘調査が終了している地区である。

赤淵地区から吉野本地区にかけての基本的な町割りは以下のようにになっている(挿図14)。

一乗谷川に沿うように、幅8mの南北方向の幹線道路がある。これに対して東西方向の道路が3本はほぼ直角に交わる。これら3本の東西道路の間隔は約106mで、35丈とみられる。なお、この幹線道路の通称は不明であるが、北の東西道路は足利義昭が朝倉館を訪問したときの辻固めの記録から「上殿の橋の通り」と称されていたと推定されている。

南北方向の大通りに面して幅0.3m程の溝で区画された地口6m～9m、奥行12m～15mの小区画の屋敷地が並ぶ。これらの小区画には間口3間×奥行4間程の家が建つ。家の中には井戸があり裏には24m～40mの裏庭があって、ここには枳所が設置されている。これら家々の中には畑があってトリバや鉾津が出土した家、越前焼の大甕が8～16個体2列に並べて設置されている家のほか、水晶の破片や数珠玉、板の皮や薄いへぎ板が出土した家がある。このことからこれらの小区画の家々は職人や商人の家と推定している。すなわち、南北方向の幹線道路に沿って小区画の職人や商人の家々が、軒を連ねて建っていた都市的景観が想定される。また、井戸や枳所があることや、となり屋敷とは溝ではっきり区画されていることから、ある武士の被官のような関係を有しているかどうかは別にして、ある程度独立した職人や商人だったと推定される。



挿図14 赤淵・奥間野・吉野本地区概念図

また、幹線道路に沿った小区画は町割が出来たときから3回程度の建て替えが認められるが、基本的には区画を変更することなく、嵩上げによって建て替えている。町割当初から商工業者の地区として造られたことがわかる。

これに対して第40次調査区においては、大通りに面した町屋の裏手にある小区画は、井戸や便所が共同になっていたり、屋敷を区画する溝が浅く最終時期だけだったりするなど、武家屋敷が分割されたと考えられる地区がある。同様に第51次調査区の51-3-12なども井戸や便所がない家もあり、後に小区画に分割された地区であろう。この場合は、溝がやや深いところから、やや早くに分割され、一乗谷が滅亡する間に建て替えられた家もある。

南北方向の幹線道路に面して立ち並ぶ町屋の背後に、これらの町屋を数軒合わせた程の500m<sup>2</sup>前後の屋敷地が並ぶ。これらの中には以前報告した第49次・50次調査で見られたように通りから見える表側や両脇は土塀で囲んでいるが、裏側はそうした施設がない。区画51-15の「医師の家」、52-7-8のように両脇のとなり屋敷との境界も溝があるだけで土塀を築いていない場合もある。こうした屋敷地は中級武家屋敷か有力職人・商人の家と推定されている。

赤淵・奥間野・吉野本地区の山裾には「サイゴ寺」をはじめ40次地区の寺院が存在する。一乗谷古絵図では「遊楽寺」や「西光寺」、「法万寺」などの寺院名も見え、さらに八地谷には「雲正寺」もあったとされ、この地区の山裾が近世における寺町的な所だったといえよう。

このように赤淵から吉野本地区にかけては、南北方向の幹線道路に沿って職人・商人の住む町屋地区、それと直交する東西方向の道路に面しては中級武家屋敷・「医師の家」か有力職人・商人の家、さらに山裾には寺院群と区割りされていたことがわかる。

## 医師の家

第51次調査区に「湯液本草」という医学書が出土したことから「医師の家」とされている区画がある。規模は地口14m×奥行33mあり、後に地口が4m広がって面積は500m<sup>2</sup>程である。東西方向の大通りに面したところに薬門と土塀を設け、西側も大通りから10m分だけ土塀を設けている。内部は大きく3つに別れる。表通り側には東西4間×南北5間の建物が建つ。この建物と土塀との間には井戸と小さな石組を組み合わせた2m×8m程の小庭園が設けられていることから、診察室を含めた表向きの空間と考えられる。中ほどは石積遺構や越前焼大甕を設置した遺構があることから、この家の生活を支える日常雑舎が建つ空間である。奥にあたる南の空間には3間×4間ほどの建物があり、離れの建物であろうか。このように表向きの建物と内向きの建物あり、表向きの建物には庭園を設けるなど基本的には朝倉館の構成を踏襲しているといえよう。ただ屋敷の面積が狭く建てられる建物も限られているので、朝倉館では機能別に建てられていた建物が一つにまとまっている。また「医師の家」からは青白磁の梅瓶や甕で修理した青磁花生など武士としてのステータスシンボリックな陶磁器類が出土している。

こうした屋敷の規模と屋敷内の構成から、医師の家を含めて800m<sup>2</sup>～400m<sup>2</sup>の屋敷について考えてみたい。平井～河合殿地区にかけては1,200m<sup>2</sup>を越える敷地を有し、幅が広くしっかりとした土塀で屋敷を囲む有力な武家屋敷が多く、ひとクラス小さい規模の屋敷は平井～河合殿地区には少ない。これに対し赤淵～吉野本地区では寺院を除き大規模な武家屋敷はなく医師の家のような面積にして500m<sup>2</sup>ほどの屋敷が多く見られる。例えばまた、区画44-1や区画44-2のように屋敷地はほぼ同じ面積ながら土塀を持たない家もある（以下区画という記載を省略する）。49-1や50-1の場合、それぞれ地口20m×

20m・面積400㎡、地口30m×奥行20m・面積600㎡で、表通りに面して土塀を有し、その中ほどに薬医門形式の門を開いている。49-1は東側が路地となっているが、こちらには土塀をめぐらせていない。西側は50-1と土塀を共有しているが、49-1側に溝があって、土塀は50-1が築いたものである。50-1も表通りと両側の3方に土塀を巡らせているが、裏の屋敷の境には土塀はない。49-1の屋敷は6間×3間半の主屋と3間×2間の蔵のほか、小規模な日常雑倉からなるようである。50-1は削平されていて不明な点が多いが、主屋の他に2間半×2間半の蔵がある。52-8も通りに面して土塀と門を設け、敷地面積も660㎡とこれらの中では大きい。主屋は不明ながら2間四方の蔵を有する。これらの屋敷は面積が800㎡～400㎡と大規模な武家屋敷と比較するとかなり小規模ではあるが、前面に土塀と門があり、内部構成は主屋と蔵に雑倉からなる屋敷は、中級の武士の屋敷と見てよいだろう。とすれば、医師は身分的に中級武士と同格とみなされていたことがわかる。朝倉氏に関連した医師では三段崎氏や大月氏が知られるが、いずれも武士の出自である。

これに対して52-7は通りに面して土塀と門を設けてはいるが、面積が360㎡と狭い。また、51-4は面積が550㎡と中級武家屋敷と変わらないが、大通りに面せず、町屋1軒分奥に下がっており土塀や門を持たない。内部の建物構成は不明な点が多いが、かなりしっかりした建物があり、日常雑倉も別に建っている。ただ蔵と思われる建物は見当たらない。このような屋敷地はどのように位置づければよいのだろうか。

同じく、門と土塀を持たないがこれらとはほぼ同面積の屋敷が44次調査で2軒見つかった。両屋敷は赤瀬地区の南北道路に面して立ち並ぶ町屋群の裏手に位置し、山裾の寺院へ行くための路地に面している。44-10は面積530㎡あり、4間半×3間半の建物ともう1棟建っていたようである。44-11は480㎡あり、9間×4間の建物が建っていたとされる。ただ、両屋敷とも土塀と門を持たず、蔵が見当たらない点が、49-52次調査で見られた同規模の屋敷群と異なる。やや時代は下がるが、堺では蔵のある商家がみつかり、一乗谷でも蔵を持つ商家があっても不思議ではない。しかし土塀については少なくとも前面には不要であろう。44-10からは未使用の砥石と墨壺の滑車が出土したことから大工の棟梁的な人物の屋敷と想定され、また、44-11からは火縄銃の部品と鉛の弾丸、鉛の地金1貫目分が出土したことから、鉄砲に関連した職人の家ではないかと想定する向きもある。いずれにしても武家屋敷ではないと考えられている。こうしたことから二つの屋敷は有力商人か職人頭的な屋敷であろう。

### 医師の家出土の遺物群

医師の家から青白磁梅瓶をはじめ青磁盤、青磁片口、白磁印花文皿などが出土している。その屋敷から出土しているからといって必ずしもその屋敷のものだったとは限らないが、『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡XVI』で分析しているように、医師の家から北に広がる焼土層からその大半が出土していることから、医師の家のものだったと考えてまず間違いはないといえる。

青白磁梅瓶は13世紀の製品であり、青磁片口や青磁鉢も13世紀の製品で、朝倉時代より300年前の片口青磁鉢と青磁下煎花生には器で修理した痕がある。青磁碗「馬鯉群」の例を引くまでもなく優品と意識された品々である。51次調査出土の製品はやや質が劣るかもしれないが、朝倉館で出土したそれらの破片と同じ組み合わせである。他の武家屋敷の場合は、滅亡後拡散されて遺物がまとまって出土することは少ないが、やはり古い時代の青磁鉢や青磁花生などが出土する。そこには共通した意識が隠されているようである。こうした品々は威信財とされ、遠く鎌倉時代から、室町幕府の「君台親左右帳記」を経て引き継がれてきた価値観である<sup>1)</sup>。そしてそれは、中級武家屋敷と同等と考えられる医者に

も浸透していることがわかる。ただ身分が下がれば威信財というよりも、「福富草子」の裕福になった場面に描かれている青磁盤や天目茶碗をはじめとする茶道具のように、裕福になったとき持つべき品々という意識に近づいているのではないだろうか。

## 52次調査出土の銅銭

第52次調査の52-7の区画から3,784枚の銅銭が出土した。小児大の石を貼り付けた直径0.5m、深さ0.4mほどの穴から出土し、穴の上には底を抜いた笏谷石の鉢を被せてあった。さらに越前焼の摺鉢で蓋がしてあった。この施設のすぐ脇に礎石があったことから、床下に隠してあったものと考えられ、転用した笏谷製の鉢を通して出し入れできるようになっていた。この施設は一乗谷最終時期まで存続したと考えられ、やや想像を加えるならば一乗谷滅亡時の混乱の中で忘れ去られたのではないだろうか。

銭種は表4-7のとおりで、北宋銭が多い点は一乗谷の出土銭傾向と一致する。しかし第52次調査埋蔵銭の中に永楽通寶が169枚あり、永楽通寶の割合が高い点が少し異なっている。1989年の時点での計数ではあるが、永楽通寶の割合は一乗谷出土銭全体で1.56%なのに対して4.47%ある。また一乗谷全体で出土した永楽通寶は420枚なので、第52次調査出土のそれは40.2%を占める。また、第57次調査で井戸底16,594枚の銅銭が出土している。この場合も一乗谷滅亡時に井戸に投げ込まれたと推測しているが、永楽通寶は48枚しかない。このように第52次調査出土の永楽通寶は特殊な存在であることがわかる。なお、当初永楽通寶は西日本では価値の低い銭とされ大内氏の撰銭令のように撰銭の対象となり、逆に東国では価値の高い銭とされた。

なお永井久美男氏の調査によれば、第57次調査出土の銅銭の中には340枚の本邦模倣銭が含まれているが、この埋蔵銭の中には模倣銭を含んでいないとのことである<sup>(1)</sup>。

他にまとめて出土したのものとしては、安養寺跡の境内から280枚、「サイゴ寺」境内の溝の中から194枚、第29次調査でSS975道路上の焼土の中から531枚、いずれも差鏡状態かそれに近い状態で出土したものである。他に第35次調査で町屋の井戸の中から410枚がまとめて出土した。合計は21,792枚である。他に、各調査地区からバラバラに出土したものは5,106枚ある<sup>(2)</sup>。まとめて出土したものとバラバラに出土したものの各銅銭の種類別の割合はほぼ同じである。大きく違うのは判読不明のもので、まとめて出土したものは21,792枚の内45枚(0.2%)なのに対して、バラバラに出土したものは5045枚の内1,154枚(22.9%)ある。こうした違いは、まとまった銅銭の場合良銭を意識して集めていたことの結果であろうか。それともバラ銭の場合は、錆びやすい環境に置かれていたために、傷みが激しく判読不明の銅銭が多くなったのであろうか。また、まとまった出土銭、特に第52次と第57次の埋蔵銭は洪武通寶、永楽通寶など明銭の割合が高い。この点も撰銭と関係あるのだろうか。

越前の場合、真珠庵文書によれば永禄8年(1565)から永禄12年(1569)のわずか4年の間にコマの値段が3倍に上がっている。同じく永禄12年の真珠庵文書には悪銭という言葉が見え、それは(良銭)の1/3の価値であった<sup>(3)</sup>。こうしたことが銅銭の出土状況にも表れているのだろうか。

## 註

- (1) 小野正敏「戦国城下町の考古学」講談社1997年発行
- (2) 永井久美男「16世紀後半における流通銭の変化」『一乗谷朝倉氏遺跡資料館紀要2000』福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館2001年発行
- (3) 月輪 泰「朝倉氏遺跡出土の銅銭について」『朝倉氏遺跡資料館紀要1989』福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館1990年発行
- (4) 「真珠庵文書」『福井市史』資料編2 福井市1989年発行



## 報告書抄録

|       |   |
|-------|---|
| ふりがな  | とくべつしせきいちじょうだにあさくらしせきはつくつちょうさほうこく         |
| 書名    | 特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡 発掘調査報告X                      |
| 副書名   | 第51・52次調査                                 |
| シリーズ番 | 10  |
| 編集者名  | 佐藤 圭                                      |
| 編集機関  | 福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館                           |
| 所在地   | 〒910-2152 福井県福井市安波賀町4-10 TEL.0776-41-2301 |
| 発行年月日 | 平成22年3月26日                                |

| 調査地区   | 所在地              | コード   |      | 北緯        | 東経         | 調査面積   | 調査原因        |
|--------|------------------|-------|------|-----------|------------|--------|-------------|
|        |                  | 市町村   | 遺跡番号 | ° ° °     | ° ° °      |        |             |
| 第51次調査 | 福井市城戸ノ内町<br>字吉野本 | 18210 | 史-31 | 35°59'56" | 136°17'53" | 1,720㎡ | 環境整備に伴う発掘調査 |
| 第52次調査 | 福井市城戸ノ内町<br>字吉野本 | 18210 | 史-31 | 35°59'57" | 136°17'52" | 1,930㎡ | 同上          |

| 調査地区   | 種別         | 主な時代    | 主な遺構                                  | 主な遺物   | 特記事項   |
|--------|------------|---------|---------------------------------------|--|--|
| 第51次調査 | 武家屋敷<br>町屋 | 15・16世紀 | 道路、溝、土塁、礎石<br>建物、門、井戸、石積<br>施設、大竈設散遺構 | 越前焼、土師質皿、鉄輪碗、<br>灰輪碗、青磁碗皿、白磁皿、<br>染付碗皿、金属製品、石製品、<br>木製品  | 屋敷跡から中国陶<br>磁の優品や匙等と<br>共に『湯波本草』<br>の写本断簡が出土 |
| 第52次調査 | 武家屋敷<br>町屋 | 15・16世紀 | 道路、土塁、石垣、溝、<br>礎石建物、井戸、石積<br>施設、門     | 越前焼・壺・搦鉢、土師質<br>皿、鉄輪、灰輪、瓦貫、青磁・<br>白磁・染付、金属製品、石製品、<br>木製品 | 遺構に伴って銅銭<br>が一括出土。墨書<br>杓子、神像など特<br>異な木製品の出土 |

平成22年3月10日 印刷

平成22年3月26日 発行

特別史跡

## 一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告X

第51・52次調査

編 集 福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館

発 行 福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館  
福井市安波賀町4-10

印 刷 白崎印刷株式会社